

もり まち
森 町

いし くら
石 倉 1 遺 跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 19 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

もり まち
森 町

いし くら
石 倉 1 遺 跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 19 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 調査状況（南から）



2 調査状況（北東から）



3 メインセクション Tライン (東から)



4 メインセクション Oライン (西から)



5 IH-1 セクション (東から)



6 IH-1 HP-3 セクション (北から)



7 IH-2 セクション (北から)



8 IH-3 セクション (北から)



9 IH-3 HP-1 セクション (南西から)



10 IH-3 HP-1 立石抜取後セクション (南から)



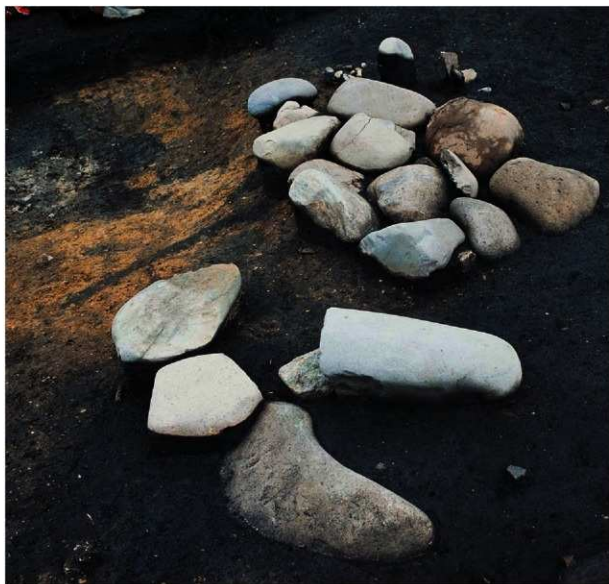
11 IH-4 セクション (東から)



12 IP-1 検出状況 (北から)



13 IP-5 セクション (南東から)



14 IS-1・3 検出状況 (東から)

例 言

1. 本書は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成14・15・16年度に発掘調査を実施した、森町石倉1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は鎌田 望・村田 大・新家水奈・大森司統が執筆した。文末に分責者名を記した。編集は鎌田・新家が行った。
3. 掲載遺物の写真撮影と写真図版作成は、第1調査部第1調査課立川トマスが行った。
4. 報告書刊行後の出土資料・記録類は森町教育委員会、写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
5. 調査にあたっては次の諸機関および各位の

ご指導・ご協力を頂いた（順不同、平成16年度調査当時市町村名、敬称略）。

北海道教育委員会

北海道考古学研究所：横山英介

森町立濁川小学校

森町教育委員会：藤田 登、荻野幸男、
佐藤 稔、高杉博章

八雲町教育委員会：三浦孝一、柴田信一、
吉田 力

七飯町教育委員会：山田 央

北斗市教育委員会：森 靖裕、三上英則、
野辺地初雄

函館市教育委員会：佐藤智雄、阿部千春、
福田裕二

苫小牧市埋蔵文化財調査センター：赤石慎三

記号等の説明

1. 遺構表記は以下の記号を使用した。
IH：住居跡 IP：土坑
IF：焼土 IS：集石
2. 遺構図の方位は真北を示す。平面図中の「+」はグリッドライン交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示す。断面図・メインセクション図中のセクションレベルは標高（単位m）である。遺構規模は、確認面での長軸長/床・底面での長軸長、確認面での短軸長/床・底面での短軸長、確認面からの最大深さ・厚さ（単位m）の順に記した。一部破壊されているものは現存長を（ ）で示した。
3. 実測図の縮尺は原則として次のとおりである。これ以外の図および例外については図内にスケールを示した。
遺 構：1/40 剥片石器・石斧：1/2
土製品・石製品：1/2 円盤状土製品：1/3
台石・石皿：1/4

台石・石皿以外の礫石器：1/3

復元土器：1/4 拓影土器：1/3

4. 写真図版の遺物掲載順および縮尺は、レイアウトの都合上、図の掲載順・縮尺とは異なる場合がある。
5. 土層の表記は、基本土層をローマ数字、遺構覆土をアラビア数字で示した。
6. 土層の観察には、『新版標準土色帖』（小川・竹原 2004）、『土壌調査ハンドブック 改訂版』（日本ベトロジー学会編 1997）を用いた。
7. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会 1982）による。
8. 石器の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記した。破損しているものは現存長を（ ）で示した。実測図中において、たたき痕はV-V、すり痕は↔で範囲を表した。

目 次

口 絵
例 言
記号等の説明
目 次
表 目 次
挿図目次
写真図版目次

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 遺跡の位置と環境	3
5 周辺の遺跡	4
6 調査結果の概要	8

II 調査の方法

1 調査区の設定と座標値	11
2 発掘調査の方法	11
3 整理の方法	14
(1) 一次整理	14
(2) 二次整理	14
(3) 写真および記録図面類	14
(4) 記録類と遺物の収納・管理	14
4 土層の区分	14
(1) 観察項目と記載順序	14
(2) 基本層序	15

5 遺物の分類	18
(1) 土 器	18
(2) 石 器	19
(3) 土製品・石製品	19

III 遺構とその遺物

1 概 要	20
2 住居跡	21
3 土 坑	24
4 集 石	29

IV 包含層出土の遺物

1 土 器	52
2 石 器	69
3 土製品・石製品	71

V まとめ

1 縄文時代中期の遺構	101
2 縄文時代後期の遺構	101

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

目 次

I 調査の概要

表 I-1	周辺の遺跡一覧	6
表 I-2	検出遺構数一覧	8
表 I-3	出土遺物点数一覧	8

II 調査の方法

表 II-1	基本層序属性一覧	15
--------	----------	----

III 遺構とその遺物

表 III-1	検出遺構一覧	48
---------	--------	----

表 III-2	遺構出土遺物点数一覧	49
表 III-3	遺構出土掲載土器一覧	50
表 III-4	遺構出土掲載石器一覧	51

IV 包含層出土の遺物

表 IV-1	包含層出土層別別 遺物点数一覧	88
表 IV-2	包含層出土掲載土器一覧	89
表 IV-3	包含層出土掲載石器一覧	93

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I-1	森町の位置と遺跡の位置	2
図 I-2	周辺の遺跡	5
図 I-3	平成16年調査範囲 調査開始前地形図	9
図 I-4	調査最終面地形図 ・遺構位置図	10

II 調査の方法

図 II-1	調査範囲と周辺の地形	12
図 II-2	グリッド設定図	13
図 II-3	基本土層柱状図	15
図 II-4	メインセクション (1)	16
図 II-5	メインセクション (2)	17

III 遺構とその遺物

図 III-1	遺構集中部分拡大図	20
図 III-2	IH-1 (1)	30
図 III-3	IH-1 (2)	31
図 III-4	IH-2	32
図 III-5	IH-3 (1)	33
図 III-6	IH-3 (2)、IH-4 (1)	34
図 III-7	IH-4 (2)、IP-1	35

図 III-8	IP-2~4	36
図 III-9	IP-5~6	37
図 III-10	IP-7~9	38
図 III-11	IP-10~12	39
図 III-12	IP-13~15	40
図 III-13	IP-16~19	41
図 III-14	IS-1~3	42
図 III-15	IH-1・2出土の遺物	43
図 III-16	IH-2出土の遺物	44
図 III-17	IH-3出土の遺物	45
図 III-18	IH-4出土の遺物	46
図 III-19	IP-5・7~9・13・14、 IS-1出土の遺物	47

IV 包含層出土の遺物

図 IV-1	包含層出土の土器 (1)	57
図 IV-2	包含層出土の土器 (2)	58
図 IV-3	包含層出土の土器 (3)	59
図 IV-4	包含層出土の土器 (4)	60
図 IV-5	包含層出土の土器 (5)	61
図 IV-6	包含層出土の土器 (6)	62
図 IV-7	包含層出土の土器 (7)	63
図 IV-8	包含層出土の土器 (8)	64

図Ⅳ-9	包含層出土の土器 (9) ……………65	図Ⅳ-22	包含層出土の石器 (10) ……………81
図Ⅳ-10	包含層出土の土器 (10) ……………66	図Ⅳ-23	包含層出土の石器 (11) ……………82
図Ⅳ-11	包含層出土の土器 (11) ……………67	図Ⅳ-24	包含層出土の石器 (12) ……………83
図Ⅳ-12	包含層出土の土器 (12) ……………68	図Ⅳ-25	包含層出土の石器 (13) ……………84
図Ⅳ-13	包含層出土の石器 (1) ……………72	図Ⅳ-26	包含層出土の石器 (14) ……………85
図Ⅳ-14	包含層出土の石器 (2) ……………73	図Ⅳ-27	包含層出土の石器 (15)、 土製品・石製品……………86
図Ⅳ-15	包含層出土の石器 (3) ……………74	図Ⅳ-28	包含層出土の石器 (16)、 石製品……………87
図Ⅳ-16	包含層出土の石器 (4) ……………75	図Ⅳ-29	包含層出土土器分布 (1) ……………97
図Ⅳ-17	包含層出土の石器 (5) ……………76	図Ⅳ-30	包含層出土土器分布 (2) ……………98
図Ⅳ-18	包含層出土の石器 (6) ……………77	図Ⅳ-31	包含層出土石器分布 (1) ……………99
図Ⅳ-19	包含層出土の石器 (7) ……………78	図Ⅳ-32	包含層出土石器分布 (2) ……………100
図Ⅳ-20	包含層出土の石器 (8) ……………79		
図Ⅳ-21	包含層出土の石器 (9) ……………80		

写真図版目次

口絵 1

- 1 調査状況 (南から)
- 2 調査状況 (北東から)

口絵 2

- 3 メインセクション Tライン (東から)
- 4 メインセクション Oライン (西から)

口絵 3

- 5 IH-1 セクション (東から)
- 6 IH-1 HP-3 セクション (北から)
- 7 IH-2 セクション (北から)

口絵 4

- 8 IH-3 セクション (北から)
- 9 IH-3 HP-1 セクション (南西から)
- 10 IH-3 HP-1
立石抜取後セクション (南から)
- 11 IH-4 セクション (東から)

口絵 5

- 12 IP-1 検出状況 (北から)

13 IP-5 セクション (南東から)

14 IS-1・3 検出状況 (東から)

図版 1

- 1 平成15年調査状況 (北東から)
- 2 IH-1 (南西から)

図版 2

- 3 IH-2 (北西から)
- 4 IH-3 (南西から)

図版 3

- 5 IH-4 (南西から)
- 6 IP-1 確認状況 (西から)
- 7 IP-1 セクション (西から)
- 8 IP-1 (西から)
- 9 IP-2 セクション (北東から)

図版 4

- 10 IP-2 (北東から)
- 11 IP-3 セクション (北西から)
- 12 IP-3 (北西から)

- 13 IP-4 セクション (北東から)
- 14 IP-4 (南西から)
- 15 IP-5 (南東から)
- 16 IP-6 検出状況 (北西から)
- 17 IP-6 セクション (北東から)

図版 5

- 18 IP-6 (北東から)
- 19 IP-7 セクション (北西から)
- 20 IP-7 (北西から)
- 21 IP-8 セクション (南西から)
- 22 IP-9 (北東から)
- 23 IP-10 セクション (東から)
- 24 IP-10 (東から)

図版 6

- 25 IP-11 セクション (東から)
- 26 IP-11 (東から)
- 27 IP-12 セクション (東から)
- 28 IP-12 (南東から)
- 29 IP-13 セクション (東から)
- 30 IP-13 (北東から)
- 31 IP-14 セクション (東から)

図版 7

- 32 IP-14 (東から)
- 33 IP-15 セクション (東南から)
- 34 IP-15 (北東から)
- 35 IP-16 セクション (東から)
- 36 IP-16 (東から)
- 37 IP-17 セクション (北から)
- 38 IP-17 (北東から)

図版 8

- 39 IP-18 セクション (東から)
- 40 IP-18 (北東から)
- 41 IP-19 セクション (東から)
- 42 IP-19 (東から)

- 43 IS-1・3 検出状況 (北西から)
- 44 V11区土器出土状況 (東から)
- 45 O74区IV層下位遺物出土状況 (北西から)

図版 9

- 46 平成14年調査範囲終了状況 (南から)
- 47 平成15年調査範囲終了状況 (北から)
- 48 平成16年調査範囲終了状況 (北東から)

図版 10

- 49 IH-2 の土器 (図Ⅲ-15-7)
- 50 IH-4 の土器 (図Ⅲ-18-30)
- 51 IP-5 の土器 (図Ⅲ-19-37)
- 52 IP-9 の土器 (図Ⅲ-19-45)
- 53 Ⅲ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-1)
- 54 Ⅲ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-2)

図版 11

- 55 Ⅲ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-3)
- 56 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-3-18)
- 57 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-7)
- 58 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-4)
- 59 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-6)
- 60 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-5)
- 61 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-2-11)

図版 12

- 62 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-2-15)
- 63 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-2-9)
- 64 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-2-14)
- 65 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-2-10)
- 66 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-3-16)
- 67 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-3-17)

図版 13

- 68 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-1-8)
- 69 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-3-19)
- 70 Ⅳ群 a 類土器 (図Ⅳ-3-21)

71 IV群 a 類土器 (図IV-3-20)

図版14

72 IV群 a 類土器 (図IV-2-13)

73 IV群 a 類土器 (図IV-2-12)

74 遺構出土の土器 (1) (図III-15~17)

図版15

75 遺構出土の土器 (2) (図III-17~19)、
包含層出土の土器 (1) (図IV-4)

図版16

76 包含層出土の土器 (2) (図IV-4・5)

図版17

77 包含層出土の土器 (3) (図IV-6・7)

図版18

78 包含層出土の土器 (4) (図IV-7・8)

図版19

79 包含層出土の土器 (5) (図IV-8・9)

図版20

80 包含層出土の土器 (6) (図IV-9~11)

図版21

81 包含層出土の土器 (7) (図IV-11・12)

図版22

82 遺構出土の石器 (1) (図III-15~19)

図版23

83 遺構出土の石器 (2) (図III-19)、
包含層出土の石器 (2) (図IV-13・14)

図版24

84 包含層出土の石器 (3) (図IV-15~18)

図版25

85 包含層出土の石器 (4) (図IV-18~21)

図版26

86 包含層出土の石器 (5) (図IV-21~24)

図版27

87 包含層出土の石器 (6) (図IV-24~26)

図版28

88 包含層出土の石器 (7)、土製品・石製品 (図IV-26~28)

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）北海道支社

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：石倉1遺跡（いしくらいちいせき）

（北海道教育委員会登録番号 B-15-29）

所在地：茅部郡森町字石倉町395番地ほか

発掘期間・調査面積

（平成14年度）平成14年9月2日～10月25日 1,753㎡

（平成15年度）平成15年5月6日～8月27日 1,900㎡

（平成16年度）平成16年7月5日～10月27日 700㎡

整理作業期間：平成18年4月1日～平成19年3月31日

2 調査体制

（平成14年度）

理事長 森重楯一	専務理事 宮崎 勝	常務理事 畑 宏明	総務部長 下村一久
第2調査部長 西田 茂	第3調査課 課長 熊谷仁志（発掘担当者）		
	主任 村田 大（発掘担当者）		
	主任 影浦 覚		
	文化財保護主事 大泰司統		

（平成15年度）

理事長 森重楯一	専務理事 宮崎 勝	常務理事 畑 宏明	総務部長 下村一久
第2調査部長 西田 茂	第3調査課 課長 熊谷仁志（発掘担当者）		
	主任 田中哲郎（発掘担当者）		
	主任 大泰司統（発掘担当者）		

（平成16年度）

理事長 森重楯一	専務理事 宮崎 勝	常務理事 佐藤俊和	総務部長 佐藤英一
第2調査部長 西田 茂	第4調査課 課長 工藤研治（発掘担当者）		
	主査 鎌田 望（発掘担当者）		
	主査 村田 大（発掘担当者）		
	主任 新家水奈（発掘担当者）		

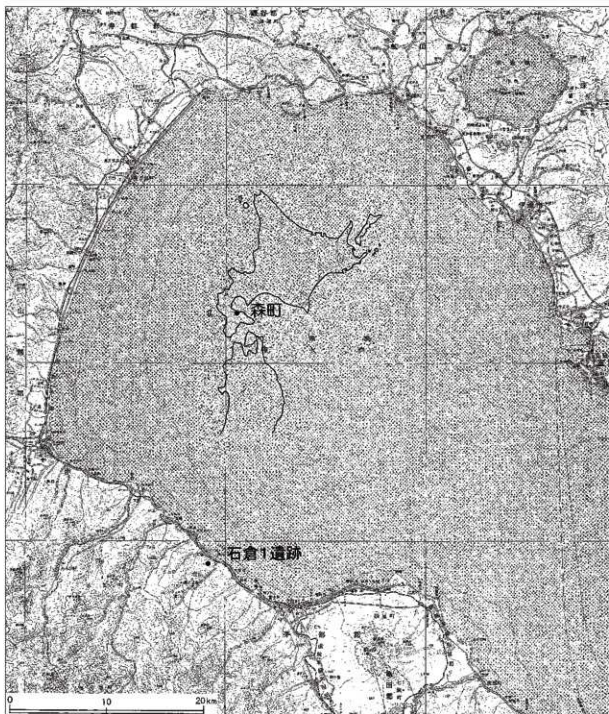
（平成18年度）（整理作業）

理事長 森重楯一	常務理事 佐藤俊和	総務部長 松本昭一
第1調査部長 千葉英一	第4調査課 課長 鈴木 信	
	主査 鎌田 望	
	主任 新家水奈	

3 調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道路は、函館市を基点として苫小牧・札幌・旭川の各市を經由して名寄市に至る総延長488kmの自動車専用道路である。このうち、八雲町八雲IC～和寒町和寒IC間359kmは既に供用されている。七飯～長万部間の路線については、平成5年11月から建設工事が進められている。

平成2年4月、日本道路公団札幌建設局（現：東日本高速道路株式会社北海道支社）から北海道教育委員会（以下、道教委）に埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての事前協議書が提出された。道教



この図は国土地理院発行の20万分の1地勢図「室蘭」（NK-54-21、平成5年2月1日発行）を複製・加筆したものである。

図 I - 1 森町の位置と遺跡の位置

委は平成2年4月と平成7年11月に所在確認調査を行い、平成5年からはこの路線の北側の長万部町から試掘調査を開始した。七飯～長万部間の発掘調査の一部については、財団法人北海道埋蔵文化財センターが委託を受け、平成10年度から行なっている。平成11年度には長万部町内の調査を終了した。八雲町内の遺跡の調査は平成13年度に終了した。平成13年度からは森町内の遺跡の調査を行なっている。

石倉1遺跡は平成2年4月に所在確認調査、平成14年7月に試掘調査が行なわれた。この調査結果に基づき、平成14年に1,753㎡、平成15年度に1,900㎡、平成16年度に700㎡の発掘調査を行なった。

4 遺跡の位置と環境

森町は平成17年4月1日に旧森町と旧砂原町が合併し、町名を「森町」とする新自治体となった。北海道西南部、内浦湾に面した渡島半島中ほどに位置し、行政区画上は渡島支庁管内茅部郡に属する。遺跡は森町市街地より北西約7～12kmの字石倉町にある。字石倉町は北東が海、南西には山が迫る地勢で、茂無部川（もなしべがわ）、本内川（ほんないがわ）、三次郎川（さんじろうがわ）（山野川）、石倉川（いしくらがわ）、石川の沢川（いしかわのさわがわ）、濁川（にごりがわ）など噴火湾に注ぐ河川がある。これらに面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には縄文時代前期後半～晩期、続縄文時代の遺跡が分布する。

森町は道内でも最も温暖な地域のひとつである。森地域気象観測所1982～2006年の気象統計年平均値では、降水量1052mm、平均気温8.4℃、最高気温30.3℃、最低気温-16.7℃、日照時間1606.7時間、真冬日（最高気温<0℃）42日、冬日（最低気温<0℃）126日、真夏日（30℃<最高気温）2日、夏日（25℃<最高気温）24日となっている。2002～2006年の最深積雪の平均は55.4cmである。石倉付近は森町市街地より気候は涼涼である。太平洋岸の海岸地方としては霧が少ないが、5～7月には海霧に覆われることが多い。石倉1遺跡は森町市街地から北西に約9km、海岸線から約700m内陸の丘陵上に立地する。無名沢を挟んで約200m南東には濁川左岸遺跡が所在する。遺跡周辺には落葉広葉樹のクリ、クルミ、トチノキ、カツラ、ホノノキ、ナラ、エゾイタヤカエデ、エゾヤマザクラ、常緑針葉樹のイチイ、トドマツなどが繁茂し、スギ、カラマツが植林されている。

江戸時代初期の茅部郡沿岸は、津軽・南部地方や上磯・箱館方面の漁師の入植地であった。この地方に和人が入るようになったのは、天文元（1532）年に津軽の蟹田村から権四郎が春鱈漁のため漁夫を率いて砂原にやってきたのがはじまりとされている。近世初期には「箱館六ヶ場所」の一つ「茅部場所」となった（森町編 1980）『津軽一統志 巻第十之下』には、「もり」「とち崎」「かやへ」と、森町域の地名が登場する。「かやへ」には「から家四、五軒」と記録されている（北海道 1969）。寛延元（1748）年には以前より本茅部に来てニシン刺し網をやっていた亀谷文治が石倉に移住した（森町編 1980）。

石倉の元の地名は「シュウナイ」という。アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）「ウン」（…のある所）「ナイ」（川・沢）、「滝のある沢」の意である。現在の本石倉（ほんいしくら）にそそぐ小川から得た名という。また、遺跡の南東を流れる濁川は、アイヌ語で「ユウベツ」という。「ユ」（温泉）「ウン」（…のある所）「ベツ」（川）、「温泉のある川」の意である。これを、河水に温泉が流入して濁ったので、「濁川」と意識改称したものである。「シュウナイ」がどのような経緯で「石倉」となったのかは不明であるが、天明4（1784）年の『北蕃紀略』には「イシクラ」、寛政3（1791）年の菅江真澄の「えぞてぶり」には「石倉」という地名が登場している（竹内編 1987）。安政3（1856）年の記述である『竹四郎廻浦日記 巻の三十』には「石クラ」として「…此処も文化頃人家七軒有し由なるが当時四軒、人別三十二人有。」との記述があり（松浦著・高倉編 1978）、『渡島日誌 巻の四』には同様の記述に苛敷誅求により人口が減ったとの解説が加えられている（松浦著・秋葉解説 1988）。

5 周辺の遺跡

森町の旧森町の範囲では平成18年12月現在、43か所の遺跡が記載されている。これらの多くは茂無部川から森町市街地にかけての海岸段丘上と、噴火湾に注ぐ河川流域に集中している。高速道路の建設に先立って調査された茂無部川から濁川までの地域に所在する遺跡のうち、本書で報告するものを除く8か所についての概要を北から順に述べる。遺跡名の後ろに括弧で図I-2および表I-1の掲載番号を示した。

本内川右岸遺跡（ぼんないがわうがにいせき）(7) 平成14年調査、縄文時代中～後期。遺構は中期の土壌を3基検出した。遺物は中期の円筒土器上層b式、ノグップⅡ式、後期前葉の天祐寺式土器など892点出土した（財団法人北海道埋蔵文化財センター、以下道埋文と省略する 2003b）。

三次郎川左岸遺跡（さんじろうがわがにいせき）(38) 平成15・16年調査、縄文時代前期後半・後期前葉。前期後半の土坑1基、後期前葉の焼土を1か所検出した。遺物は2,028点出土した。後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式土器が大部分を占め、ほかに前期後半の円筒土器下層式、続縄文時代の恵山式、後北式土器がある（道埋文 2005h）。

三次郎川右岸遺跡（さんじろうがわがにいせき）(37) 平成15・16年調査の、縄文時代中期前半～後期前葉の集落・墓域である。遺構は住居跡19軒、配石遺構2か所、土坑83基、焼土16か所、小柱穴13基、集石6か所、フレイクチップ集中を1か所検出した。遺物は93,392点出土した。土器では後期前葉のトリサキ式、大津式、後期中葉のウサクマイC式土器が大部分を占め、ほかに前期後半の円筒土器下層式、中期中葉の円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、中期後半の榎林式、大安在B式、続縄文時代の恵山式、後北式や擦文土器などがある（道埋文 2006b）。

石倉5遺跡（いしくらごいせき）(36) 平成15・16年調査、縄文時代前期後半・後期前葉。三次郎川右岸の山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘上に立地する。下の段丘には三次郎川右岸遺跡がある。前期後半の土坑1基と後期前葉の土坑を1基検出した。遺物は前期後半の円筒土器下層d式、後期前葉のトリサキ式、続縄文時代の恵山式土器など743点出土した（道埋文 2004c・2005h）。

石倉4遺跡（いしくらよにいせき）(34) 平成16年調査、縄文時代中期後半。石倉5遺跡の南東側に隣接する。遺構はⅢ層で擦文時代以降の焼土を1か所検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層d式、中期前半の円筒土器上層式、中期後半の大安在B式など1,830点出土した（道埋文 2005h）。

石倉3遺跡（いしくらさんいせき）(33) 平成15年調査、縄文時代後期前葉。東南方向に駒ヶ岳を望む最も標高の高い地点で後期前葉の配石を伴う土坑を1基検出した。配石は重さ10～30kgの大礫と径0.5～5cm程の細～小礫の3つのまとまりからなる。いずれも安山岩が主体である。礫の下には直径1mほどの土壌を検出した。緩斜面西側ではTピットを1基検出した。遺物は後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式土器など20,221点出土した。調査範囲のほぼ全面に径5～10cm程の中礫が分布していた（道埋文 2004c）。

石倉2遺跡（いしくらにいせき）(32) 平成15年調査の、縄文時代中期後半の集落跡。急峻な尾根上に住居跡11軒、土壌9基、Tピット10基、焼土2か所、土器集中4か所、フレイク集中2か所、礫集中を1か所検出した。遺物は中期後半の榎林式、晩期後葉の聖山Ⅱ式土器など16,548点出土した（道埋文 2003f）。

濁川左岸遺跡（にごりかわさかにいせき）(22) 平成13・14・16年調査の、縄文時代前期後半～後期前葉の集落・墓域である。住居跡25軒、土坑188基、焼土（石組炉を含む）148か所、柱穴様ピット506基、配石遺構1か所、剥片集中を1か所検出した。遺物は113,887点出土した。土器では縄文時代後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式、白坂3式などが大部分を占め、前期後半の円筒土器下層式、中期前葉のサイベ沢Ⅶ式併行の土器、続縄文時代の恵山式、後北式などがある（道埋文 2003d・2004d・2007a）。

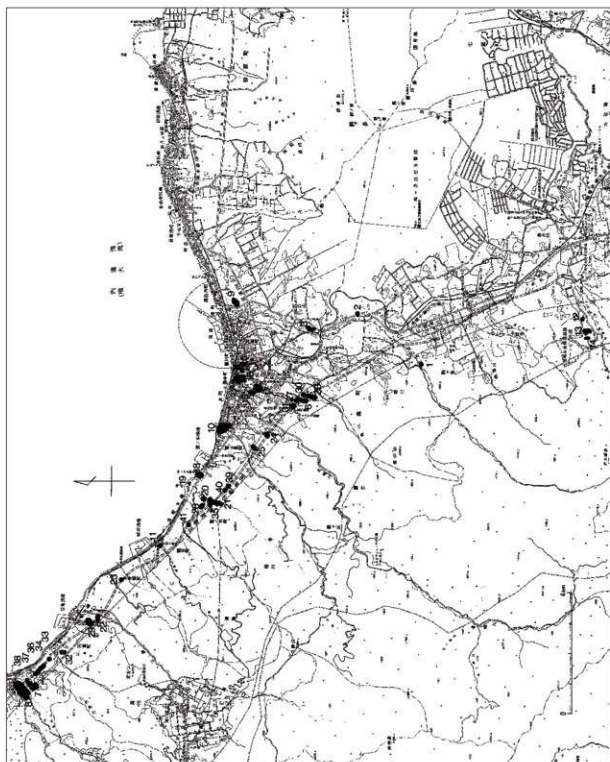


図 I-2 周辺の遺跡

表 I-1 周辺の遺跡一覧

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
1	姫川1	遺物包含地	駒ヶ岳132-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	旧姫川A遺跡、森町1980
2	姫川2	遺物包含地	駒ヶ岳17-6・216・217	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	旧姫川B遺跡、森町1980
3	白川	遺物包含地	白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文晩期、推文(北大)	貝塚あり、森町1980
4	森川貝塚	貝塚	森川町76~79ほか	海岸段丘	13~15	縄文前期(円筒下層)、続縄文(恵山)、推文、中・近世	旧森川B統合、森町1980
5	森川1	遺物包含地	森川町69-2ほか	海岸段丘	15~18	縄文前(円筒下層b)・中期(円筒上層、大木系)・後期(余市系)、続縄文(恵山)	旧森川A・C・D統合、森町1980、町教委1982
6	森川2	遺物包含地	霞台34-1、35-2	台地	80~100	縄文前(円筒下層d)・中・後期前葉・晩期後葉、推文、中・近世	町教委2004b
7	本内川右岸	遺物包含地	石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b、ノダップII、大安在B)・後期(天祐寺)	遺埋文2003a(182)
8	茂無部川右岸	遺物包含地	石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中・後期	
9	尾白内貝塚	貝塚	尾白内町926、929-1ほか	海岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A)、続縄文(恵山、推文)	森町1980、町教委1981・1993
10	鳥崎	遺物包含地	鳥崎町31-1、富士見町13ほか	海岸段丘	15~30	縄文前(円筒下層)・中期末・後期前葉・晩期、中・近世	町教委1975、森町1980
11	姥谷	遺物包含地	姥谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	森町1980
12	赤井川1	遺物包含地	赤井川229	丘陵	175~196	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2	遺物包含地	赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
14	赤井川3	遺物包含地	赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウシ	果落跡	上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早(貝殻条痕文)・中期(円筒上層c)	町教委1977、森町1980
16	御幸町	遺物包含地	御幸町132-2、清澄町3-1ほか	海岸段丘	8~20	縄文早・中(円筒上層、榎林、ノダップII)・後(十穀内系・大海系)・晩期、続縄文、推文、中・近世	町教委1985・1994
17	清澄	遺物包含地	清澄町27-1、29-2、326-16、326-18	海岸段丘	33~39	縄文中(円筒上層)・後期	森町1980
18	鷺ノ木1	遺物包含地	鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2	台場跡	鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	榎本武揚1869築
20	鷺ノ木3	遺物包含地	鷺ノ木499-2・3、500、501	河岸段丘	40~45	縄文中(円筒上層)・後期、続縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4	遺物包含地	鷺ノ木506~510	河岸台地	45~70	縄文早・中(円筒上層)・後(大津、白坂3、ウサクマイC、手稲)・晩期(中・後葉)、続縄文(恵山、後北)	2004 鷺ノ木6遺跡(上位テラス)を統合、町教委2004c
22	濁川左岸	果落跡	石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層、サイベ沢Ⅴ、見晴町、榎林、大安在B、大木9並行)・後期(涌元、トリサキ、大津、白坂3、ウサクマイC)、続縄文(恵山、後北)	遺埋文2003d(190)・2004d(208)・2007a(246)
23	本茅部1	遺物包含地	本茅部町205、272~274、294	海岸段丘	80~85	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層、見晴町)・晩期(大洞C2)・中・近世	遺埋文2003c(191)・2004b(199)
24	栗ヶ丘1	遺物包含地	栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文早・前(円筒下層)・中(円筒上層)・後(天祐寺、涌元、トリサキ、大津、白坂3、ウサクマイC、手稲、ホケマ)・晩期、続縄文(恵山)	町教委2004a
25	倉知川右岸	果落跡	栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文早(貝殻文)・前(円筒下層)・中(円筒上層b・c、サイベ沢Ⅴ、見晴町)・後期(天祐寺、涌元、トリサキ、大津、手稲、堂林)、続縄文(恵山)	遺埋文2004a(196)

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
26	森川3	集落跡	森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前(円筒下層直前、円筒下層)・中(円筒上層 a・b、サイベ沢Ⅷ、見晴町、大安在B、ノダuppⅡ)・後期(トリサキ、大津、手稲)・晩期、続縄文(恵山)	道埋文 2005 i (222)・2006 c (234)
27	上台1	遺物包含地	上台町33-1,42-1,364	丘陵	90	縄文前(円筒下層 d)・中(円筒上層 b、見晴町、ノダuppⅡ)・後期(トリサキ、大津白坂3、ウサクマイC 手稲、盛淵)・晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2005 f (217)
28	鷺ノ木5	遺物包含地	鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文早・前・中・後期(大津、白坂3)・晩期、続縄文(恵山、後北B・C1)	2003、-04 町教委調査、環状列石
29	石倉1	遺物包含地	石倉町395~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文早期(貝殻文)中(円筒上層 d、見晴町、榎林)・後期(天祐寺、浦元、トリサキ、大津、白坂3、ウサクマイC、手稲)・晩期、続縄文(恵山、後北)	道埋文 2007 b (247)
30	森川4	遺物包含地	森川町317-18	河岸段丘	90	縄文前(円筒下層 a・d)・中(円筒上層 b、サイベ沢Ⅷ、見晴町、ノダuppⅡ、煉瓦台)・後(トリサキ、大津、白坂3、ウサクマイC、手稲、盛淵)・晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2005 g (218)
31	上台2	集落跡	上台町326-5	河岸段丘 ~緩斜面	90~100	縄文早(貝殻文)・前(円筒下層 d)・中(円筒上層 a、サイベ沢Ⅷ、見晴町、榎林)・後(トリサキ、大津、白坂3、ウサクマイC、堂林)・晩期(大洞A-A')、中・近世	道埋文 2005 e (216)
32	石倉2	集落跡	石倉町46,623-1・3・4,624-1、306ほか	河岸段丘	60~75	縄文中(榎林、大安在B、ノダuppⅡ)・晩期(聖山Ⅱ)	道埋文 2003 f (197)
33	石倉3	遺物包含地	石倉町482、483、490	河岸段丘	65~75	縄文後期(天祐寺、トリサキ)	道埋文 2004 c (205)
34	石倉4	遺物包含地	石倉町511、520、521	河岸段丘	60	縄文前(円筒下層)・中期(円筒上層、大安在B)	道埋文 2005 h (219)
35	森川5	遺物包含地	森川町317-7・8、318-1	丘陵	110	縄文前(円筒下層 d)・中(サイベ沢Ⅷ~Ⅹ)期、晩期、続縄文(恵山)	2004 森川3 遺跡から分離、2004-05 町教委調査
36	石倉5	遺物包含地	石倉町512、513、519	河岸段丘	55~60	縄文前(円筒下層 d)・後期(トリサキ)、続縄文(恵山)	道埋文 2004 c (205)・2005 h (219)
37	三次郎川右岸	遺物包含地	石倉町513、516	河岸段丘	40~47	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層 b、円筒上層 c、サイベ沢Ⅷ、見晴町、大安在B、榎林)・後期(トリサキ、大津、ウサクマイC)、続縄文(恵山、後北)、藤文	道埋文 2006 b (233)
38	三次郎川左岸	遺物包含地	石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文前(円筒下層)・後期(天祐寺)、続縄文(恵山、後北C2-D)	道埋文 2005 h (219)
39	鷺ノ木7	遺物包含地	鷺ノ木町397-1ほか	尾根	60	縄文前(円筒下層 d)・中(円筒上層 b、円筒上層 c、サイベ沢Ⅷ、見晴町、榎林、大安在B)・後期(浦元、トリサキ、大津、白坂3、手稲、盛淵、堂林)・晩期、続縄文(恵山)	町教委 2006
40	鷺ノ木川右岸	遺物包含地	鷺ノ木町396	台地	60	縄文	
41	姥谷2	遺物包含地	姥谷町281	台地	80	縄文	
42	駒ヶ岳1	遺物包含地	駒ヶ岳228-10	河岸段丘	185	縄文早期(東網路Ⅳ)	2004 町教委調査
43	駒ヶ岳2	遺物包含地	駒ヶ岳470-5	河岸段丘	177	縄文後期	

* 遺跡名称の欄では「遺跡」の文字、所在地の欄では「字」の文字を省略した。

* 備考欄の四桁の数字は西暦である。

* 備考欄の森町教育委員会は「町教委」、財団法人北海道埋蔵文化財センターは「道埋文」と省略した。

* 備考欄の括弧内の数字は財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書のシリーズ番号である。

6 調査結果の概要

石倉1遺跡は縄文時代後期初頭～前葉を主体とする遺跡である。JR森駅から北西に約9km、海岸から約700m内陸の台地上に立地する。平成14～16年に調査を行なった地点の標高は約32～44mである。約200m南東方向には、無名沢を挟んで濁川左岸遺跡がある。

平成14・15・16年の3か年で4,353㎡を調査した。遺構は住居跡4軒、土坑19基と集石を3か所検出した。遺物は64,753点（土器58,914点、石器等5,817点、石製品・土製品22点）出土した。調査年度ごとの調査面積・検出遺構数は表I-2に、調査年度ごとの出土遺物点数および土器の内訳については表I-3に示した。

遺 構

4軒の住居跡のうち、IH-1～3は後期前葉のものである。IH-4も同時期のものと考えられるが、中期前半のもの可能性もある。IH-1とIH-3では地床炉と柱穴を検出した。

19基の土坑のうち縄文時代中期の可能性のあるものはIP-10～19の10基である。このうち、IP-11はIH-4やIP-5よりも古いフラスコ状土坑である。中～後期の可能性のあるものはIP-3・6の2基である。後期前葉ものはIP-1・2・4・5・7～9の7基で、そのうちIP-1・4の2基は墳口部に人頭大の大型礫をもつ。また、IP-5はIH-4を壊して構築されており、フラスコ状土坑を転用した墓である。IP-8はIH-2を壊して構築されている。墓の可能性はある。

3か所の集石は互いに隣接しており、一体のものと考えられる。IS-1は縄文時代後期前葉の土坑IP-8に伴うものである。

遺 物

土器には縄文時代早期の貝殻文土器、中期前半の円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、中期後半の榎木林式、後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式、続縄文時代の恵山式土器や後北式土器などがある。

石器等には石鏃、石錐、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、ピエス・エスキーユ、石核、フレイク、原石、石斧、北海道式石冠、すり石、たたき石、扁平打製石器、砥石、石錘、台石、石皿、礫がある。

土製品・石製品には円盤状土製品、耳栓、垂飾、北海道式石冠ミニチュア、石冠様石器、有孔礫などがある。

(録田)

表I-2 検出遺構数一覧

調査年	調査面積 (㎡)	遺 構		
		住居跡 (IH)	土 坑 (IP)	集 石 (IS)
平成14年	1,753		2	
平成15年	1,900		2	
平成16年	700	4	15	3
計	4,353	4	19	3

表I-3 出土遺物点数一覧

調査年	属性	土 器	石 器	その他	計	土器内訳										
						調査年	属性	Ia	IIb	IIIa	IIIb	IVa	IVb	V	VIa	VIb
平成14年	遺 構	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	包含層	0	0	177	0	909	1	0	0	133	1220					
	計	0	0	177	0	911	1	0	0	133	1222					
平成15年	遺 構	4	5	0	9											
	包含層	22906	3419	11	26336											
	計	22910	3424	11	26345											
平成16年	遺 構	1517	217	1	1735											
	包含層	33265	1849	8	35122											
	計	34782	2066	9	36857											
総 計		58914	5817	22	64753											

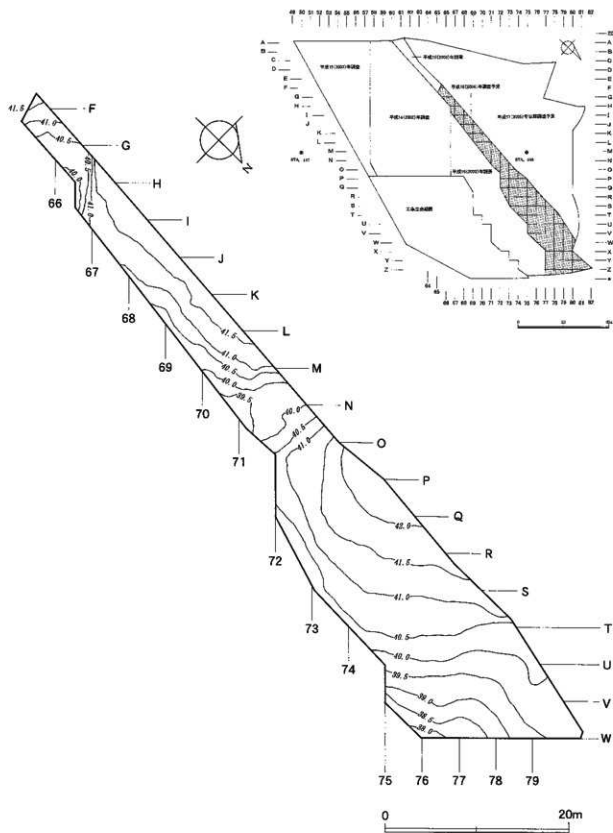


図 I - 3 平成16年調査範囲調査開始前地形図

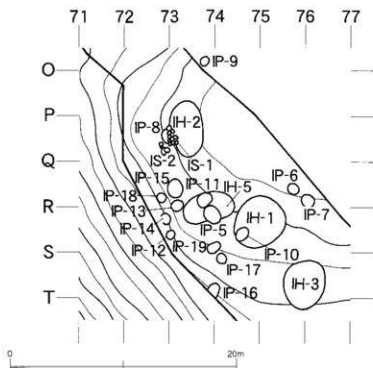
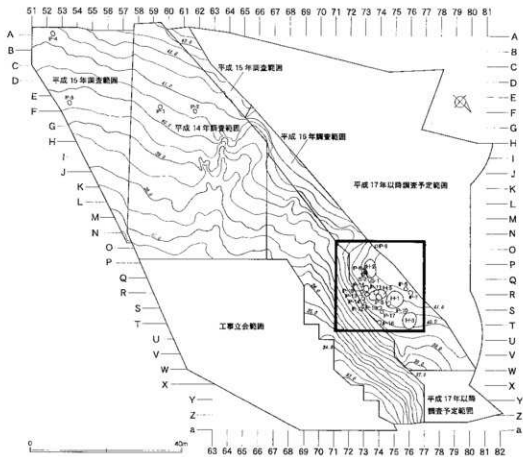


図 I - 4 調査最終面地形図・遺構位置図

II 調査の方法

1 調査区の設定と座標値

調査区は、平成14年度におこなった現地調査の際に設定したものを踏襲した。設定の際には、日本道路公団北海道支社（現：東日本高速道路株式会社北海道支社）の「北海道縦断自動車道本茅部工事平面図（2）1000分の1図」を使用している。

工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA447とSTA448を通る線を基軸のMラインとし、4m方眼を設定した（図Ⅱ-1・2）。Mラインと平行に南西へ向かってL、K、J…、さらにこれらのラインと直交し、STA447を通る線を50ラインとし、北西へ向かって51、52、53…とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する（例：H58、H65）。アルファベットと数字の間にハイフンは入れずに、遺構名と区別した。

この方眼の平面直角座標は第XI系で以下とおりである。

日本測地系	STA447（杭番号M50）	X=-205858.2892	Y=19294.5633
	STA448（杭番号M75）	X=-205781.8326	Y=19230.1288
世界測地系	STA447（杭番号M50）	X=-205601.8842	Y=19001.4165
	STA448（杭番号M75）	X=-205525.4284	Y=18936.9835

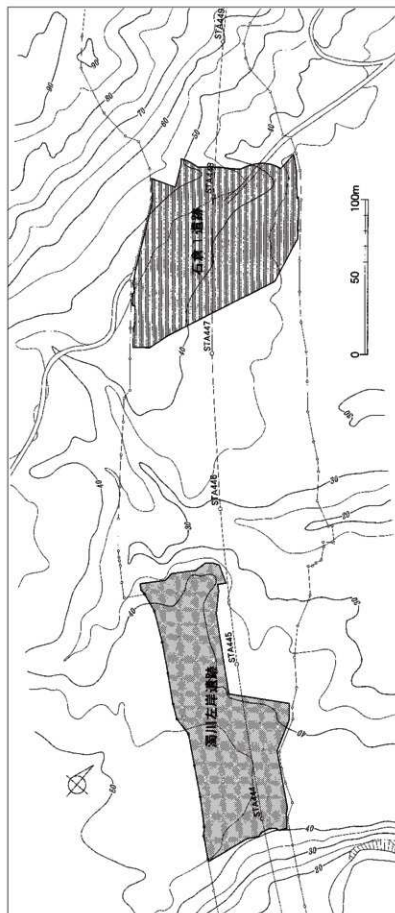
なお、この原図は函館側を起点にしており、森町から八雲町、長万部町に至る、噴火湾に沿って走る道路の形状に準じて作図されている。その結果、図の上方は常に山側となっている。このため、工事用図面に準じて作成した大縮尺の図面は、必ずしも北方向が上を向いているとは限らない。図中の北方向については、そのつど方位記号を用いて示した。（新家）

2 発掘調査の方法

調査範囲は、濁川の支流である無名沢左岸側の丘陵上にある。地形的には緩斜面、尾根部分とその下の急斜面からなる。平成14年調査範囲では緩斜面の西から北東へ向かって沢跡を検出した。この沢跡は平成16年調査範囲のF65区に発しており、調査時には湧水があった。また、平成15年調査範囲の急斜面下でも湧水があり、この湧水は平成16年調査範囲のN71区に発していた。

表土除去・地形測量

調査に先立ち、表土除去作業を行った。表土除去作業では、表土であるⅠ層と胸ヶ岳起源降下火山灰（Ko-d）層であるⅡ層を重機により除去した。測量杭を打設後、Ⅲ層上面において測量を行ない、調査開始前の地形図を作成した。



図II-1 調査範囲と周辺の地形

25%調査・包含層調査

遺物包含層はⅢ～Ⅵ層である。まず、調査範囲全体にわたり適当な間隔を空けて25%調査を行い、各層において遺物分布の濃淡を確認し、分布の濃い部分から包含層調査を行なった。Ⅲ～Ⅵ層については調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら必要に応じて移植ゴテや竹筥、片手鎌などをを用いた人力による手掘り作業によって掘り下げた。遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップとジョレンを併用して土を掘り下げて調査した。平成16年の調査では前述した湧水部分2か所の調査に先立って、あらかじめ排水溝を掘削しておき、水を排出しつつ掘り下げて調査を行った。

遺構調査

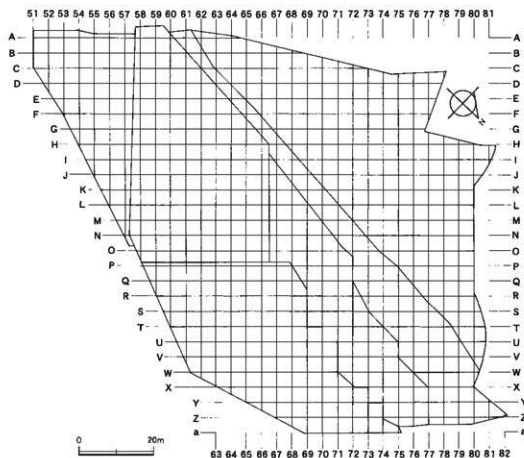
包含層調査の際に落ち込みが確認された遺構については、その平面形長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げ、適宜実測図と写真により記録した。想定される床面等の検出は、土層観察用のベルトに接してサブトレンチを掘るなどして確認につとめた。

遺物の取り上げ

包含層の遺物は、位置や層位を記録し小発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置・層位・標高を記録して取り上げた。出土状況に応じて、写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げた。

調査最終面・地形測量

遺構調査の終了後、駒ヶ岳起源降下火山灰(Ko-g)層を除去してⅥ層上面の精査を行ない、遺構・遺物がないことを確認して調査終了とした。この面において測量を行ない、調査最終面の地形図を作成した。



図Ⅱ-2 グリッド設定図

現場養生

調査終了部分には林道と平成17年度以降の調査予定範囲が接している。これらを保護するため、林道法面と調査予定範囲をビニールシートで覆い、土嚢で固定して養生した。(鎌田)

3 整理の方法

(1) 一次整理

平成14年度の調査では村田大・大泰司統が、15年度では田中哲郎・大泰司統が、16年度は鎌田望・新家水奈が一次整理をおこなった。

遺物は水洗・乾燥後、遺跡名の略称 IS 1、グリッド名(あるいは遺構名)、出土層位、遺物番号の順に注記を施した。その後遺物分類カードを作成し、日付、出土層位、点数、分類名、計測値、石器は石材等を記入し、それぞれの遺物に添付してビニール袋にて収納した。このカードに基づいた基礎台帳作成を現場で行った。

(2) 二次整理

一次整理終了後の遺物は、平成16年度に江別市のセンターで二次整理を開始した。掲載遺物の抽出・実測の指示等は、石器を鎌田望・柳瀬由佳が、石器を新家水奈が担当した。

(3) 写真および記録図面類

現場写真撮影と整理はそれぞれの年度の調査担当者がおこなった。報告書作成にあたり、現場写真ページのレイアウトは新家水奈が、焼き付けとフィルムの最終整理および管理、室内での遺物撮影と焼き付けは立川トマスが担当した。

現場でそれぞれの担当者が作成した原図は、江別市内の整理作業所において素図を作成、平成16年度に鎌田・新家がとりまとめ、トレース図を作成した。

(4) 記録類と遺物の収納・管理

報告書刊行後、出土遺物と、現場および整理作業で作成した各種記録図面は、収納台帳とともに森町教育委員会にて保存・活用される。写真フィルムは北海道立理蔵文化財センターが保管する。

収納遺物はまず報告書掲載のものと未掲載のものに分けた。掲載した遺物はおおむね掲載順に収納した。未掲載遺物は、遺構出土のものと包含層出土のものに分け、遺構出土のものは遺構ごとにコンテナに収納した。包含層出土のものは器種分類ごとに分け、さらにグリッドのアルファベット順にコンテナに収納した。掲載・未掲載を通して、これらのコンテナに番号をつけ、収納台帳を作成した。

4 土層の区分

(1) 観察項目と記載順序

石倉1遺跡の土層観察は平成14年に大泰司統が、平成16年に新家水奈が行った。土層の混在状態の表記は、基本土層記号などを用いて次の様に表した。

A + B : A と B がほぼ同量混じる A > B : A に B が少量混じる

基本層序、遺構の土層の観察には『新版標準土色帖』(小山・竹原 2004) および『土壌調査ハンドブック 改訂版』(日本ペドロジー学会編 1997) を用いた。主な観察項目と記載順序は以下のとおりである。

1. 土性区分 砂土(S)、砂壤土(SL)、壤土(L)、シルト質壤土(SIL)、埴壤土(CL)、埴土(C)に分けられる。
2. 色調 色相、明度、彩度を記号および数値で表す方法を採用した。
3. 粘着性 なし、弱、中、強に分けられる。

4. 堅密度 すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結に分けられる。
5. 下位の層との層界の明瞭性 明瞭、判然、漸変、散漫に分けられる。
6. 層界の起伏 平坦、波状、不規則、不連続に分けられる。
7. 礫の混入状況 混入面積の割合(%)、石礫の大きさ(細礫0.2~1cm、小礫1~5cm、中礫5~10cm、大礫10~20cm、巨礫20~30cm、巨岩30cm以上)、石礫の形状(角礫、亜角礫、亜円礫、円礫)、石礫の風化の度合い(未風化、半風化、風化、腐朽)、石礫の種類(軽石、堆積岩等)を記入。

(2) 基本層序 (表II-1、図II-3~5、口絵2-3・4)

I層: 表土・耕作土。

II層: 駒ヶ岳起源降下火山灰(Ko-d)層。

噴出年代は1640年。平均層厚は80cm。

III層: 黒褐色土層。

II層(Ko-d)直下の腐植土層。擦文~中・近世の遺物包含層。層厚0~10cm。

白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)層: ぶい黄褐色の層で、924~933年、944~947年に降下した白頭山苦小牧起源の火山灰層。層厚0~5cm。

IV層: 黒色土層。

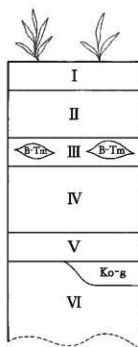
縄文時代~擦文時代の遺物包含層。層厚10~40cm。

V層: 黒褐色土層。漸移層。駒ヶ岳起源降下軽石層(Ko-g)由来の褐~黄褐色土を含む。層厚0~20cm。

駒ヶ岳火山灰層(Ko-g): 褐~黄褐色土層。約6000年前に噴出したと思われる駒ヶ岳起源降下火山灰層。層厚約0~20cm。

VI層: ぶい黄褐色土。縄文時代早期以前の遺物包含層。約12,000年前の濁川カルデラ(Ng)起源の火砕流堆積層。上部は風化再堆積(ローム)層で、グライ化している。

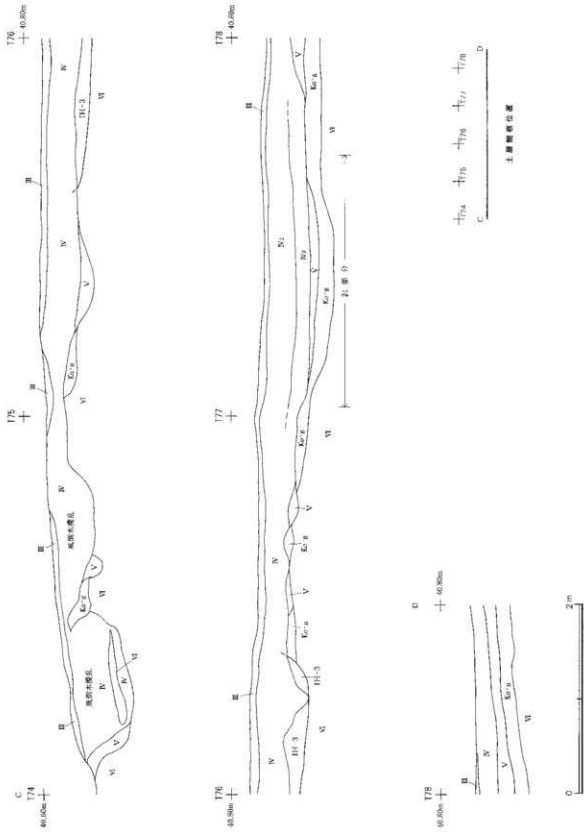
(新家)



図II-3 基本土層柱状図

表II-1 基本層序属性一覧

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	礫の混入	その他
I	表土・耕作土								
II	砂土	ぶい黄褐	10YR 5/3	無	しょう	明瞭	平坦	100% 細礫 亜角礫 未風化 軽石	駒ヶ岳起源降下火山灰(Ko-d)層
III	砂壤土	黒褐色	10YR 2/2	弱	堅	判然	平坦	なし	II層(Ko-d)直下の腐植土層 B-Tm層が若干混入
B-Tm	埴壤土	ぶい黄褐	10YR 4/3 ~5/3	中	堅	明瞭	不連続	なし	白頭山苦小牧起源降下火山灰(B-Tm)層
IV	埴壤土	黒	10YR 1.7/1	強	堅	判然	平坦	なし	遺物包含層
IV1	埴壤土	黒	10YR 2/1	強	堅	判然	平坦	なし	沢部分
IV2	埴壤土	黒	10YR 1.7/1	強	堅	判然	平坦	なし	沢部分
V	埴壤土	黒褐色	10YR 2/2	中	堅	漸変	不連続	なし	IV層とKo-g層の漸移層
Ko-g	砂土	褐~黄褐色	10YR 4.5/6	なし	堅	判然	不連続	100% 細礫 亜円礫 半風化 軽石	駒ヶ岳起源降下軽石(Ko-g)層
VI	砂壤土	褐色	10YR 4/4	弱	堅	判然	平坦	40% 細礫 亜円礫 半風化 軽石	濁川カルデラ起源火砕流堆積層



図II-5 メインセクション (2)

5 遺物の分類

(1) 土器

分類にあたっては、これまでの噴火湾沿岸、渡島半島での調査結果を基にした分類を踏襲した。

便宜上、縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。統縄文時代のはⅥ群、擦文時代のはⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせて時期差を示した。前半をa類、後半をb類、あるいは前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類とした。

本道跡ではⅣ群a類が最も多く、次いでⅢ群a類が出土している。これらのほか、Ⅲ群b類、Ⅳ群b類、Ⅵ群a類、Ⅵ群b類が若干出土している。Ⅰ群a類、Ⅱ群b類、Ⅴ群は僅かである。

Ⅰ群 縄文時代早期に属するもの

a類：貝殻文、条痕文のある土器群。

b類：縄文、撚糸文、絡条体瓦痕文、組紐瓦痕文、貼付文などのある土器群。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの

a類：縄文の施された丸底、尖底の土器群。

b類：円筒土器下層式に相当するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの

a類：円筒土器上層式に相当するもの、その系譜を引くもの（サイベ沢Ⅶ式、見晴町式）。

b類：榎林式、大安在B式、ノグップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの

a類：天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式、十腰内Ⅰ式に相当するもの。

b類：ウサクマイC式、手稲式、鯉淵式に相当するもの。

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの

a類：大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類：大洞CⅠ式、大洞CⅡ式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

Ⅵ群 統縄文時代に属するもの。

a類：恵山式に相当するもの。

b類：後北式に相当するもの。

Ⅶ群 擦文時代に属するもの。

(録田)

(2) 石器

石器の分類は、平成14年調査分については村田大が、平成15年調査分については大泰司統が、平成16年調査分については新家水奈が行なった。分類後の石器は、遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは分類器種ごとに整理台帳を作成し、点数を集計した。分類・石材鑑定は一次整理時のものをそのまま踏襲した。

報告書掲載遺物は、遺構出土、包含層出土を問わず、残存状態が良好であるもの、その器種の特徴を反映しているものを抽出しており、器種ごとの掲載点数はかならずしも出土点数と比例してはいない。

主な石材は、剥片石器には頁岩、めのうが多く使われ、黒曜石を利用したものは少ない。石斧は泥岩製が多く、まれに片岩や砂岩が使われている。礫石器はほとんどが安山岩を使用している。製品ではないが、礫として分類したものには、安山岩のほか、軽石、凝灰岩、砂岩もみられた。

掲載した石器の計測は「長さ」、「幅」、「厚さ」（それぞれ最大長）、「重さ」の項目についておこない、計測値を表にした。前者3項目は、実測図上で互いに直交する軸の数値を計測した。欠損部分があるものは、残存長の数値を（丸括弧）でくくった。「重さ」の数値は、剥片石器と100g未満の礫については、小数点第2位まで計測、石斧と100g以上の礫・礫石器は10～100gを最小単位とする数値で示した。

出土した石器の分布図は、剥片石器と礫石器に分けて作成した。

石器の分類にあたっては、下記に示した器種別の分類にとどめ、細分は行っていない。分類に使用している名称、および掲載順は以下の通りである。

剥片石器等

石槍、石鏃、石錐、つまみ付きナイフ（原則として基部は片面加工であり、「ナイフ」という呼称と矛盾するが慣習的にこの名称を用いた）、スクレイパー（原則として片面加工、刃部が周縁の3分の1以上）、Uフレイク（使用痕のある剥片）、Rフレイク（加工痕のある剥片）、ピエス・エスキーユ、石核、フレイク（剥片・細片）。

石斧・石斧片

礫・礫石器等

たたき石、扁平打製石器（機能部分が断面V字形の刃部状のもの他、平坦なすり面をもつものも含めた）、北海道式石冠、石鋸、すり石（扁平打製石器、北海道式石冠、石鋸以外の形状の「すり」機能を持つ礫石器）、砥石、石錘、石皿、台石、原石、礫（新家）

(3) 土製品・石製品

土製品

土製品には円盤状土製品と耳栓が各1点出土した。円盤状土製品は土器片を加工したものである。図IV-12に拓影図、表IV-2の末尾にデータを掲載した。耳栓は石製品と共に図IV-27に実測図、表IV-3にデータを掲載した。（鎌田）

石製品

石製品は、扁平な軽石や凝灰岩の小礫の垂飾、蛇紋岩製の玉、北海道式石冠のミニチュア、断面三角形の石冠など22点が出土している。（新家）

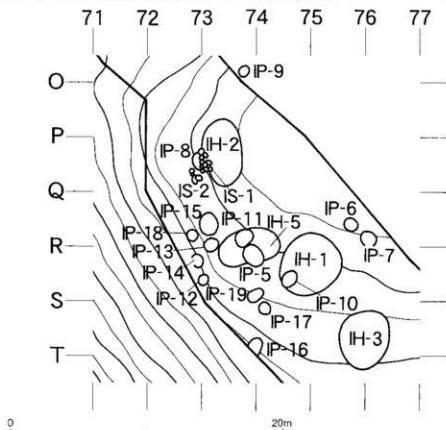
Ⅲ 遺構とその遺物

1 概要

平成14・15年の調査では北東向きの緩斜面で土坑を4基検出した。平成16年にはその緩斜面の北側、急斜面を登った丘陵部分を調査し、住居跡4軒、土坑15基、集石3か所を検出した。平成16年に調査した遺構は、崖上の東向きの日当たりの良い平坦面、緩斜面上に立地している。そのうち住居跡は平坦面側、土坑の半数以上は崖に面した緩斜面側で検出した。

4軒の住居跡のうち、IH-1～3は縄文時代後期前葉のものである。IH-4も同時期と考えられるが、中期前半の可能性もある。IH-1とIH-3では地床炉と柱穴を検出した。19基の土坑のうち縄文時代中期の可能性のあるものはIP-10～19の10基である。このうち、IP-11はIH-4やIP-5よりも古いフラスコ状土坑である。崖際で検出したIP-10～19は、黒色土の混じりが少ない覆土の様相から、丘陵上の平坦面で検出したIP-5～9よりも時期が古いと考えられる。中～後期の可能性のあるものはIP-3・6の2基である。後期前葉の可能性のものはIP-1・2・4・5・7～9の7基であり、そのうちIP-1・4の2基は墳口部に人頭大の大型礫をもつ。また、IP-5はIH-4を壊して構築されており、フラスコ状土坑を転用した墓である。IP-8はIH-2を壊して構築されている。3か所の集石は隣接しており、これらは一体のものと思われる。IS-1は前述のIP-8に伴うものである。

これらの遺構の立地する丘陵の南側、M～O70～73区には沢があり、黒色土の下には伏流水が流れていた。この沢部分の調査の際には縄文時代中期中葉～後期前葉の土器がまとめて出土した。この沢の上流、南西方向は丘陵部分に連なる緩やかな尾根となっている。この沢に面した緩斜面や尾根部分に、沢から出土した土器の時期の遺構が続いている可能性がある。(鎌田・新家)



図Ⅲ-1 遺構集中部分拡大図

2 住居跡

IH-1 (図III-2・3・15、表III-1~4、口絵3-5・6、図版1・14・22-2・74・82)

位置 Q・R74・75 立地 標高40.6~41.4m付近の緩斜面

平面形 不整楕円形 規模 4.60/4.36×4.07/(3.68)×0.22m

確認・調査 VI層上面で、IV層起源の黒褐色土の落ち込みとして検出した。土層観察用のベルトを十字に残して黒色土を掘り下げたところ、平坦な床面と明瞭に立ち上がる壁を確認した。

覆土 1・7層はIV層主体の黒色土層で、1は自然堆積、7は崩落土と思われる。2~6層はIV・V・VI層が混在した層で、いずれも漸变的に床面に堆積している。掘り込み面はV層中であると思われる。

形態 北側の壁が風倒木により攪乱を受けている。床は平坦で、地形上やや標高の高い南西側からやや低い北東側に向かって、緩やかに傾斜している。

付属遺構 HF-1：住居中央よりやや北東寄りの床直上で、0.44×0.24×0.06mの焼土を検出した。焼土層は粘性がなく、不明瞭である。

HP-1~8：IH-1の床面調査中、柱穴と思われる径20cm前後の黒~黒褐色土の落ち込みを検出した。半截して断面を観察し、覆土の形状が明瞭に柱様に落ち込んでいるもの8基を柱穴と判断した。いずれも床のVI層を20~60cm掘り込んでいる。配置は連続性が認められない。

遺物出土状況 覆土・床面から、縄文時代後期前葉の土器片が広い範囲で出土している。石器では、安山岩の扁平打製石器が1点覆土から出土している。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉である。

(新家)

掲載遺物 土器：1~5はIV群a類土器である。1は床出土、2は床とIV層出土の破片が接合したものの、3は覆土とのIII・IV層出土個体の破片、4は覆土出土、5は床と覆土・IV層出土の破片が接合したものである。1~3は無文地に沈線文をもつもの、4は降帯をもつもの、5は縄文のみのものである。

1には両端が連結した沈線による長楕円形文や三角形文と、連結渦巻文もしくは連結S字状文の一部とみられる文様が描かれている。沈線の溝中には赤色顔料がわずかに残存している。内面は縦にナデ調整されている。胎土には微量の砂・石英を含む。2は口縁に山形隆起部をもち、口縁が外反する。無文地の器面には単線の沈線により、口縁の形に沿って2本の沈線が引かれている。また、口縁直下から体部には、振幅の大きな垂下する蛇行文が描かれている。内面は口縁が横、体部は縦に丹念なナデ調整がされている。胎土は緻密であり、バミスと砂、微量の角閃石を含む。3は口縁に小さな台形の頂部をもつ。頂部から、連続する8の字状に粘土紐を貼り付けた貼付文を垂下させている。台形の頂部には爪による刺突文がある。無文地の器面には、半截竹管状工具による2本一組の沈線により、横位や斜位、振幅の小さな垂下する蛇行文や渦巻文の一部とみられる文様が描かれている。内面は横ナデにより丹念に調整されている。胎土は砂と海綿骨針のほか微量の細礫と角閃石を含んでいる。4は降帯をもつ。無文地の口縁に3本の降帯を巡らせ、その降帯および口唇に体部の縄文とは回転方向を変えたLR縄文を施している。内面は横にナデ調整され、指頭痕がある。胎土は砂と海綿骨針、微量の角閃石と輝石を含んでいる。5は口縁に山形隆起部をもつ。器面にはLR縄文が縦位に回転施文されている。内面は口縁が横、体部は縦に丹念なナデ調整がされている。胎土はバミスと砂、微量の角閃石を含む。

(鎌田)

石器：6は安山岩の扁平打製石器で、半分が欠失している。剥離の調整は片面の周縁のみで、機能部と想定される部分には擦痕がなく、未使用と思われる。

(新家)

IIH-2 (図III-4・15・16、表III-1~3、口絵3-7、図版2・10・14・22-3・49・74・82)

位置 O・P73 立地 標高41.2~41.8m付近の緩斜面

平面形 楕円形 規模 4.88/4.52×3.00/2.50×0.40m

確認・調査 VI層で検出した。集石IS-1がその輪郭と重なっており、IS-1を通るラインで断面を観察した。IS-1の下にはIP-8があり、この住居を切っていることがわかった。

覆土 1層はIV層、2層はV層が主体で、VI層や軽石等の混入が少ない。自然堆積と思われる。

形態 床面の輪郭はいびつで、特に北東側は、風倒木による攪乱のため、平坦ではない。

遺物出土状況 覆土から、縄文時代後期前葉の土器片が広く出土した。また、石器は石槍・スクレイパー・扁平打製石器が覆土から、石皿が床面から出土している。

時期 IS-1やIP-8よりも古い。出土遺物から、縄文時代後期前葉である。(新家)

掲載遺物 土器：7~16はIV類a類土器である。7は床とIV層出土の破片が接合したものの、8は覆土とIII・IV層出土個体の破片、9・10は覆土とIV層出土の破片が接合したものの、11・12・15・16は覆土とIV層出土個体の破片、13・14は同一個体で床・覆土・III・IV層出土の破片が接合したものである。7・9・10は口縁に縄線文が巡るもの、8は無文地に沈線文をもつもの、12・13は無文地に格子状沈線文の施されたもの、11・15・16は縄文のみのものである。

7はLR縄文を口縁部と体部で施文方向を変えている。無文地とした薄い口縁に縄線文を2条巡らせている。無文地の底部はやや張り出し、指頭痕が残る。内面は口縁部が横、体部は縦にナデ調整される。胎土にバミスと砂、微量の海綿骨針と角閃石を含む。8は口縁に山形隆起部、無文地の折り返し口縁と器面に2~3本単位の沈線文をもつ。内面は丹念な横ナデにより調整されている。胎土にバミス・砂と微量の角閃石を含む。甕口部に相当する。9は口頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁がわずかに外反する。器面にはLRの縄文を縦位に回転施文し、縄文地の口縁に縄線文を3条巡らせている。縄線文直下には補修孔がある。内面は口縁が横、口頸部は縦に丹念なナデ調整がされている。胎土はバミス・砂・海綿骨針を含む。10は口縁に山形隆起部をもつ。口頸部は膨らみを保ちつつ直立気味に立ち上がり口縁がわずかに内傾する。器面にはLRの縄文を斜位に回転施文し、無文地の折り返し口縁に縄線文を2条巡らせている。内面は斜位にナデ調整される。胎土に砂・バミスと微量の角閃石を含む。11は隆帯をもつ。外傾貼付による口縁と体部では回転方向を変えたLR縄文が施されている。内面調整は横ナデ、胎土にバミス・砂と微量の角閃石を含む。12・13は無文地の器面に格子状沈線文をもつ。14は13の底部である。底面に木葉跡がある。内面はいずれも横ナデにより調整されており、12の調整は丹念である。12は胎土にバミス・砂と微量の細礫・角閃石を含む。13・14の胎土は11に似るが、砂・角閃石をより多く含む。15は口縁に横回転、体部に縦回転と施文方向を変えてLR縄文が施されている。内面調整は横ナデである。胎土はバミス・砂が多く、微量の角閃石を含む。16は器面に縦回転のLR縄文が施されている。内面は口縁が横、体部は縦に丹念なナデ調整がされている。胎土に砂・海綿骨針、微量のバミスを含む。(鎌田)

石器：17は有茎の石槍である。先端部がやや尖り気味な点を除けば、倉知川右岸遺跡出土の「両面調整石器」に似る(北理調報 196)。両面の周縁に調整が施され、縦断面が湾曲している。18はスクレイパーである。上半分が欠損している。刃部の調整は裏面の片縁にのみ施されている。19は扁平打製石器である。素材の周縁を剥離調整している。一部、大きく欠落している。機能部分は素材の長軸に平行した一辺で、なめらかで平坦なすり面を持つ。20は安山岩の石皿である。使用面は片面のみである。(新家)

IH-3 (図III-5・6・17、表III-1~4、口絵4-8~10、図版2・14・15・22-4・74・75・82)

位置 S・T75・76 立地 標高40.2~40.8m付近の緩斜面

平面形 いびつな隅丸方形 規模 4.26/3.70×3.96/3.38×0.30m

確認・調査 メインセクション土層観察用のトレンチを掘ったところ、IV層半ばで、暗褐色の落ち込みを検出した。周囲の調査を行った結果、VI層を20cm余り掘り込んだ平坦な床と、IV層、Ko-g層を掘り込んで作られた壁の立ち上がりを確認した。

覆土 V・VI層起源の暗褐色土層である。

形態 床はほぼ平坦である。壁は北東側が緩く立ち上がる。

付属遺構 HF-1: 床面のほぼ中央から0.58×0.29×0.06m大の焼土と、焼土から30cmほど離れて立石を検出した。立石を伴う炉跡と思われる。焼土の焼けは弱く、立石に使用痕はない。

HP-1~4: 住居の床面および住居の周辺を調査中、径20cm前後の黒色土の落ち込みを数か所検出した。全て半截して断面を観察し、4基を柱穴と判断した。柱穴の覆土は黒色土、黒褐色土である。HP-1は覆土から長さ36cmの礫が立石状に出土している。HP-4は住居外の南西側で検出した。

遺物出土状況 覆土、床面から、縄文時代後期前葉の土器片や石鏃、スクレイパー、扁平打製石器、礫等が広く散らして出土した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉である。(新家)

掲載遺物 土器: 21~25はIV類a類土器である。21・22・24は床出土、23は床・IV層出土個体の破片、25は床と覆土出土の破片が接合したものである。21は無文地にボタン状貼付文、22は無文地に沈線文をもつ。23・24は口縁に頂部をもつ縄文のみのもの。25は無文の底部である。

21は肩が張り、口縁部が内傾する。口縁部に縦に2個貼り付けられたボタン状貼付文には竹管状工具による刺突がある。内面は横にナデ調整され、指頭痕が目立つ。胎土は緻密であり、海綿骨針と微量の砂・バミスを含む。22は2本一組の沈線により、口縁に横線、口縁部に弧線文、その下には渦巻文とみられる文様が描かれている。内面は横にナデ調整されている。胎土にバミス・砂が多く、微量の細礫を含む。23は内傾する口縁に山形隆起部をもつ。器面には口縁際までLrの縄文が施されている。内面調整は横ナデである。胎土に海綿骨針・バミス・角閃石を含む。24は口縁に山形隆起部をもつ。器面にはLR縄文が施され口縁際がナデ調整されている。内面は縦ナデにより丹念に調整されている。胎土にバミス・砂と微量の角閃石を含む。25は底部が直立気味に立ち上がる。内面は縦ナデにより丹念に調整されている。胎土は緻密であり、微量の砂・バミス・角閃石を含む。(鎌田)

石器: 26・27は有茎の石鏃である。26は茎部にアスファルトが付着する。どちらも茎部先端を欠失する。28・29は頁岩のスクレイパーである。28は両面とも周縁に細かい調整が施されている。29は背面の長軸方向の片縁に刃部がつけられ、下方には2か所に挟りが入っている。(新家)

IH-4 (図III-6・7・18、表III-1~4、口絵4-11、図版3・10・15・22-5・50・75・82)

位置 Q・R73・74 立地 標高41.0~41.4m付近の緩斜面

平面形 楕円形 規模 4.22/3.86×(2.40)/(2.00)×0.60m

確認・調査 IP-5調査時、壁面に他の遺構のものと思われる覆土が水平に堆積しているのを検出した。IP-5調査後、周辺を精査したところ、VI層中に黒色土の落ち込みが現れた。黒色土を掘り下げたところ、平坦な床面と明瞭な壁の立ち上がりを確認した。

覆土 1層はIV層の自然堆積土、2層はV層とVI層が混在している。3層はKo-gの崩落と思われる。

形態 北東部をIP-5に切られている。床面はほぼ水平・平坦で、壁の傾斜も均一に立ち上がっ

ている。

遺物出土状況 覆土から縄文時代中、後期の土器片、石器では扁平打製石器1点、石皿1点が出ている。表中の扁平打製石器の点数が7点になっているのは、1個体が被熱により破砕し、その破片数を集計したためである。

時期 IP-5よりも古い。出土遺物から、縄文時代中期あるいは後期と考えられる。(新家)

掲載遺物 土器：30~34はIV類a類土器である。30は覆土とⅢ・IV層出土の破片が接合したもの、31~33は覆土・IV層出土、34は覆土出土である。30~32は無文地に沈線文をもつもの、33は沈線により区画した口縁を無文とするもの、34は無文のものである。

30は口縁に山形隆起部をもつ。復元の結果、反対側に対になる隆起部はない。隆起部は3か所と推定される。半截竹管状工具による垂下する蛇行沈線文が施される。蛇行沈線文の下部で隣の蛇行沈線文に連結している部分もある。内面は口縁部が横、体部は縦にナデ調整される。胎土にバミス・砂・角閃石・輝石と微量の細礫を含む。31は口縁部が内傾する。無文地の器面に半截竹管状工具による垂下する蛇行沈線文が施される。内面は丹念な横ナデにより調整される。胎土にバミス・海綿骨針と微量の細礫を含む。32は口縁に山形隆起部をもつ。頂部は欠損している。文様は無文地の器面に降帯文と沈線文を併用した半肉彫的技法による浮文となっている。内面調整は丹念な横ナデである。胎土に砂・バミスと微量の角閃石・輝石を含む。33は口縁を除いてLR縄文を施した器面に沈線を引き、口縁の無文帯を区画している。内面は横ナデにより丹念に調整されている。胎土に海綿骨針・砂と微量の角閃石を含む。34は折り返し口縁をもち器面から口縁内面には指頭痕が目立つ。内面は縦にナデ調整されている。胎土に砂と微量の石英・角閃石を含む。(鎌田)

石器：35は扁平打製石器である。安山岩の破片7点が接合したものである。両面に部分的な剥離調整がある。機能部分の縦断面はV字である。36は安山岩の石皿である。片面使用で、すり面は深く窪んでいる。(新家)

3 土坑

IP-1 (図Ⅲ-7、表Ⅲ-1・2、図版3-6~8)

位置 E49 **立地** 標高40m付近の緩斜面

平面形 円形 **規模** 1.12/1.10×1.07/0.98×0.32m

特徴 V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はV層・VI層主体の埋め戻しである。墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。覆土の上位から人頭大の礫がまとまって出土した。遺構の周囲からも大型礫が4点出土している。土壌墓の可能性もある。

時期 遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前半、IV群a類土器の時期と考えられる。(村田)

IP-2 (図Ⅲ-8、表Ⅲ-1・2、図版3・4-9・10)

位置 E61c・F61d **立地** 標高40m付近

平面形 隅丸方形 **規模** 1.18/1.20×1.05/1.05×0.26m

特徴 IV層をグライ化した濁川火砕流の面まで掘り下げたところ、IV層の落ち込みを確認した。明瞭な床面と壁面から土壌と判断した。グライ化した濁川火砕流の土層を掘り込んで作られている。掘り込み面は検出面より上である。覆土が埋め戻しか否かは不明である。覆土には褐鉄鉱がまばらではあるが、薄い層状に入り込む。墳底はおおよそ平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりで、一部オーバーハンクしている。遺物は覆土I層から礫が2点と、IV群a類土器が1点出土している。墳底面からも

礫が1点出土している。

時期 出土遺物、確認層位より縄文時代後期前葉のものである。 (大森司)

IP-3 (図Ⅲ-8、表Ⅲ-1・2、図版4-11・12)

位置 E53a・d **立地** 標高39.5~40m付近

平面形 不整楕円形 **規模** 1.17/1.03×1.01/0.78×0.08m

特徴 漸移層の上面まで掘り下げたところ、IV層の落ち込みを確認した。明瞭な床面と壁面から土壌と判断した。漸移層を掘り込んで作られている。掘り込み面は検出面より上である。覆土が埋め戻しの可能性がある。土壌の中央には木根痕と思われる痕跡が入り込む。坑底はおおよそ平坦で、壁はゆるやかに開きながら立ち上がる。

時期 周囲の遺物から縄文時代中期~後期の可能性がある。 (大森司)

IP-4 (図Ⅲ-8、表Ⅲ-1・2、図版4-13・14)

位置 Zo52b・e、A52a・d **立地** 標高39.5~40m付近

平面形 不整楕円形 **規模** 1.21/0.91×0.90/0.80×0.20m

特徴 IV層の中位まで掘り下げたところ、IV層の落ち込みに人頭大の礫が3点入り込んでいる状況を確認した。土層観察用の土手を残して掘り下げたところIV層の中位から掘り込まれていた。明瞭な床面と壁面から土壌と判断した。覆土が埋め戻しの可能性がある。土壌の中央、覆土最上部には人頭大の礫が埋め戻し後に三つ設置されていたものと推定できる。木根痕と思われる痕跡が壁面の一部に入り込む。坑底はおおよそ平坦で、壁は開きながら直立気味に立ち上がる。覆土1層から礫が大小併せて5点、IV群a類土器が2点出土している。

時期 出土遺物、確認層位より縄文時代後期前葉のものである。 (大森司)

IP-5 (図Ⅲ-9・19、表Ⅲ-1~4、図版4・10・15・22-15・51・75・82)

位置 R73・74 **立地** 標高40.6~41.0m付近の緩斜面

平面形 楕円形 **規模** 1.66/1.44×1.23/1.34×1.28m

特徴 VI層で検出した。フラスコ状土坑である。覆土はIV・V・VI層を主体とした層で、それぞれの層が、ブロック状、斑状に入り混じるため、埋め戻しと考えられる。覆土9~12層は水分を含み、粘りも強い。黒色土IV層起源の9層には、VI層起源の10・11層がブロック状に混在している。坑底はVI層を1m以上掘り抜いて平坦に作られている。壁は西側がオーバーハングしている。土坑の南側はIH-4の北東部の壁と床を掘り抜いて作られている。遺物は、覆土から縄文時代後期前葉の土器片が、坑底から石斧が出土した。

時期 出土遺物およびIH-4を切っていることから、縄文時代後期前葉と考えられる。 (鎌田)

掲載遺物 土器 : 37・38はIV群a類土器である。37は覆土とIV層出土の破片が接合したもの、38は覆土出土である。37は口縁に山形隆起部を4か所もつ無文の深鉢である。口縁はわずかに開く。胴下部~底部を欠く。器面・内面とも縦にナデ調整されている。胎土は緻密で、バミスと微量の角閃石・輝石を含む。38は無文地の口縁部に隆帯をもつ。口縁の隆帯から垂下する隆帯を付け、これに口縁部の隆帯が付けられている。垂下する隆帯は途中で剥落している。隆帯にはLR縄文が認められる。器面・内面とも横にナデ調整され指頭痕が残る。胎土はバミス・砂・細礫を含む。 (鎌田)

石器 : 39は片岩の石斧である。打ち欠き調整のあと、ほぼ全体に磨きがかけられている。石のみと思

われる。

(新家)

IP-6 (図Ⅲ-9、表Ⅲ-1・2、図版4・5-16~18)

位置 Q75 立地 標高41.4~41.6m付近の平坦面

平面形 ほぼ円形 規模 1.01/0.69×0.97/0.62×0.19m

特徴 V層調査後に検出した。覆土はIV層起源の黒色土である。自然堆積の可能性はある。壁は緩く立ち上がる。遺物は、覆土・坑底から、縄文時代中、後期の土器片数点、覆土から径約30cmの安山岩の礫が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代中期あるいは後期と考えられる。

(新家)

IP-7 (図Ⅲ-10・19、表Ⅲ-1~3、図版5・15-19・20・75)

位置 Q・R75・76 立地 標高41.4~41.6m付近の平坦面

平面形 楕円形?不明 規模 (0.84)/(0.74)×0.94/0.63×0.17m

特徴 VI層調査中に検出した。長軸方向で半截し、平坦な底と壁の立ち上がりを確認した。落ち込みに気づいた時点で、調査区R75・76側はすでに最終面まで下げてしまい、土坑の北東側を若干削平してしまった。覆土はIV層主体で、自然堆積と思われる。坑底は皿状を呈し、緩やかに傾斜している。南東側の壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土から、縄文時代後期前葉の土器片、めのうの原石が、坑底から縄文時代後期前葉の土器片が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(新家)

掲載遺物 土器：40・41はIV群a類土器である。40は坑底出土、41は坑底とIV層出土個体の破片である。40は多段の口縁に縄線文、器面にLR縄文が施される。内面は横にナデ調整され指頭痕が残る。胎土は砂・バミス・角閃石を含む。41は3本の隆帯に縄線文が施され、この縄線文をつなぐように無文地の隆帯間に斜位の縄線文が2本施される。右側の縄線文は一部がナデ消されている。体部にLR縄文が施される。内面は横にナデ調整される。胎土は微量の細礫・バミス・砂を含む。(鎌田)

IP-8 (図Ⅲ-10・19、表Ⅲ-1~4、図版5・15・22-21・75・82)

位置 P72・73 立地 標高41.0~41.4m付近の緩斜面

平面形 楕円形 規模 1.38/1.20×1.08/0.83×0.54m

特徴 IH-2調査後に、壁面に褐色土が40cmほど落ち込んでいるのを検出した。平坦な底と明瞭な壁の立ち上がりを持つことから、土坑と判断した。覆土1層はIV・V・VI層が入り混じった層で、埋め戻したものと考えられる。2層は崩落土であろう。土坑の西側がIH-2を切って作られている。覆土から、縄文時代後期前葉の土器片や、石斧、頁岩のフレイクが出土している。

時期 IH-2よりも新しい、縄文時代後期前葉である。

(新家)

掲載遺物 土器：42・43はIV群a類土器である。42は覆土とⅢ・IV層出土の個体の破片、43は覆土とIV層出土の個体の破片である。42は口縁が外反し、無文地の器面にL線に斜格子状L線文が施されている。内面は横にナデ調整されており、胎土にバミスと砂、微量の角閃石を含む。43は口縁に頂部をもち、頂部は指頭によりつままれている。器面にはRLの縄文が施されている。内面は横にナデ調整されており、胎土にバミスと微量の細礫・角閃石を含む。(鎌田)

石器：44は泥岩の石斧である。包含層出土の破片と接合している。表面は全体に磨かれている。片面と刃部を大きく欠損している。(新家)

IP-9 (図Ⅲ-10・19、表Ⅲ-1・3、図版5・10-22・52)

位置 N73 立地 標高42.4~42.6m付近の平坦面

平面形 楕円形 規模 0.80/0.60×0.60/0.34×0.14m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土は1・2層ともIV・V・VI層が入り混じった層で、埋め戻しと思われる。坑底はほぼ平坦である。南側の壁が緩やかに立ち上がる。坑底から、縄文時代後期前葉のミニチュア土器片が出土した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。(新家)

掲載遺物 土器：45はIV群a類土器である。坑底から出土した。手握ねの無文の坏である。器高3.1cm、口径6.0cm、底径3.4cmを計る。胎土にバミスを含む。(鎌田)

IP-10 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-1・2、図版5-23・24)

位置 R73 立地 標高40.2~40.4m付近の緩斜面

平面形 ほぼ円形 規模 1.13/0.80×1.02/0.67×0.48m

特徴 VI層調査中に検出した。半截して平坦な底と明瞭な壁の立ち上がりを確認した。覆土はV・VI層起源で、IV層の混じりは少なく、埋め戻しであろう。坑底はVI層を50cm掘り込んで作られ、平坦である。北側の壁に段がある。遺物は出土していない。

時期 遺物はなく、不明であるが、覆土の様相から、縄文時代中期ごろと考える。(新家)

IP-11 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-1・2、図版6-25・26)

位置 Q・R73 立地 標高40.4~40.8m付近の緩斜面

平面形 楕円形 規模 1.44/1.46×1.22/1.14×0.70m

特徴 IH-4調査中、IH-4の床面にVI層とは異なる黄褐色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。半截したところ、下部が広がるフラスコ状土坑であった。覆土の2層はV・VI層起源でやや暗め、1・3層は埋め戻されたVI層である。土坑の壁は西側と北東部がオーバーハングしている。坑底はほぼ平坦で、IH-4の床面よりもさらに40~50cmほど下にある。また、北東部の輪郭の一部をIP-5に切られている。2基の土坑の壁は隣接するが、切り合っていない。覆土から、縄文時代中期の土器片が数点出土した。

時期 切り合いから、IP-11がもっとも古く、IH-4構築の際、VI層主体とした掘り上げ土でIP-11を埋め戻し、その後IH-4が廃棄されたのち、IP-5が掘り込まれたと考える。IP-11の時期は、出土遺物から、縄文時代中期か。(新家)

IP-12 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-1・2、図版6-27・28)

位置 R73 立地 標高39.8~40.0m付近の崖の縁辺部

平面形 楕円形 規模 0.82/0.59×0.63/0.40×0.23m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土はV層主体の1層である。埋め戻しか自然堆積かは不明である。遺物は出土していない。

時期 周囲の土坑とはほぼ同時期の、縄文時代中期と思われる。(新家)

IP-13 (図Ⅲ-12・19、表Ⅲ-1・2・4、図版6・22-29・30・82)

位置 Q・R73 立地 標高40.4~40.6m付近の崖の縁辺部

平面形 ほぼ円形 規模 0.94/0.65×0.92/0.53×0.53m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土はIV・V・VI・Ko-g層が混在した埋め戻しと考えられる。坑底はほぼ平坦、壁はVI層を50cm以上掘り込んで作られ、立ち上がりの傾斜は均一である。遺物は覆土から縄文時代中期の土器片数点、北海道式石冠1点、坑底から長さ30cmほどの安山岩の礫が1点出土した。

時期 出土遺物や覆土の状況から、縄文時代中期と考えられる。

掲載遺物 石器：46は北海道式石冠である。ほぼ半分以上を欠損している。自然礫の途中に帯状の敲打痕がつけられている。すり面は敲打調整により整形され、ゆるやかに湾曲する。(新家)

IP-14 (図Ⅲ-12・19、表Ⅲ-1・2・4、図版6・7・22-31・32・82)

位置 R72・73 立地 標高39.8~40.2m付近の崖の縁辺部

平面形 楕円形? 規模 (1.05)/(0.38)×(0.50)/(0.40)×0.38m

特徴 VI層調査中に検出した。落ち込みの東側を既に最終面まで掘り下げ、削平してしまった。断面を観察した結果、椀状に落ち込んだ土坑であると判断した。覆土はIV・V・VI層が起源である。ほぼ半分を削平したため、正確な形状は不明である。覆土から、北海道式石冠が1点出土した。

時期 出土遺物から、縄文時代中期か。

掲載遺物 石器：47は北海道式石冠である。完形品で、長軸方向に鉢巻き状の敲打調整されている。すり面も敲打調整により整形され、使用によりすり面が著しく図中の正面側に傾いている。(新家)

IP-15 (図Ⅲ-12、表Ⅲ-1・2、図版7-33・34)

位置 Q73 立地 標高40.4~40.6m付近の崖の縁辺部

平面形 楕円形 規模 1.54/0.98×1.24/0.89×0.29m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土は暗褐色の堅くしまった層で、V層とVI層が混ざった埋め戻し土と思われる。坑底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

時期 覆土の状況や周辺の土坑の時期から、縄文時代中期か。(新家)

IP-16 (図Ⅲ-13、表Ⅲ-1・2、図版7-35・36)

位置 S・T73・74 立地 標高38.6~40.0m付近の崖の縁辺部

平面形 楕円形? 規模 (1.00)/(0.85)×0.96/0.74×0.46m

特徴 VI層調査中に検出した。土坑の東側を掘り過ぎたため、正確な平面形を確認できなかった。覆土はV・VI層起源の暗褐~褐色土で、埋め戻しと思われる。坑底面はほぼ平坦である。壁はVI層を40cm以上掘り込んで作られている。遺物は出土していない。

時期 覆土状況や周辺の土坑の時期から、縄文時代中期ごろか。(新家)

IP-17 (図Ⅲ-13、表Ⅲ-1・2、図版7-37・38)

位置 S74 立地 標高40.2~40.4m付近の崖の縁辺部

平面形 楕円形 規模 0.93/0.72×0.71/0.52×0.29m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土上部を掘り過ぎてしまった。覆土はV・VI層主体の埋め戻し土

と思われる。坑底はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

時期 覆土状況や周辺の土坑の時期から、縄文時代中期ごろか。(新家)

IP-18 (図III-13、表III-1・2、図版8-39・40)

位置 Q72 立地 標高40.0~40.2m付近の崖の縁辺部

平面形 ほぼ円形 規模 0.88/0.74×0.86/0.62×0.35m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土はV・VI層やKo-gが主体で、埋め戻しと考えた。坑底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

時期 覆土状況や周辺の土坑の時期から、縄文時代中期ごろか。(新家)

IP-19 (図III-13、表III-1・2、図版8-41・42)

位置 R・S73・74 立地 標高40.3~40.5m付近の崖の縁辺部

平面形 細長い楕円形 規模 1.18/0.91×0.66/0.45×0.26m

特徴 VI層調査中に検出した。覆土は周辺のVI層よりやや暗めの暗褐色をしている。VI層に若干のV層が混入した埋め戻し土と思われる。坑底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

時期 覆土状況や周辺の土坑の時期から、縄文時代中期ごろか。(新家)

4. 集石

調査の便宜上、大まかな礫のまとまりにわけ、それぞれIS-1・2・3と呼称した。集石は崖上の際に立地し、礫の一部が崖下の沢に転落しており、配石は本来の位置をとどめていないと思われる。

IS-1 (図III-14、表III-1・2・4、図版8・23-43・83)

位置 P72・73 立地 標高41.0~41.4m付近の崖の縁辺部 規模 1.66×1.49m

特徴 表土除去後、大型の礫が数点、集中して出土した。周囲のIV・V層を慎重に掘り下げ、計18点の礫を検出した。礫は安山岩で、大きさは10~50cm大であった。半截した結果、IS-1の真下に土坑(IP-8)を1基確認した。さらにその土坑は、住居(IH-2)の一部を切って作られていることもわかった。集石周辺の包含層の土が人為的に造成されたり、大きく移動されたりした痕跡はなかった。18点の礫のうち、台石・石皿と思われる使用痕があったものは2点で、他は使用痕のない自然礫である。礫の重さは1kgに満たないものから47kgのものまでであった。

時期 出土状況から、IP-8と同時期の縄文時代後期前葉と思われる。

掲載遺物 石器：48は安山岩の石皿である。使用による凹みはなく、ほぼ平らでなめらかな面が片面だけに観察される。(新家)

IH-1

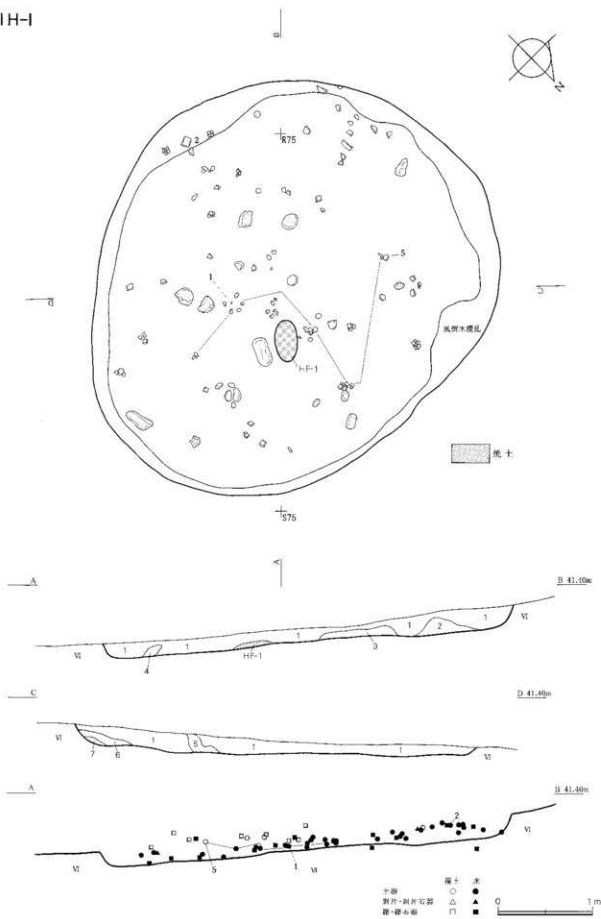
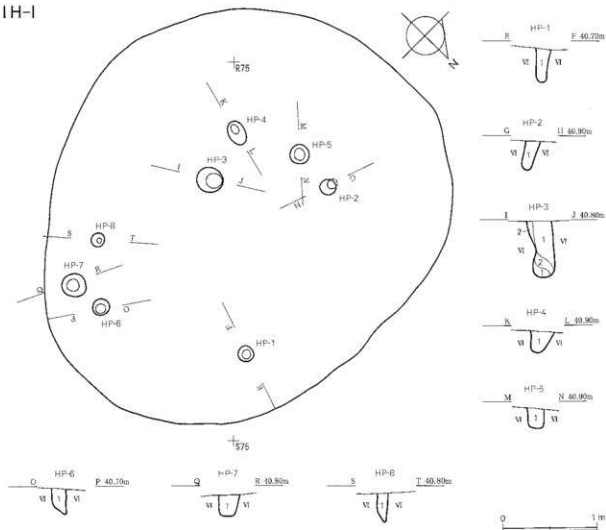


图 III-2 IH-1 (1)

IH-1

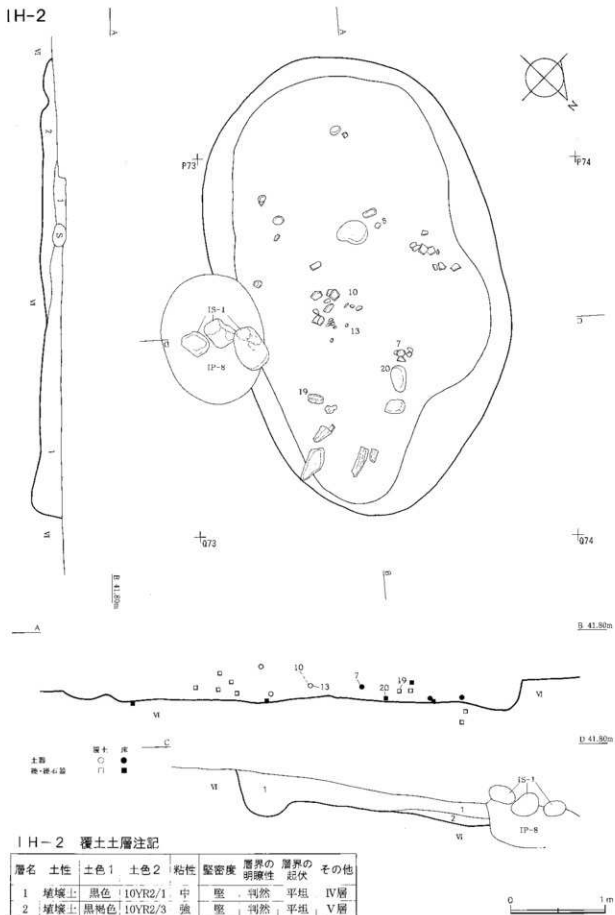


IH-1 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	黒色	10YR2/1	中	堅	判然	平坦	IV-V層
2	埴土	黒褐色	10YR3/2	強	堅	明瞭	平坦	IV~VI層
3	埴壤土	黒褐色	10YR3/2	中	軟	明瞭	平坦	IV~VI層
4	埴壤土	灰黄褐色	10YR4/2	強	堅	明瞭	平坦	IV<NGローム層
5	埴土	黒褐色	10YR2/2	弱	軟	漸変	不規則	IV-VIローム層
6	埴壤土	暗褐色	10YR3/4	中	堅	判然	平坦	IV-VIローム層, NG軽石、φ2cm, 2%混入、半風化、亜円礫
7	埴土	黒色	10YR1.7/1	中	堅	明瞭	平坦	IV層
HP-1	1 砂埴土	暗褐色	7.5YR3/3	なし	堅	判然	不連続	VI層が焼けたものか
HP-1	1 埴壤土	黒色	10YR2/1	強	堅	明瞭	平坦	IV層
HP-2	1 埴壤土	黒褐色	10YR2/2	強	軟	明瞭	平坦	IV-V層
HP-3	1 砂埴土	黒褐色	10YR2/2	なし	堅	判然	平坦	V層
HP-3	2 埴壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	強	堅	判然	不連続	VI>V層
HP-4	1 埴土	黒褐色	10YR2/3	中	すこぶる堅	判然	平坦	V層
HP-5	1 埴壤土	黒褐色	10YR3/2	強	すこぶる堅	判然	平坦	V+VI層
HP-6	1 埴壤土	黒褐色	10YR3/2	強	すこぶる堅	判然	平坦	V+VI層
HP-7	1 埴壤土	暗褐色	10YR3/3	強	すこぶる堅	判然	平坦	V+VI層
HP-8	1 砂埴土	黒褐色	10YR3/2	中	堅	明瞭	平坦	V+VI層

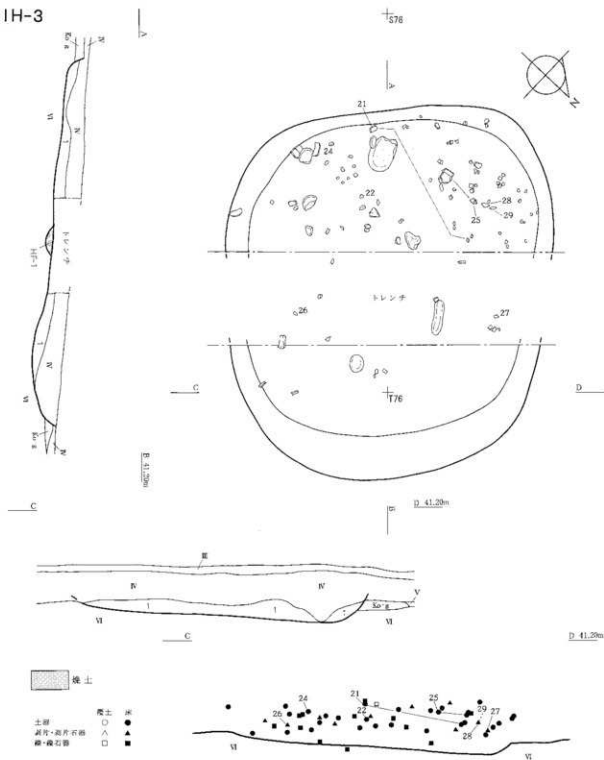
図III-3 IH-1 (2)

IH-2



図III-4 IH-2

IH-3

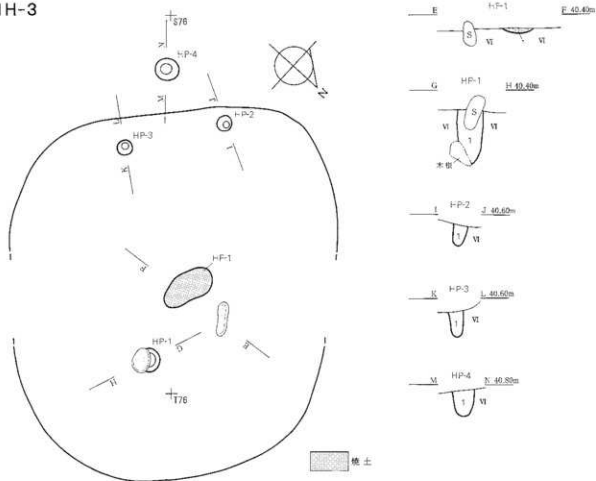


IH-3 覆土土層注記

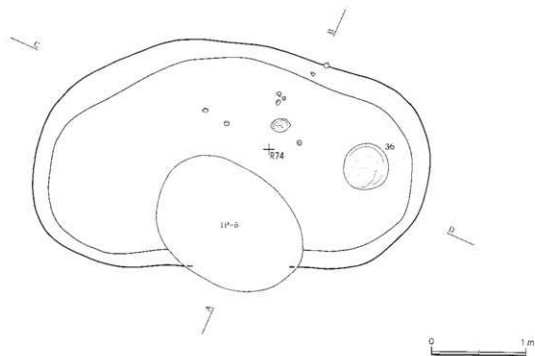
層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	堅	明瞭	平坦	V+VI層
HP-1 1	砂壤土	暗褐色	7.5YR3/4	なし	堅	判然	不規則	VI層が焼けたものか
HP-1 1	埴壤土	黒褐色	10YR2/3	中	堅	明瞭	平坦	IV+V層
HP-2 1	埴壤土	黒色	10YR1.7/1	中	堅	判然	波状	IV層
HP-3 1	埴壤土	黒色	10YR1.7/1	中	堅	判然	波状	IV層
HP-4 1	埴壤土	黒褐色	10YR2/3	中	堅	明瞭	平坦	IV+V層

図III-5 IH-3 (1)

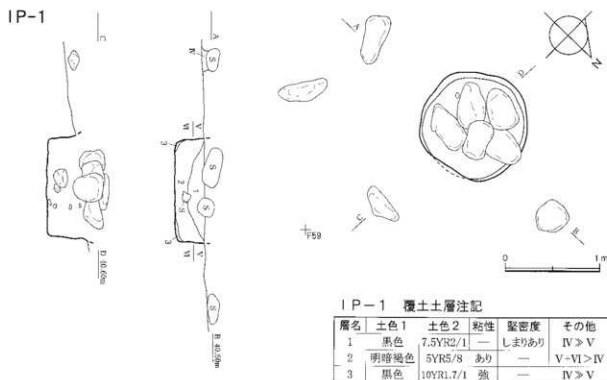
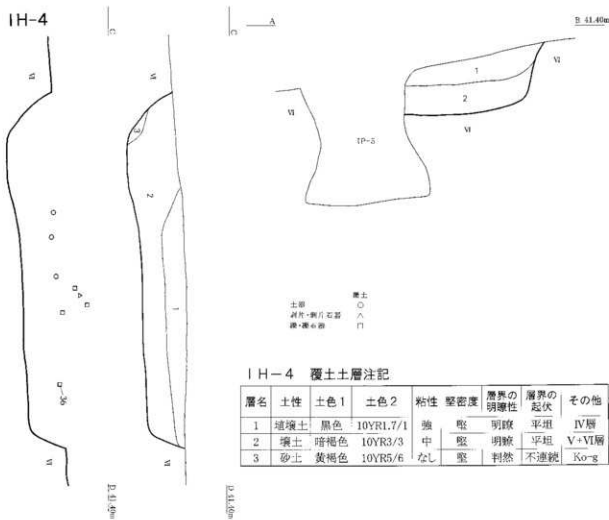
IH-3



IH-4

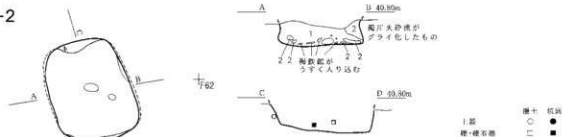


图III-6 IH-3 (2)、IH-4 (1)



図III-7 IH-4 (2)、IP-1

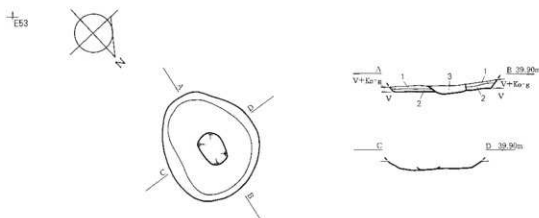
IP-2



IP-2 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	粘性	特 徴
1	壤土	黒色	7.5YR2/1	あり	φ0.5~1cmの灰白色土2%混じる
2	壤土	青灰色	5B/G/1	あり	φ0.5~1cmの灰白色土2%混じる

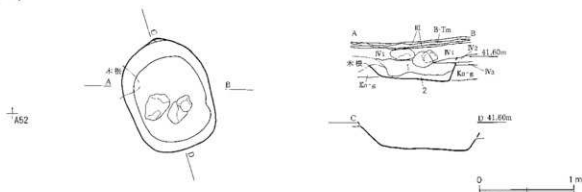
IP-3



IP-3 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	堅密度	特 徴
1	壤土	黒褐色	10YR2/2	堅	IV層土にφ0.5cmの黄褐色土1%混じる
2	壤土	褐色	10YR4/6	堅	IV層主体の土にφ0.5cmの黄褐色土1%混じる
3	壤土	黒色	10YR1.7/1	しろう	IV層土にφ0.5cmの黄褐色土および黒色土25%混じる

IP-4

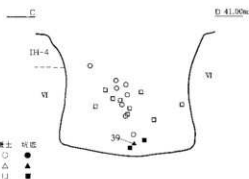
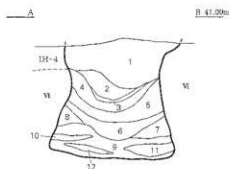
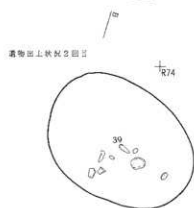
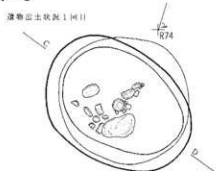


IP-4 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	堅密度	特 徴
1	壤土	黒褐色	10YR2/3	堅	IV層土にφ0.2cmの黄褐色土1%混じる
2	壤土	暗褐色	10YR3/3	堅	漸移層にφ0.2~3cmの黄褐色土ないしは明黄褐色土が10%混じる。IV層と漸移層とKo-gが混じる
3	壤土	黒色	10YR2/1	堅	木炭跡

図 III-8 IP-2~4

IP-5



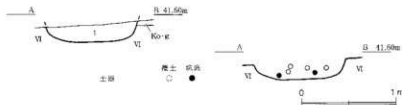
土器 ○
 銅・銀・鉄器 △
 礎・礎石跡 □
 礎土 ●
 灰皿 ▲
 礎・礎石跡 ■

IP-5 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の	層界の	その他
						明瞭性	起伏	
1	壤土	黒色	10YR1.7/1	中	堅	判然	平坦	IV層
2	壤土	黒褐色	10YR2/2	中	堅	判然	平坦	V層
3	埴壤土	黒褐色	10YR3/2	強	軟	判然	平坦	V+VI層
4	埴壤土	黒色	10YR2/1	強	軟	判然	平坦	IV層
5	埴土	暗褐色	10YR3/3	強	軟	判然	平坦	IV+V層
6	埴壤土	黒褐色	10YR3/2	強	軟	判然	平坦	IV+VI層
7	埴土	褐色	10YR4/4	強	すこぶる堅	判然	平坦	VI層
8	埴土	にぶい黄褐色	10YR5/4	中	軟	判然	平坦	VI層
9	埴土	黒色	10YR2/1	強	軟	明瞭	平坦	IV層
10	埴土	にぶい黄褐色	10YR4/3	強	堅	明瞭	平坦	VI層
11	埴壤土	褐色	10YR4/4	強	堅	判然	平坦	VI層
12	埴土	暗褐色	10YR3/3	強	軟	判然	平坦	VI層



IP-6

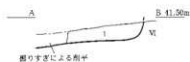
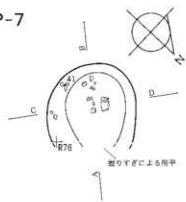


IP-6 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	黒色	10YR1.7/1	強	堅	明瞭	平坦	IV層

図III-9 IP-5~6

IP-7



上層
礫・砂石層

陥底
●

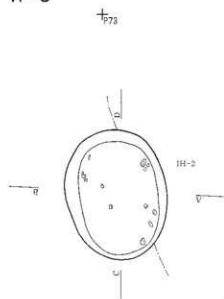
坑底
○



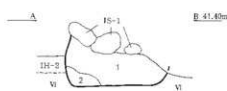
IP-7 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の 明瞭性	層界の 起伏	その他
1	埴壤土	黒色	10YR2/1	中	すこぶる堅	明瞭	平坦	IV層

IP-8



IS-1との位置関係



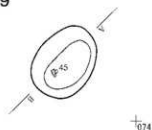
上層
礫・砂片・砂片心層
礫・砂石層

陥底
●
坑底
○

IP-8 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の 明瞭性	層界の 起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	堅	明瞭	平坦	IV~VI層
2	砂壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	すこぶる堅	判然	平坦	V+VI層

IP-9



上層
坑底
●

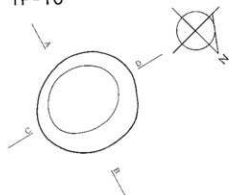


IP-9 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の 明瞭性	層界の 起伏	その他
1	壤土	暗褐色	10YR3/4	中	堅	判然	平坦	V+VI層
2	埴壤土	黒褐色	10YR3/2	強	軟	明瞭	平坦	IV+V層

図III-10 IP-7~9

IP-10

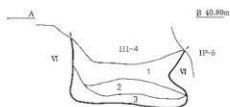
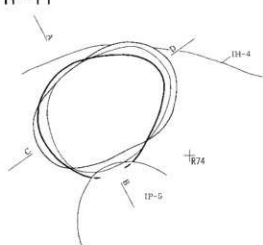


IP-10 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴土	暗褐色	10YR3/4	中	堅	判然	平坦	VI層
2	埴土	黒褐色	10YR3/2	中	堅	判然	平坦	V層
3	埴土	暗褐色	10YR3/3	強	軟	明瞭	平坦	V+VI層

+S74

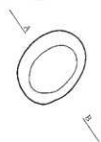
IP-11



IP-11 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴土	にぶい黄褐色	10YR4/3	中	堅	判然	平坦	VI層
2	埴土	黒褐色	10YR3/2	強	軟	判然	平坦	V+VI層
3	埴土	暗褐色	10YR3/3	強	軟	明瞭	平坦	V<VI層

IP-12



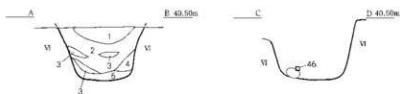
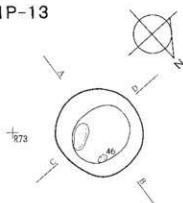
IP-12 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴土	黒褐色	10YR2/3	弱	堅	明瞭	平坦	V層

+S73

図III-11 IP-10~12

IP-13

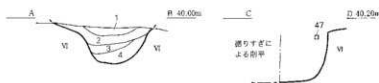
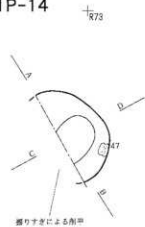


縮尺 1/200
 縮尺 1/200

IP-13 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	壤土	黒褐色	10YR2/3	中	堅	判然	平坦	VI>V層
2	埴壤土	黒色	10YR2/1	中	堅	判然	平坦	IV層
3	砂壤土	褐色	10YR4/4	中	堅	判然	不連続	KC-g
4	砂壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	強	堅	判然	平坦	VI層
5	埴壤土	暗褐色	10YR3/4	強	軟	明瞭	平坦	IV-V層

IP-14

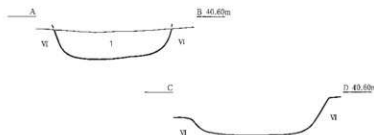
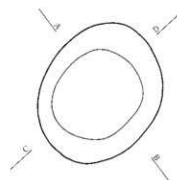


縮尺 1/200
 縮尺 1/200

IP-14 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	壤土	褐色	10YR4/4	中	堅	判然	平坦	VI層
2	埴壤土	黒褐色	10YR2/3	強	堅	判然	平坦	IV+V層
3	埴壤土	暗褐色	10YR3/4	強	堅	判然	平坦	V+VI層
4	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	強	軟	明瞭	平坦	IV+V層

IP-15



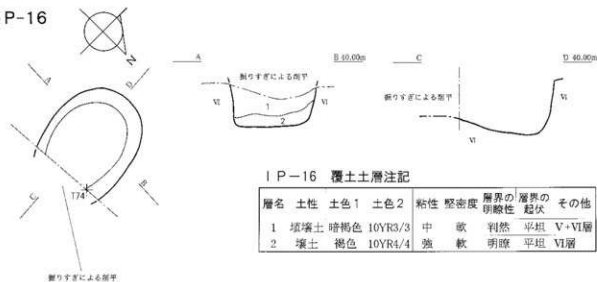
0 1 m

IP-15 覆土層注記

層名	土性	土色 1	土色 2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/4	中	堅	明瞭	平坦	V+VI層

図 III-12 IP-13~15

IP-16



IP-16 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	軟	判然	平坦	V+VI層
2	壤土	褐色	10YR4/4	強	軟	明瞭	平坦	VI層

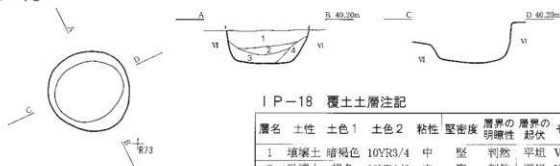
IP-17



IP-17 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	強	堅	明瞭	平坦	V層
2	壤土	褐色	10YR4/4	中	軟	明瞭	平坦	VI層

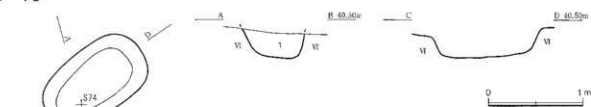
IP-18



IP-18 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/4	中	堅	判然	平坦	VI層
2	砂壤土	褐色	10YR4/6	中	堅	判然	平坦	KO-R
3	埴土	黒褐色	10YR3/2	強	軟	明瞭	平坦	V層
4	埴壤土	褐色	10YR4/4	強	軟	明瞭	平坦	VI層

IP-19

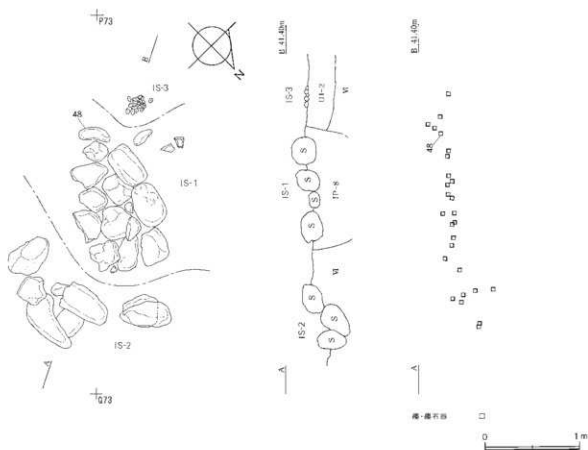


IP-19 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	堅	判然	平坦	V+VI層

図III-13 IP-16~19

IS-1 IS-2 IS-3



図Ⅲ-14 IS-1～3

IS-2 (図Ⅲ-14、表Ⅲ-1・2)

位置 P72・73 立地 標高40.6～41.2m付近の崖の縁辺部 規模 1.86×1.02m

特徴 表土除去後、IS-1の集石から20～30cm東側に離れて、30～70cm大の礫が数点出土した。周囲のIV・V層を掘り下げ、計8点の礫を検出した。礫は安山岩である。礫の大きさなどから、IS-1の一部とも考えられる。8点のうち1点は石皿、その他は使用痕のない自然礫である。礫の重さは12～50kgであった。

時期 出土状況から、IS-1と同時期の縄文時代後期前葉と思われる。(新家)

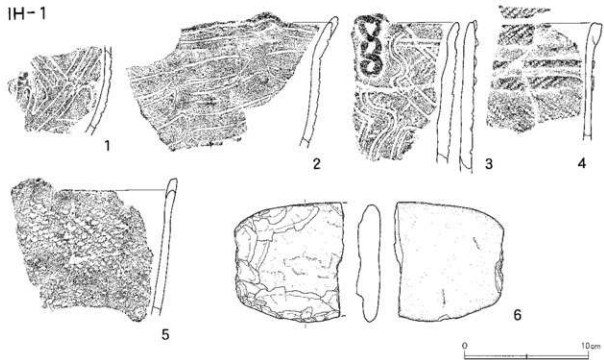
IS-3 (図Ⅲ-14、表Ⅲ-1・2、図版8-43)

位置 P73 立地 標高41.0～41.2m付近の崖の縁辺部 規模 0.32×0.20m

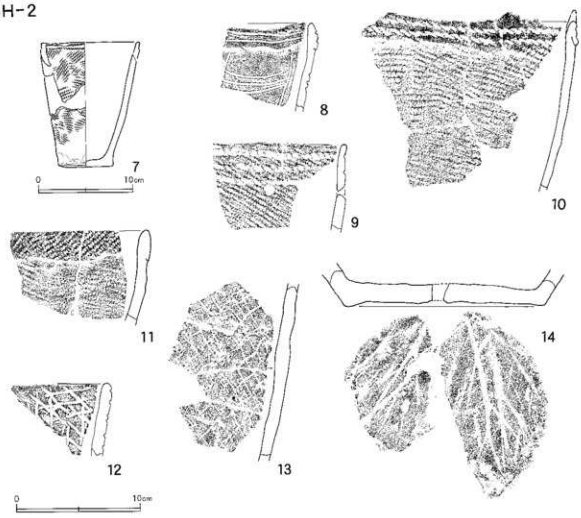
特徴 表土除去後、IS-1・2周辺の包含層を慎重に掘り下げたところ、IS-1の西側に、5～8cm大の小石がまとまって出土した。礫は安山岩である。IS-1・2とは使用している礫の大きさが異なるが、IS-1・2と一連のものである可能性がある。礫は計16個あり、使用痕、加工痕はなく、すべて自然礫であった。礫の重さは20～60gであった。

時期 出土状況縄文時代後期前葉と思われる。(新家)

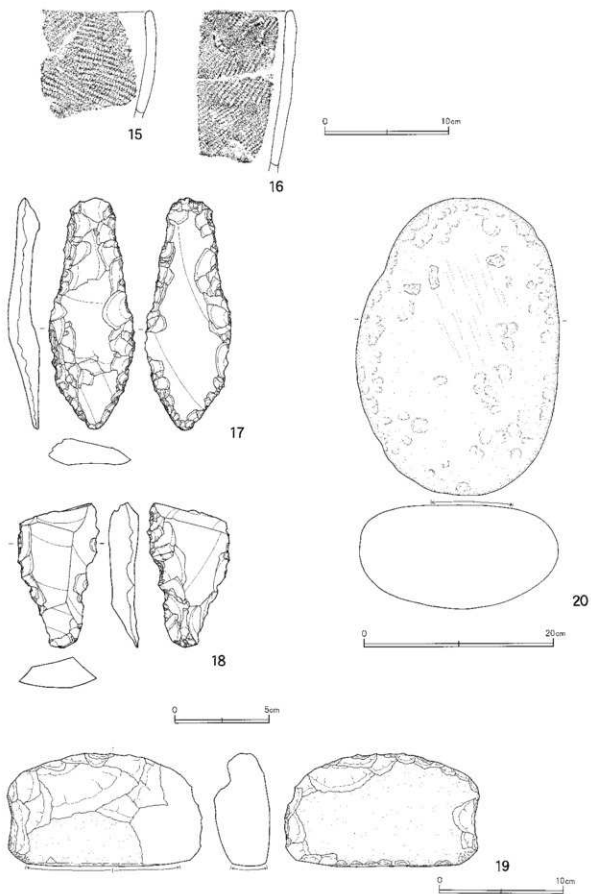
IH-1



IH-2

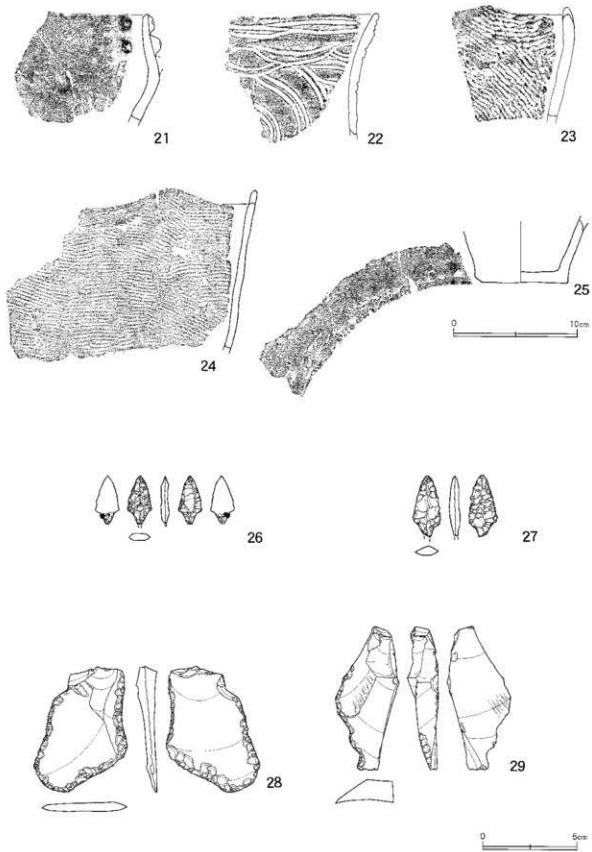


図III-15 IH-1・2出土の遺物



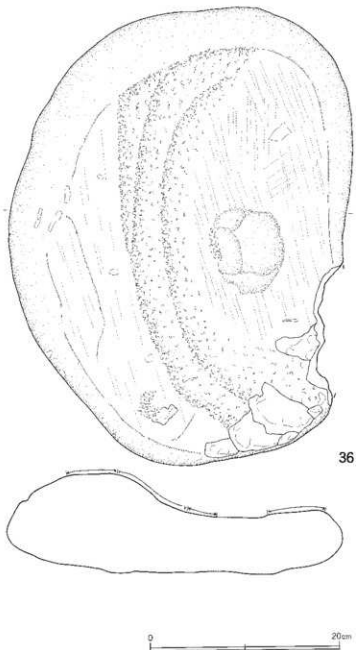
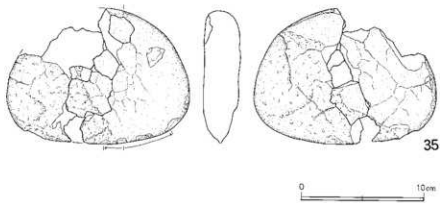
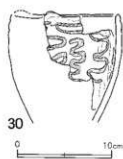
図Ⅲ-16 IH-2 出土の遺物

IH-3

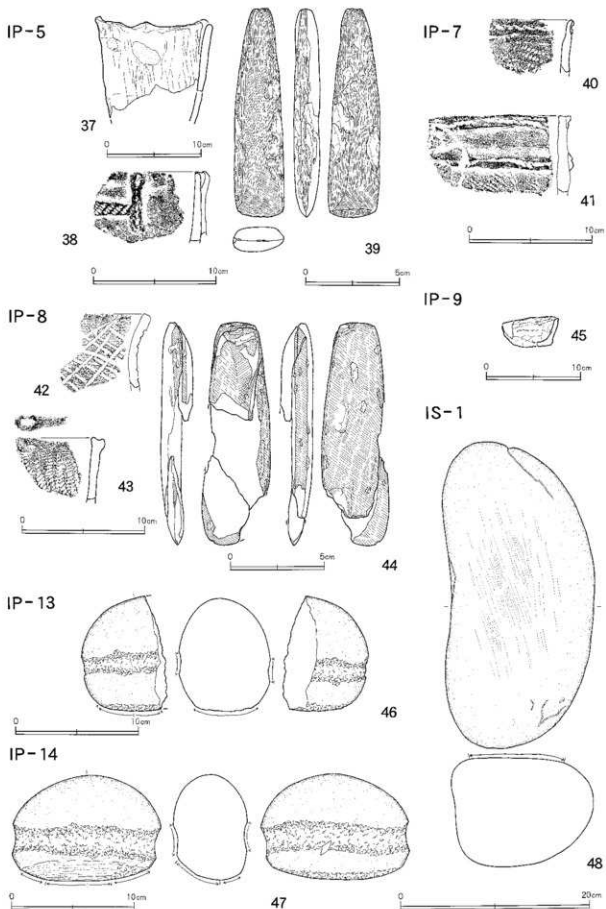


図III-17 IH-3 出土の遺物

IH-4



図Ⅲ-18 IH-4 出土の遺物



図III-19 IP-5・7~9・13・14、IS-1出土の遺物

表Ⅲ-1 検出遺構一覧

遺構名	図 No.	図版 No.	調査区	規 模 (m)			時 期	特 徴	
				長 軸	短 軸	深 さ (厚さ)			
				確認面/ 床(底)面	確認面/ 床(底)面				
住 居	I H-1	Ⅲ-2・ 3・15	Q・R74・75	4.60/4.36	4.07/(3.68)	0.22	縄文時代後期前葉 IVa土器 扁平打製石器		
	H F-1	Ⅲ-2	R74・75	0.44	0.24	0.06			
	H P-1	Ⅲ-3	R75	0.17	0.09	0.37			
	H P-2	Ⅲ-3	R75	0.17	0.12	0.31			
	H P-3	Ⅲ-3	R74	0.28	0.17	0.60			
	H P-4	Ⅲ-3	R74・75	0.26	0.11	0.23			
	H P-5	Ⅲ-3	R75	0.21	0.13	0.22			
	H P-6	Ⅲ-3	R74	0.18	0.11	0.28			
	H P-7	Ⅲ-3	R74	0.26	0.13	0.23			
	H P-8	Ⅲ-3	R74	0.15	0.05	0.31			
	I H-2	Ⅲ-4・ 15・16	2・10・14・ 22-3・49・ 74・82	O・P73	4.88/4.52	3.00/2.50		0.40	縄文時代後期前葉 IS-1、I P-8より古い 石皿、スクレイパー、扁平 打製石皿、石皿
	跡	I H-3	Ⅲ-5・ 6・17	S・T75・76	4.26/3.70	3.96/3.38		0.30	縄文時代後期前葉 石皿、スクレイパー、 扁平打製石器 立石あり
H F-1		Ⅲ-6	S75・76	0.58	0.29	0.06			
H P-1		Ⅲ-6	S75	0.27	0.15	0.58			
H P-2		Ⅲ-6	S76	0.17	0.07	0.24			
H P-3		Ⅲ-6	S75	0.16	0.07	0.28			
H P-4		Ⅲ-6	S75・76	0.25	0.12	0.29	住居外		
I H-4	Ⅲ-6・ 7・18	3・10・15・ 22-5・50・ 75・82	Q・R73・74	4.22/3.86	(2.40)/(2.00)	0.60	縄文時代中～後期 I P-5より古い 扁平打製石器、 石皿		
土 坑	I P-1	Ⅲ-7	3-6~8	E49	1.12/1.10	1.07/0.98	0.32	縄文時代後期前半 人頭大の礫5点	
	I P-2	Ⅲ-8	3・4-9・10	E61c、F61d	1.18/1.20	1.05/1.05	0.26	縄文時代後期前葉	
	I P-3	Ⅲ-8	4-11・12	E53a・d	1.17/1.03	1.01/0.78	0.08	縄文時代中～後期	
	I P-4	Ⅲ-8	4-13・14	Z052b・c、 A52a・d	1.21/0.91	0.90/0.80	0.20	縄文時代後期前葉 人頭大の礫3点	
	I P-5	Ⅲ-9・ 19	4・10・15・ 22-15・51・ 75・82	R73・74	1.66/1.44	1.23/1.34	1.28	縄文時代後期前葉 I H-4より新しい フラスコ状土坑石 斧	
	I P-6	Ⅲ-9	4・5-16~18	Q75	1.01/0.69	0.97/0.62	0.19	縄文時代中～後期	
	I P-7	Ⅲ-10・ 19	5・15-19・ 20・75	Q・R75・76	(0.84)/(0.74)	0.94/0.63	0.17	縄文時代後期前葉	
	I P-8	Ⅲ-10・ 19	5・15・22- 21・75・82	P72・73	1.38/1.20	1.08/0.83	0.54	縄文時代後期前葉 I H-2より新しい I S-1と同時期石 斧	
	I P-9	Ⅲ-10・ 19	5・10-22・ 52	N73	0.80/0.60	0.60/0.34	0.14	縄文時代後期前葉 IVaミニチュア土 器	
	I P-10	Ⅲ-11	5-23・24	R73	1.13/0.80	1.02/0.67	0.48	縄文時代中期?	
	I P-11	Ⅲ-11	6-25・26	Q・R73	1.44/1.46	1.22/1.14	0.70	縄文時代中期?	
	I P-12	Ⅲ-11	6-27・28	R73	0.82/0.59	0.63/0.40	0.23	縄文時代中期?	
	I P-13	Ⅲ-12・ 19	6・22-29・ 30・82	Q・R73	0.94/0.65	0.92/0.53	0.53	縄文時代中期? 北海道式石冠、大 礫	
	I P-14	Ⅲ-12・ 19	6・7・22-31・ 32・82	R72・73	(1.05)/(0.38)	(0.50)/(0.40)	0.38	縄文時代中期? 北海道式石冠	
I P-15	Ⅲ-12	7-33・34	Q73	1.54/0.98	1.24/0.89	0.29	縄文時代中期?		
I P-16	Ⅲ-13	7-35・36	S・T73・74	(1.00)/(0.85)	0.96/0.74	0.46	縄文時代中期?		
I P-17	Ⅲ-13	7-37・38	S74	0.93/0.72	0.71/0.52	0.29	縄文時代中期?		
I P-18	Ⅲ-13	8-39・40	Q72	0.88/0.74	0.86/0.62	0.35	縄文時代中期?		
I P-19	Ⅲ-13	8-41・42	R・S73・74	1.18/0.91	0.66/0.45	0.26	縄文時代中期?		
墓 石	I S-1	Ⅲ-14 19	8・23-43・ 83	P72・73	1.66	1.49	—	縄文時代後期前葉 大礫18点	
	I S-2	Ⅲ-14	—	P72・73	1.86	1.02	—	縄文時代後期前葉 大礫8点	
	I S-3	Ⅲ-14	8-43	P73	0.32	0.2	—	縄文時代後期前葉 小礫16点	

表III-2 遺構出土遺物点数一覧

層位	分類	土器		石														石器計	その他 粘土?	合計		
		Ⅲa	Ⅳa	土器計	石 椀	石 楕	スクレ イパー	Uフレ イク	Rフレ イク	フレ イク	石 斧	た き	石 器	打 製	北 海道	すり 石	石 皿				台 石	原 石
住居跡	IH-1	覆土	142	142						6			1							9	16	158
		床	169	169						7										18	25	194
		合計	311	311						13			1							27	41	352
	IH-2	覆土	283	283	1		2			8			1			1				7	20	303
		床	24	24												1	1			2	4	28
		攪乱																		2	2	2
	合計	307	307	1		2			8			1			1	2			11	26	333	
	IH-3	覆土	145	145						4							1			1	6	151
		床	147	148	2	2				9			1							15	29	177
		合計	292	293	2	2				13			1				1			16	35	328
	IH-4	覆土	31	112	143				1	6			7			1				23	38	181
		合計	31	112	143				1	6			7			1				23	38	181
土坑	IP-1	覆土1		1	1													27	67	95	96	
		覆土2																	1	4	5	5
		合計		1	1							1							28	71	100	101
	IP-2	覆土1		1	1															2	2	3
		坑底																		1	1	1
	合計		1	1															3	3	4	
	IP-4	覆土1		4	4															5	5	9
		合計		4	4															5	5	9
	IP-5	覆土		305	305	1				5										10	16	321
		坑底										1								2	3	3
		合計		305	305	1				5		1								12	19	324
	IP-6	覆土		6	7	13														1	1	14
		坑底			4	4																4
		合計		6	11	17														1	1	18
	IP-7	覆土		65	65														1	1	1	66
		坑底		10	10																	10
		合計		75	75														1	1	1	76
	IP-8	覆土		38	38					7	2										9	47
		坑底		2	2			1												1	2	4
	合計		40	40			1		7	2									1	11	51	
	IP-9	坑底		10	10																	10
		合計		10	10																	10
	IP-10	覆土		10	10																	10
		合計		10	10																	10
IP-11	覆土		6	6										1						1	7	
	坑底																		1	1	1	
合計		6	6											1				1	2	8		
IP-12	覆土														1					1	1	
	合計														1					1	1	
IS-1	IV															1	1		16	18	18	
	合計															1	1		16	18	18	
	IV															1			6	7	7	
IS-2	攪乱															1			1	1	1	
	合計														1			1	7	8	8	
IS-3	IV																		16	16	16	
	合計																		16	16	16	
合計		54	1469	1523	2	2	4	1	1	52	3	1	10	2	1	6	29	1	210	325	1	1848

表Ⅲ-3 遺構出土掲載土器一覽

遺構名	図・掲載 No.	図版 No.	器種・ 部位	出土位置			点数		時期 分類	計測値 (cm)			備 考				
				遺構名 調査区	遺物 番号	層位	掲載	非 掲載		器高	口径	底径					
														小計	合計		
IH-1	Ⅲ-15-1	14-74	胴 部	IH-1	57	床	4	4	27	IV a				赤彩。無文地に沈線文。縦ナデ。砂・石英。			
	Ⅲ-15-2	14-74	口縁部	IH-1	24	床	1			IV a				無文地に垂下する蛇行沈線文。口縁横・体部丹念な縦ナデ。バミス・砂・微量角閃石。			
				P74	6	IV	1	2	0								
	Ⅲ-15-3	14-74	口縁部	P75	1	Ⅲ	1			3	34	IV a			I H-1覆土出土と同一。無文地に沈線文・8の字状貼付文。内面調整横ナデ。胎土に砂・海綿骨針と微量の細礫・角閃石。		
				P75	9	IV	2										
Ⅲ-15-4	14-74	口縁部	IH-1	61	覆土	3	3	20	IV a				縁帯。L R 縄文。横ナデ。砂・海綿骨針。				
Ⅲ-15-5	14-74	口縁部	IH-1	5	覆土	1								口縁に頂部。L R 縄文。内面は口縁部が横・体部は縦の丹念なナデ調整。胎土にバミス・砂と微量の角閃石。			
			IH-1	9	床	1			4	21	IV a						
			IH-1	57	床	1											
			R75	9	IV	1											
IH-2	Ⅲ-15-7	10-49	深 鉢	IH-2	12	床	7			10	0	IV a	13.2	10.3	5.8	縄線文。L R。口縁横・体部縦ナデ。バミス・砂と微量の海綿骨針・角閃石。	
	Ⅲ-15-8	14-74	口縁部	P75	4	Ⅲ	1			1	28	IV a				I H-2覆土出土と同一。無文地に沈線文。丹念な横ナデ。バミス・砂と微量の角閃石。	
				P73	5	IV	3										
	Ⅲ-15-9	14-74	口縁部	IH-2	21	覆土	1			2	12	IV a				L R 縄文地に縄線文。内面は口縁横・体部縦の丹念なナデ調整。バミス・砂・海綿骨針。	
				P73	5	IV	1										
	Ⅲ-15-10	14-74	口縁部	IH-2	5	覆土	3										山形隆起部。無文地の折り返し口縁に縄線文。器面L R 縄文。内面は斜位のナデ調整。胎土に砂・バミス・微量の角閃石を含む。
				P73	4	IV	1			5	46	IV a					
				P73	5	IV	1										
	Ⅲ-15-11	14-74	口縁部	P74	4	IV	1										I H-2覆土出土と同一。外縁貼付口縁。L R 縄文。内面横ナデ。砂・バミス・微量の角閃石。
				W72	13	IV	1			2	23	IV a					
	Ⅲ-15-12	14-74	口縁部	P74	7	IV	1			1	15	IV a				I H-2覆土出土と同一。格子状沈線文。丹念な横ナデ。バミス・砂・微量の細礫・角閃石。	
Ⅲ-15-13	14-74	胴 部	IH-2	5	覆土	1										同一個体。器面に格子状沈線文。底面に木葉痕。内面調整は横ナデ。胎土に砂・バミス・角閃石を含む。11に似た胎土だが、11より砂・角閃石を多く含む。	
			IH-2	12	床	1			3								
			P73	4	IV	1											
Ⅲ-15-14	14-74	底 部	O74	3	IV	1											
			O74	4	IV	1											
			O74	5	IV	3			8								
			P74	3	Ⅲ	1											
			P74	4	IV	2											
Ⅲ-16-15	14-74	口縁部	Q75	7	IV	2			2	16	IV a				I H-2覆土出土と同一。方向変えたL R 縄文。横ナデ。砂・バミス多く、微量の角閃石。		
Ⅲ-16-16	14-74	口縁部	P74	4	IV	1										I H-2覆土出土と同一。L R 縄文。内面調整は丹念で口縁横ナデ。体部縦ナデ。胎土にバミス・砂・微量の角閃石を含む。	
			P74	6	IV	1			2	11	IV a						
IH-3	Ⅲ-17-21	14-74	口縁部	IH-3	12	床	1			2	0	IV a				無文地にボタン状貼付文。内面調整は横ナデ。指頭痕が目立つ。胎土は縦密で海綿骨針・微量の砂・バミスを含む。	
	Ⅲ-17-22	15-75	口縁部	IH-3	13	床	1									無文地に沈線文。内面調整は横ナデ。胎土にバミス・砂多く、微量の細礫を含む。	
				IH-3	19	床	2			2	7	IV a					
	Ⅲ-17-23	15-75	口縁部	R73	2	IV	1			1	15	IV a				I H-3床出土と同一。L R 縄文。内面調整横ナデ。胎土に海綿骨針・バミス・角閃石を含む。	
	Ⅲ-17-24	15-75	口縁部	IH-3	15	床	1										口縁に頂部。L R 縄文。内面丹念な横ナデ。胎土にバミス・砂・微量の角閃石を含む。
IH-3				43	床	9			10	15	IV a						
Ⅲ-17-25	15-75	底 部	IH-3	7	床	1										無文。底部直立。内面は丹念な縦ナデ。胎土縦密で、微量の砂・バミス・角閃石を含む。	
			IH-3	8	床	1			3	5	IV a						
			IH-3	54	覆土	1											
IH-4	Ⅲ-18-30	10-50	深 鉢	IH-4	11	覆土	2									口縁に頂部。無文地に半截竹管状工具による垂下する蛇行沈線文。内面調整は口縁横・体部縦ナデ。胎土にバミス・砂・角閃石・礫石と微量の細礫を含む。	
				IP-5	21	覆土	1										
				IP-5	23	覆土	4										
				IP-5	32	覆土	1										
				Q73	7	IV	3			15	0	IV a	(11.4)	(11.6)	—		
				Q74	1	Ⅲ	1										
				Q75	10	IV	1										
				R73	4	IV	1										
				R75	10	IV	1										

遺構名	図・掲載 No.	図版 No.	器種・ 部位	出土位置		点数		時期 分類	計測値 (cm)			備 考				
				遺構名 調査区 番号	層位	掲載	非 掲載		器高	口径	底径					
													小計	合計		
IH-4	Ⅲ-18-31	15-75	口縁部	IP-5 13	覆土	1	2	4	IVa	無文地に半載竹管状工具による垂下する蛇行沈降文。内面丹念な横ナデ。胎土にバミス・海綿骨針と微量の細礫を含む。						
				O74 4	IV	1				IH-4覆土出土と同一。無文地に半内彫的技法(隆帯文と沈降文)による文様。内面調整は丹念な横ナデ。胎土に砂・バミス、微量の角閃石・輝石を含む。						
	Ⅲ-18-32	15-75	口縁部	O73 5	IV	1	3	26	IVa	IH-4覆土出土と同一。無文地に半内彫的技法(隆帯文と沈降文)による文様。内面調整は丹念な横ナデ。胎土に砂・バミス、微量の角閃石・輝石を含む。						
				O74 4	IV	1				L R縄文地に沈降で区画し口縁無文。内面横ナデ。胎土に海綿骨針・砂、微量の角閃石。						
	Ⅲ-18-33	15-75	口縁部	IH-4 11	覆土	1	2	45	IVa	L R縄文地に沈降で区画し口縁無文。内面横ナデ。胎土に海綿骨針・砂、微量の角閃石。						
Q73 5				IV	1	無文。折り返し口縁。内外面粗雑な縦ナデ。胎土に砂、微量の石英・角閃石。										
Ⅲ-18-34	15-75	口縁部	IH-4 13	覆土	5	5	4	IVa	無文。折り返し口縁。内外面粗雑な縦ナデ。胎土に砂、微量の石英・角閃石。							
IP-5	Ⅲ-19-37	10-51	深 鉢	IP-5 23	覆土	2	4	1	IVa	(10.3)	12.4	—	口縁に頂部、無文。内外面縦ナデ。胎土にバミス、微量の角閃石・輝石。			
				IP-5 32	覆土	1								隆帯を縦に繋ぎL R縄文。隆帯間無文。内面調整横ナデ。胎土にバミス・砂・細礫を含む。		
				Q75 7	IV	1								多段の口縁に縄線文。L R縄文。内面横ナデ、指頭痕。胎土に砂・バミス・角閃石。		
Ⅲ-19-38	15-75	口縁部	IP-5 23	覆土	1	1	0	IVa	多段の口縁に縄線文。L R縄文。内面横ナデ、指頭痕。胎土に砂・バミス・角閃石。							
IP-7	Ⅲ-19-40	15-75	口縁部	IP-7 5	坑底	1	1	0	IVa	IP-7坑底出土と同一。隆帯に縄線、隆帯間無文。体部L R縄文。内面横ナデ。胎土に微量の細礫・バミス・砂。						
	Ⅲ-19-41	15-75	口縁部	T76 6	IV	1	2	22	IVa	IP-7坑底出土と同一。隆帯に縄線、隆帯間無文。体部L R縄文。内面横ナデ。胎土に微量の細礫・バミス・砂。						
U73 2	IV	1	IP-8覆土出土と同一。無文地に格子状沈降文。内面調整横ナデ。胎土にバミス・砂、微量の角閃石。													
IP-8	Ⅲ-19-42	15-75	口縁部	P73 2	Ⅲ	1	2	3	IVa	IP-8覆土出土と同一。無文地に格子状沈降文。内面調整横ナデ。胎土にバミス・砂、微量の角閃石。						
	S75 3	IV	1	頂部に指頭。R L縄文。内面横ナデ。胎土にバミス、微量の細礫・角閃石。												
Ⅲ-19-43	15-75	口縁部	IP-8 11	覆土	1	1	0	IVa	頂部に指頭。R L縄文。内面横ナデ。胎土にバミス、微量の細礫・角閃石。							
IP-9	Ⅲ-19-45	10-52	坏	IP-9 1	坑底	9	9	1	IVa	3.1	6.0	3.4	無文。手捏ね。胎土にバミスを含む。			

表Ⅲ-4 遺構出土掲載石器一覧

遺構名	図・掲載 No.	図版 No.	器種名	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ (g)	石 材	備 考
IH-1	Ⅲ-15-6	22-82	扁平打製石器	覆土	(8.60)×(9.40)×1.90	(240.0)	安山岩	
IH-2	Ⅲ-16-17	22-82	石 槍	覆土	12.20×4.50×1.70	70.25	頁 岩	
	Ⅲ-16-18	22-82	スクレイパー	覆土	7.60×4.25×1.60	43.05	頁 岩	
	Ⅲ-16-19	22-82	扁平打製石器	覆土	15.30×8.90×4.10	800.0	安山岩	
	Ⅲ-16-20	22-82	石 皿	床	31.40×21.50×11.00	10900	安山岩	
IH-3	Ⅲ-17-26	22-82	石 鏃	床	(2.50)×1.20×0.45	(1.02)	めのう	7スフェルト付
	Ⅲ-17-27	22-82	石 鏃	床	(3.20)×1.45×0.55	(2.13)	頁 岩	
	Ⅲ-17-28	22-82	スクレイパー	床	6.60×4.90×1.10	19.31	頁 岩	
	Ⅲ-17-29	22-82	スクレイパー	床	7.55×3.30×2.10	18.26	頁 岩	
IH-4	Ⅲ-18-35	22-82	扁平打製石器	覆土	14.40×10.70×3.00	480.0	安山岩	2点接合
	Ⅲ-18-36	22-82	石 皿	床	48.30×36.20×10.50	20600	安山岩	
IP-5	Ⅲ-19-39	22-82	石 斧	坑底	11.00×2.65×1.35	66.16	片 岩	
IP-8	Ⅲ-19-44	22-82	石 斧	覆土	11.75×3.60×1.70	69.77	泥 岩	3点接合
				Q-71・W				
IP-13	Ⅲ-19-46	22-82	北海道式石冠	覆土	(6.75)×(9.10)×7.20	(545.0)	安山岩	
IP-14	Ⅲ-19-47	22-82	北海道式石冠	覆土	11.80×8.30×5.90	820.0	安山岩	
IS-1	Ⅲ-19-48	23-83	石 皿	IV	32.40×16.25×11.50	9000	安山岩	

IV 包含層出土の遺物

1 土器

包含層からはI群a類、II群b類、III群a類、III群b類、IV群a類、IV群b類、V群、VI群a類、VI群b類が合わせて57,391点出土した。このうち最も多いものはIV群a類で53,123点出土している。これは包含層全出土土器点数の92.6%にあたる。次いで多いのはIII群a類が3,921点で6.8%となる。この2つの時期だけで57,044点、99.4%を占めていることになる。このほかの時期のものについて点数と包含層出土土器点数の合計に占める割合を示すと、I群a類3点(0.005%)、前期後半1点(0.002%)、中期後半118点(0.2%)、後期中葉24点(0.04%)、晩期1点(0.002%)がある。また縄文時代のもは恵山式42点(0.07%)、後北式133点(0.2%)である。出土遺物点数については表IV-1に示した。また、表IV-2に包含層出土掲載土器一覧を示した。III群a類、III群b類、IV群a類、VI群(VI群a類：A・B・D52区、VI群b類：L58・M60区)については分布図を図IV-29・30に示した。

I群a類土器(図IV-4-22~24、表IV-2、図版15-75)

南東側の平成15年調査範囲のA54区IV層、Zo57区IV層、F54区V層で各1点出土している。すべて掲載した。22は口縁部、23・24は胴部破片である。いずれも貝殻文が施されている。

III群a類土器(図IV-1・4-1~3、25~39・41、表IV-2、図版10・11・15・16-53・55・75・76)

平成16年調査範囲の丘陵部分と、その崖下の平成15年調査範囲で出土している。N71~74区で1,110点、O~R70・71区で1,818点、この一帯で2,928点と全体の74.8%を占める点数が出土している。これはN73区から東に流れる沢が緩斜面で北へ向きを変えて流れていくためである。L59区では172点出土しているがいずれも摩耗した小破片のため接合できず掲載しえなかった。また、南東の平成15年調査範囲では散発的に出土している。

第1類(26)：円筒土器上層d式に相当するもの

26は口縁に粘土紐による波状隆線文をもつものである。

第2類(1~3、25・27・34~39・41)：サイベ沢Ⅶ式に相当するもの

a種(1)：山形隆起部にボタン状貼付文をもつもの。

1は口縁に4か所の山形隆起部をもち、隆起部外面に細い粘土紐によるボタン状貼付文による装飾をもつ。口唇は縄により刻まれている。底部を除き、器面にLRの縄文が縦方向に回転施文されている。

b種(27)：山形隆起部に細い粘土紐による貼付文をもつもの。

c種(25)：魚骨回転文をもつもの。

第3類(2・3・28~42・47)：見晴町式に相当するもの。

a種(28・32・33)：器面に縄文のみが施されるもの。

a1(28・32・33)は口縁に刻みをもつもの。28は山形隆起部直下に爪による刺突文をもち、口縁が棒状工具により刻まれている。32・33は口縁が縄により刻まれる。32は底部が緩やかにすぼまる。33の底部は直立気味である。

a2(29~31)は口縁に刻みをもたないもの。29は口縁が膨隆しており器面に施された縄文が及んでいる。30・31は口縁が膨隆しないものである。口縁に補修孔がある。31は口唇にも縄文が施される。

b種(2・34~36)：縄文地に沈線により文様の描かれるもの。

b 1 (2) は懸垂文をもつもの。**2** は底部が緩やかに立ち上がり、胴下部で膨らみ口頸部がわずかにくびれる器形である。口縁に3か所の山形の隆起部をもち、口縁は棒状工具により斜位に刻まれている。器面に縄文を施し、口縁には横走する2本の沈線が引かれる。隆起部と隆起部の間には横走する2本の沈線から垂下する概ね左右対称の稲妻状沈線文をもつ。

b 2 (34~36) は懸垂文をもたないもの。**34**は口縁に山形の隆起部をもち、隆起部と口縁に沿って2本の沈線が引かれている。**35**は口縁に隆起部をもつが欠損している。縄文地の器面には口縁部に横走する2本の沈線、その下の胴上部には横走する1本の沈線が認められる。**36**は突起の横位の貼付文が剥落している。縄文地に2本の沈線がある。

c 種 (3・37~39・41) ; 口縁の山形隆起部に縦位の短い貼付文をもつもの。

c 1 (3・37) は器面に縄文のみが施されるもの。**3**は口縁に4か所の山形隆起部をもち、隆起部外面に細い粘土紐を貼り付けた短い縦位の貼付文をもつ。**37**は山形隆起部に縦位貼付文をもち口縁が縄により刻まれるものである。

c 2 (38・39・41) は沈線文をもつもの。**38**は口縁の山形隆起部に縦位貼付文をもち、口縁に横位の断続的な短沈線がある。器面には突起直下から2本一組の沈線による懸垂文が施されている。**39**は山形隆起部に縦位貼付文を3本もち、口縁に短沈線をもつ。隆起部下の器面には2本一組の沈線による弧線文、さらにその下の器面には3本一組の沈線による懸垂文が描かれている。**41**は山形隆起部に縦位貼付文を3本もち、膨隆した口縁は縄により刻まれている。隆起部下の器面には2本一組の沈線により弧状文が描かれている。

Ⅲ群 b 類土器 (図IV-5-40・42~48、表IV-2、図版16)

平成16年調査範囲の丘陵部分と、その崖下の平成15年調査範囲で出土している。Ⅲ群 a 類の項で述べた沢の流域に分布している。

第1類 (40・42~46) : 椀林式に相当するもの。表IV-2ではⅢ b-1と表記した。

a 種 (40) ; 口縁に縦の貼付文をもち、口唇に沈線文をもつもの。

40は口縁の山形隆起部にⅢ群 a 類 c 種と同じ縦位貼付文をもつ。肥厚し外傾する口唇に棒状工具による横位の沈線が引かれている点を考慮しⅢ群 b 類とした。

b 種 (42~44) ; 山形隆起部・膨隆する口縁をもち、沈線文をもつもの

b 1 (42・43) は器面に沈線文をもつもの。**42**は口縁部に2本一組の横走する沈線文をもつ。**43**は口縁の山形隆起部膨隆に棒状工具による刺突文が施される。口縁部には2本一組の沈線により懸垂文が描かれる。

b 2 (44) は口唇と器面に沈線文をもつもの。**44**は外傾する口唇には棒状工具による太い沈線文をもつ。山形隆起部には渦巻文がある。器面には3本一組の沈線による懸垂文、渦文が施される。

b 3 (47) は弧線文をもつもの。**47**は器面に2本一組の沈線による弧線文をもつ。外傾する口唇は縄により刻まれている。頂部は欠損している。

c 種 (45・46) ; 口縁貼付帯に沈線文をもつもの。

45・46は口縁貼付帯に太い沈線が引かれている。**45**は山形隆起部直下には渦文をもつ。

第2類 (48) : ノダップⅡ式に相当するもの。表IV-2ではⅢ b-3と表記した。

48は器面に条の細い整ったLRの縄文が縦方向に回転施文されている。

IV群 a 類土器 (図IV-1 ~ 3・5 ~ 12-4 ~ 21・49 ~ 117・119 ~ 168、表IV-2、図版11 ~ 14・16 ~ 21-57 ~ 73・76 ~ 81)

平成14年調査範囲で南西から北東へ向かって検出された沢跡の部分を除き、調査範囲のほぼ全面に分布する。平成16年調査範囲の丘陵部分とその崖下の平成15年調査範囲、南東側の平成15年調査範囲で多く出土している。崖下の平成15年調査範囲よりも平成16年調査範囲の丘陵部分での分布が濃く、中でも尾根側の分布が濃い。

第1類 (49~130)：元和遺跡F群に相当するもの。

a種 (49~68)：複数の降帯をもつもの。

a 1 (49~53・59) は横環する降帯を縦位・斜位・弧状の降帯により繋ぐもの。降帯に縄文の施されるものと縄線文の施されるものがある。**49~51**は縦位の降帯で繋ぐもの。**51**は降帯間が縄文地でボタン状貼付文をもつ。**52**は斜位の降帯で繋ぐ。**53**は口縁の降帯から弧状の降帯が付けられる。**59**は縦位降帯に縄線文が2条施される。**51**以外は降帯間が無文である。

a 2 (54~62) は横環する2~3本の降帯をもつものである。**55・57・60・61**は降帯と体部で縄文の施文方向を変えている。降帯間が無文のもの縄文が付いてしまったものものがある。

a 3 (63~68) は口縁に1本のみ降帯をもつ。**64・66~68**は降帯・口縁部と体部とは縄文の施文方向を変えている。

b種 (69~72)；貼付文をもつもの。

b 1 (69・70) は口縁に頂部をもち、頸部に貼付帯が巡る。頂部直下から頸部に垂下する貼付文をもつ。

b 2 (71・72) は小波状口縁をもつ無文地のもの。**71**は頂部外面に粘土紐によるループ状の貼付文をもつ。**72**は頂部に耳状の貼付をもつ。

c種 (4・11・73~87)；縄線文をもつもの。

c 1 (73) は口縁部に2条の縄線文を施し、その間に管状工具による刺突文を加えたものである。

c 2 (74~76) は口縁部を縄線で画し無文帯を設けるものである。**74**は波状口縁に沿って縄線文が施されている。**75・76**は縦位に縄線を配する。

c 3 (4・11・77~87) は口縁部に縄線文を1~2条巡らすもので、無文を地とするもの (**77~80・82・83**) と縄文を地とするもの (**4・7・81・84~87**) とがある。

d種 (5・88~96)；縄文地に沈線文をもつもの。

d 1 (88) は沈線文と刺突文をもつもの。**88**は縄文地に半截竹管状工具により、垂下する蛇行沈線文の横長の区画文を施す。縦に展開する沈線文の間には管状工具による刺突文が縦方向に並ぶ。

d 2 (89・90) は沈線文と貼付文をもつもの。**89**は山形の隆起部の下に頸部まで縦位の貼付文をもつ。縄文地の器面を口縁に1本、頸部に2本の横走沈線により口縁部を区画する。頸部の沈線はC状に繋いでいる。貼付文の下から沈線により2本一組の垂下する弧線沈線が描かれる。**90**は口縁に耳状の貼付文をもち、口縁部は無文地、体部は縄文地である。口縁を2本の沈線で画し、口縁部に鋸歯状・弧状の文様を描くもの沈線文をもつ。

d 3 (5・91~96) は沈線文のみをもつもの。**5**は口縁部に半截竹管状工具による横走沈線が2条巡る。**91**は口頸部に横走する沈線や弧線、体部に半截竹管状工具による横長の区画文と思われる文様が描かれている。**92**は口縁に横線、頂部下の口縁部に弧線文が2本の沈線で描かれる。**93**は口縁部に2本と3本単位の細い沈線がある。**94**は口縁に3本の沈線、口縁部に弧線文を組み合わせた文様が描かれる。**95**は口縁部に横長の長楕円形区画文を重ねたような文様が描かれる。

96は頸部を横走する線で区画し、体部に縦方向の直線と弧線を組み合わせた5本の線からなる文様が描かれ、その間が横線および斜線で充填される。

e種 (97~103)；無文地に細い沈線により格子状や斜格子状、鋸歯状沈線文が描かれるものである。

e 1 (97・98・100・101)は折り返し口縁、折り返し風の口縁をもつ。97・98・101は口縁が無文となる。100は口縁まで斜格子状沈線文が及ぶ。97・101は頂部をもつ。98・100は平縁である。

e 2 (99・102)は折り返し口縁をもたないものである。99は斜格子状沈線、102は格子状沈線文をもち口縁は無文帯となる。

f種 (9・10・12~14・16・104~117・119~126)；縄文のみのもの。便宜上第2~4類の粗製土器と思われるものもここに含んだ。

f 1 (104~109・111)は折り返し口縁をもつもの。104~106・109・111は口縁が無文となる。107の口縁には縄文が及ぶ。

f 2 (9・10・13・108・110)は折り返し口縁をもたず、口縁が無文となるものである。いずれも頂部をもつ。13は口唇に刻み目をもつ。13・108・110は第3~4類の粗製土器と思われる。

f 3 (112~117)は平縁で折り返し口縁をもたないものである。112は口縁までは縄文が及んでいない。113~117は口縁と体部とでは縄文の施文方向を変えている。第3~4類の粗製土器と思われる。

f 4 (119~125)は口縁と体部とでは縄文の施文方向を変えていないものである。120は口縁に頂部をもつ。

f 5 (14・16)は縄文を施した跡に器面調整されている。第3~4類の粗製土器と思われる。

f 6 (126)は縄文が施されている。126は底部である。

g種 (15・17・127~130)；無文のもの。

15・127~130は器面に錠状工具によるとみられる擦痕がある。15・130は口縁部が多段となる。17は手捏ねの小型の土器。

第2類 (6・7・131~158)；新道4遺跡盛土1類に相当するもの。トリサキ式に相当する。

a種 (6・7・131~133・135~144)；無文の器面に直線・弧線などの沈線により文様を描くもの。

a 1 (131・132・143)は直線的な文様の描かれるものである。131は折り返し口縁をもち、直線により懸垂文が描かれる。132は口縁に頂部をもち、細い沈線により横線、斜線が描かれる。143は口縁に5本、口頸部に3本の横走沈線により区画される。

a 2 (6・7・133・135~138・141・142・144)は曲線的な文様の描かれるものである。6は指頭によるつまみ痕のある頂部をもち、頸部がくびれ口縁が外反する。口頸部と胴部の最も張り出した部分に横走沈線沈線を引き、文様帯を区画して、連弧文や横線、波状文などが描かれている。文様帯を区画する沈線は錠状工具、文様帯は半截竹管状工具による。7は2本一組の沈線による沈線文をもつ。口縁に山形隆起部をもつ。口縁に横走沈線を巡らせ、その下に凸レンズ状沈線文や弧線による沈線文が施されている。133は口縁には鋭角度の波状沈線文が横方向に展開する。口頸部には振幅の大きな蛇行沈線文横方向に展開する。135・136は折り返し口縁をもつ。折り返し口縁は無文帯となる。135は口縁に頂部をもち、口縁部にばねを伸ばしたような曲線による文様が描かれる。136は口縁部に連弧文が描かれている。137は口縁に頂部をもつ。口縁に1本の横走沈線を引き、その下に連弧文が描かれる。138は楕円形の区画文とみられる文様をもつ胴部破片である。

a 3 (139・140)は口縁の頂部外面に耳状の貼付をもち、頸部を沈線により区画するものである。いずれも口縁と頸部に2本の横走沈線を引き、文様帯を区画する。口縁部には2本単位の沈線により文様が描かれている。139は、連弧状、凸レンズ状、J字状、波状の沈線文、140は鱗状沈線文をもつ。

b種 (134・145～156) : 無文の器面に沈線により垂下する蛇行沈線文や入組文などの文様を描くもの。

b 1 (134・145～151) は垂下する蛇行沈線文をもつものである。134・148・150・151は単線、145～147・149は2本一組の沈線により沈線文が描かれている。134は頸部がくびれ口縁が外反する。器面には1本の沈線により垂下する蛇行沈線文とみられる文様が描かれている。口縁から頸部は無文帯となる。145～147・150は口縁に横走沈線を引いて口縁部文様帯を区画している。150は小波状口縁である。148・149・151は口縁の区画をもたないもの。

b 2 (152～156) は頂部から口縁に粘土紐による8の字状の貼付文をもち、器面に垂下する蛇行沈線文や渦巻文などの文様を描くもの。155・156は渦巻文をもつ胴部破片である。

c種 (8) : 頂部から口縁に粘土紐による8の字状貼付文をもち、器面は縄文もみのもの。

8は胴下半から底部は無文となる。

d種 (157・158) : 頂部に刻みをもち、頂部から口縁に粘土紐による8の字状の貼付文をもつもの。器面には縄文地に沈線による文様が描かれる。

第3類 (18) : 新道4遺跡盛土2類に相当するもの。

18は櫛状工具で文様を描いた後、沈線で縁取りをするものである。器高28.9cm、口径21.2cm、底径10.3cmを計る深鉢形土器である。胴上部が張り、頸部がくびれ、口縁が外反する。

第4類 (20・159～161) : 新道4遺跡盛土3類に相当するもの。

20は頸部と胴部を沈線により区画し、頸部から胴上部に磨消縄文による渦巻文・区画文、沈線による波状文、「く」の字状文を描くものである。159は太い沈線により入組文が描かれる。160・161はクランク文をもつ。160は縄文地、161は無文地に施されている。

第5類 (19・21・162～168) : 新道4遺跡盛土5類に相当するもの。

19・21は頸部がくびれ口縁が外反する。19の口縁は9か所の隆起部をもつ小波状口縁である。頸部を沈線により区画して無文帯とする。また胴下部は沈線により区画する。口縁部文様帯は沈線文、胴部文様帯は磨消縄文による渦巻文、沈線文が施される。21の口縁は5か所の隆起部をもつ小波状口縁である。頸部は縄文施文後に狭い幅でナデ消され無文となる。口縁部は沈線文、体部は磨消縄文による渦巻文とクランク文が施される。162～166は口縁部に弧状・鋸歯状・直線的な波状文が複数本一組の沈線により施されている。167・168は底部を沈線で区画する。167は無文地に太い沈線文、168は縄文地にクランク文をもつ。

IV群 b 類土器 (図IV-12-169～172、表IV-2、図版21-81)

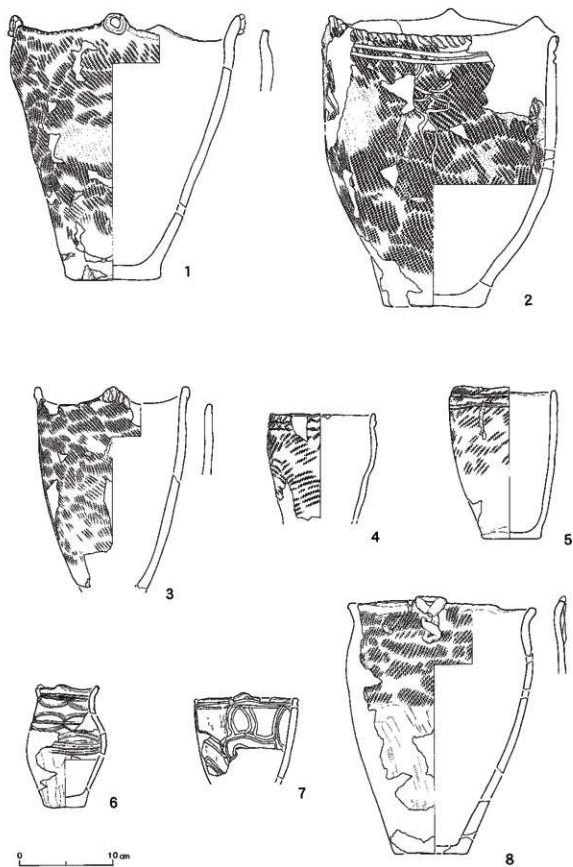
平成16年調査範囲の丘陵部分崖下の平成15年調査範囲、前述の沢の流域と、南東側の平成15年調査範囲で出土している。169・170は手稲式に相当するもの、171・172はウサクマイC式に相当するものである。171は口唇際を沈線により区画し、口縁部に鋸歯状の沈線文が入れ子状に施されている。

V 群土器 (図IV-12-173、表IV-2、図版21-81)

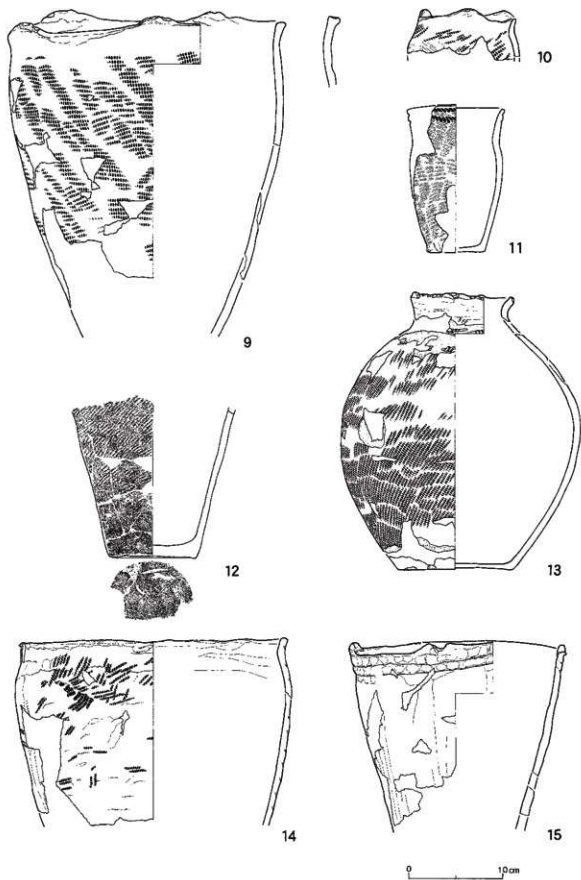
L68区で1点のみ出土している。173は口縁に沈線が2条引かれている。胎土は緻密であり、内外面とも丹念に磨かれている。

VI群 a 類土器 (図IV-12-118、表IV-2、図版19-79)

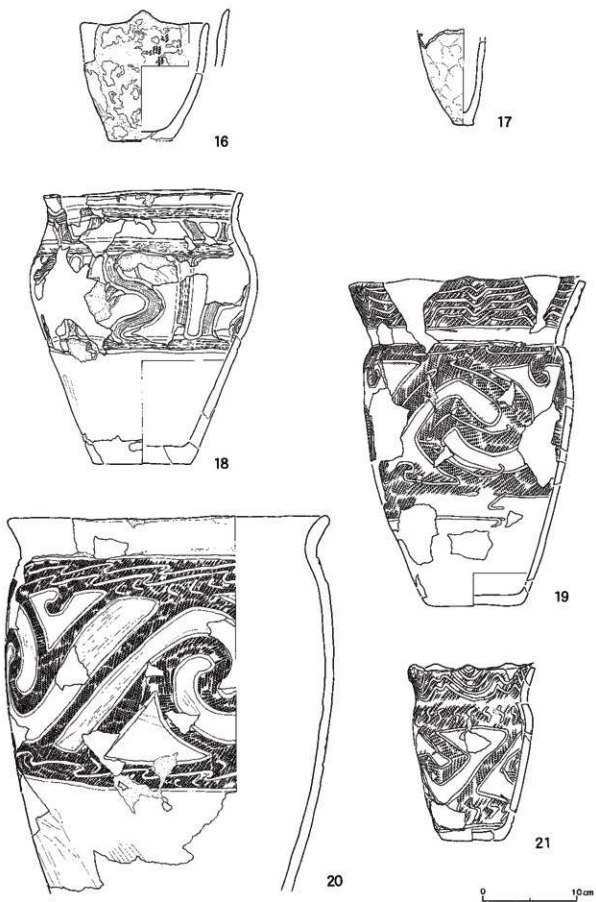
南東側の平成15年調査範囲のA・B・D52区で1個体出土している。118は南川IV群に相当する。



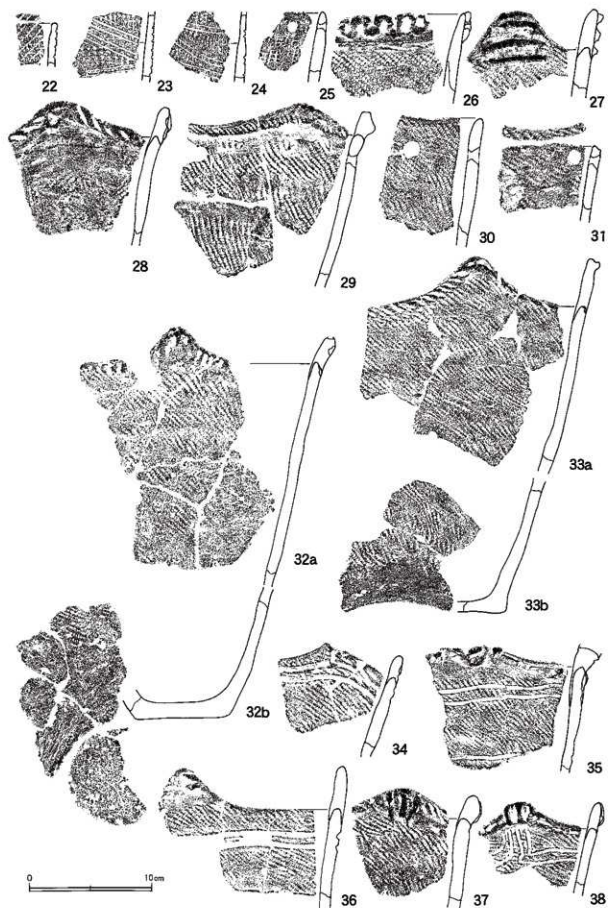
図IV-1 包含層出土の土器(1)



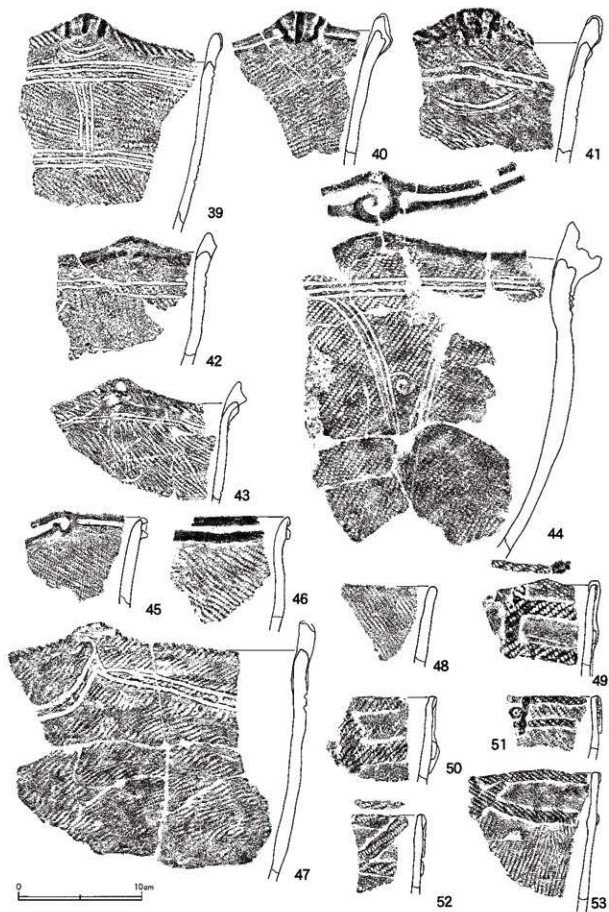
図IV-2 包含層出土の土器(2)



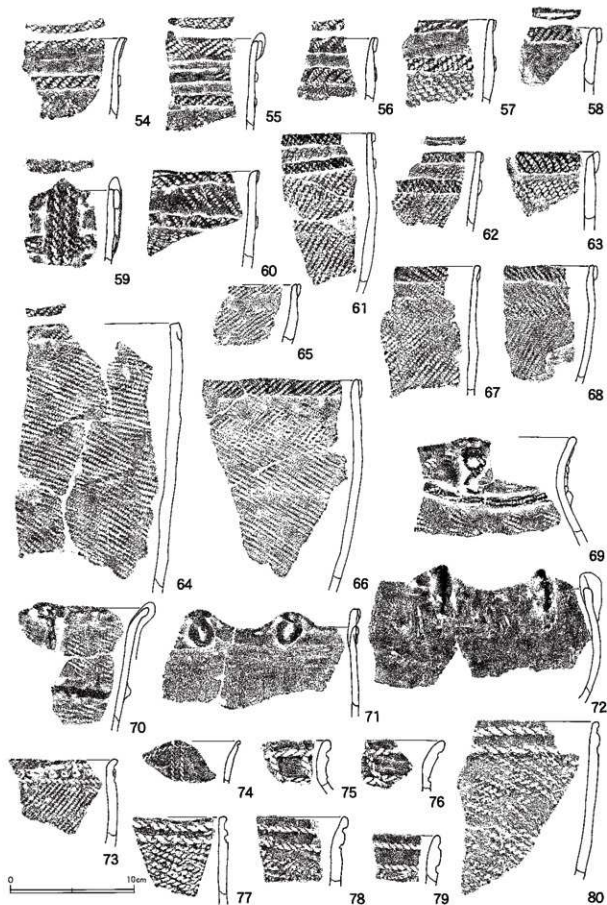
図IV-3 包含層出土の土器(3)



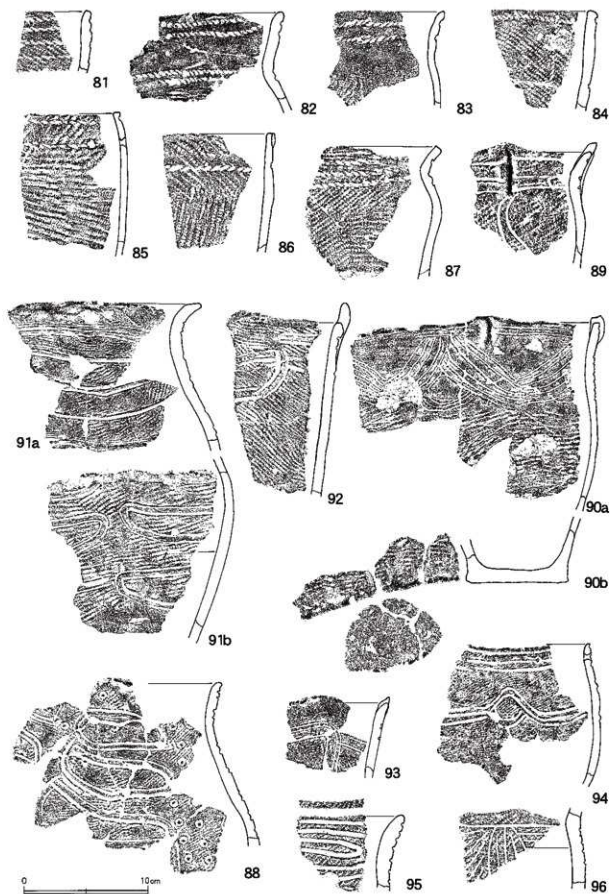
図IV-4 包含層出土の土器(4)



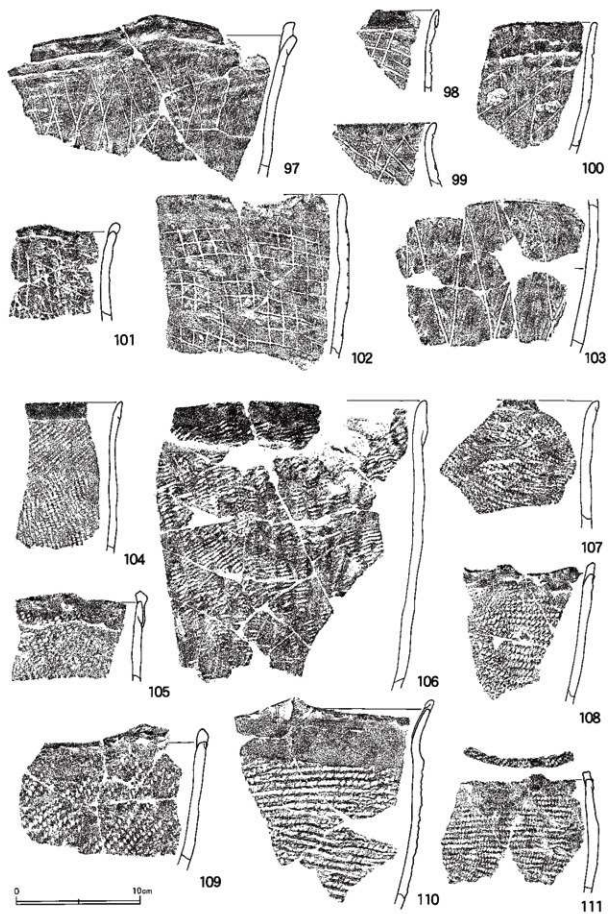
図IV-5 包含層出土の土器(5)



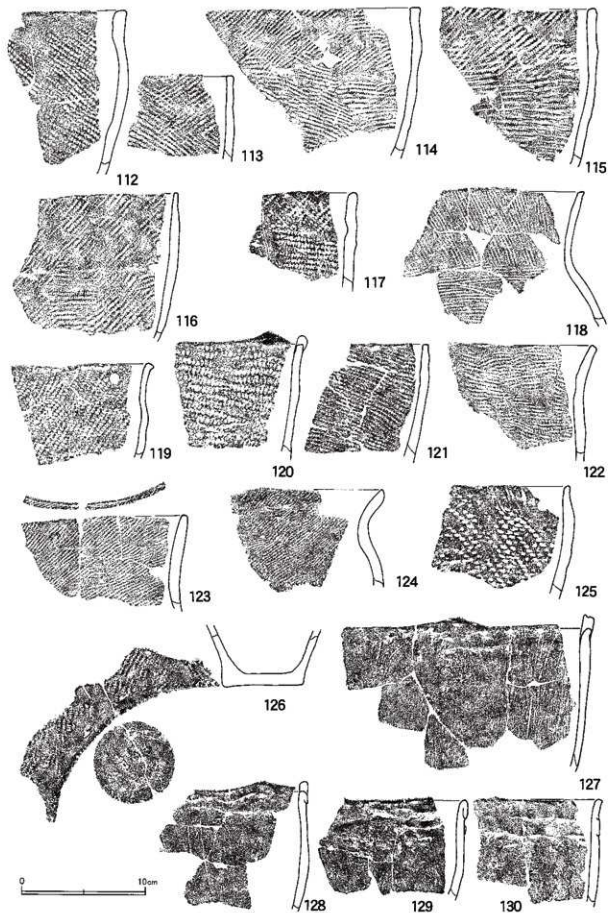
図IV-6 包含層出土の土器(6)



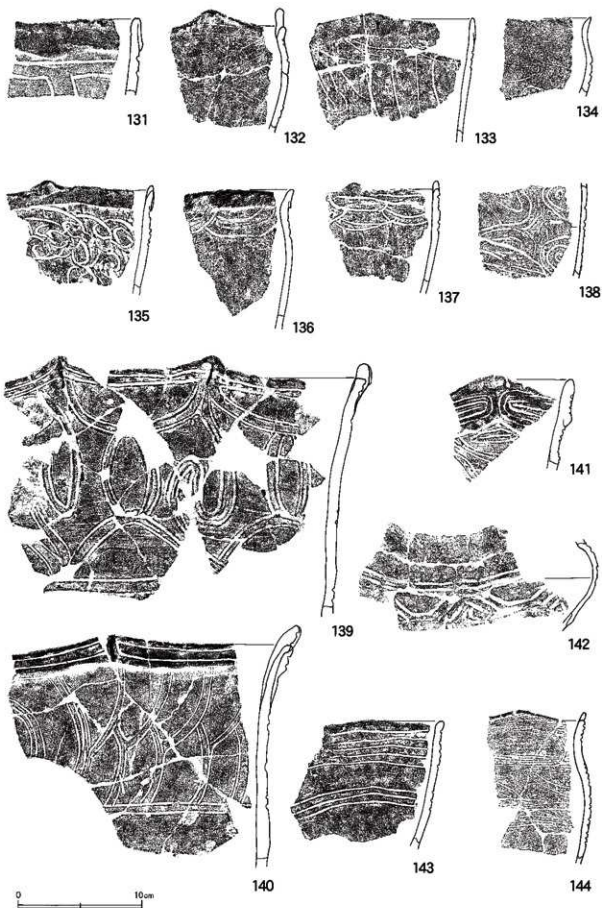
図IV-7 包含層出土の土器(7)



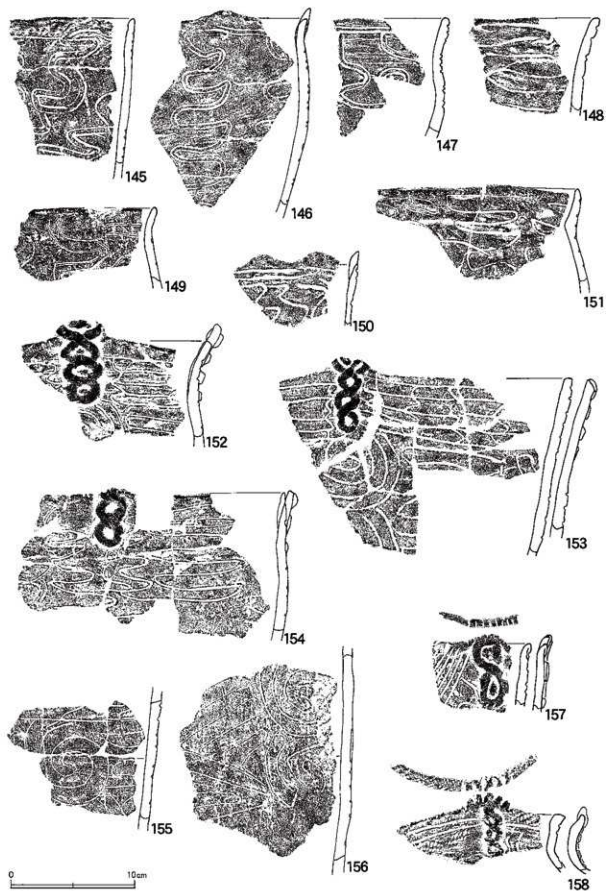
図IV-8 包含層出土の土器(8)



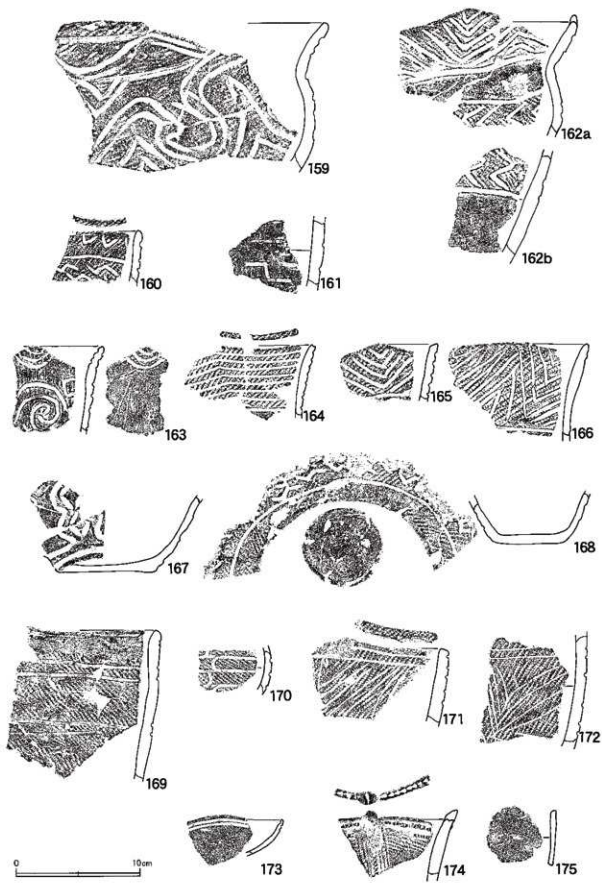
図IV-9 包含層出土の土器(9)



図IV-10 包含層出土の土器 (10)



図IV-11 包含層出土の土器 (11)



図IV-12 包含層出土の土器 (12)

口縁部にRL斜行縄文、胴上部にRL横走縄文が施されている。

VI群b類土器 (図IV-12-174、表IV-2、図版21-81)

平成14年調査範囲のL58・M60区で1個体出土している。174は後北C₃-D式の古手のものに相当する。口唇が角形で左方向からの連続刺突風の刻みをもつ。口縁の2本の微隆起線文は刻まれている。突起下には縦位の刻目列が施される。器面には微隆起と刻目列に沿って横位と縦位の帯縄文が施されている。

円盤状土製品 (図IV-12-175、表IV-2、図版21-81)

175はP70区のIV層で1点のみ出土した。IV群a類土器の破片の縁部を削り円形に加工したものである。器面は無文である。(鎌田)

2 石器

石槍 (図IV-13-1、表IV-3、図版23-83)

1は基部の先端が再加工され、基部の方が長くなっている。石材は頁岩である。

石鏃 (図IV-13-2~30、表IV-3、図版23-83)

2~4は平面三角形の無茎である。2・3は先端を若干欠損している。5は平面三角形で底辺が深く内湾している凹基である。6は木の葉形で、上下両先端を欠損している。7・8はカエシが不明瞭な有茎鏃で、先端を若干欠損している。9~21は有茎で、カエシが比較的明瞭なものである。11・15~17・29は先端を、12・21・23・26・28は基部下端を、27はカエシの片先端を、18・30は上下両端を欠損している。15は周縁のみ剥離調整されている。18~21は入念な剥離調整が施された薄型の平基三角形である。22~30は基部に対して基部が長めのものである。9・17・22・23・26・27は基部にアスファルト様の物質が付着する。石材は4・6~8・12・18・19が黒曜石、5・10・23がめのう、それ以外は頁岩である。

石錐 (図IV-13-31~33、表IV-3、図版23-83)

31・33は剥片素材の一端に1か所、32は2か所の刺突部を作り出している。2か所のうち1か所の刺突部の先端が欠失している。いずれも石材は頁岩である。

つまみ付きナイフ (図IV-14-34~38、表IV-3、図版23-83)

34は縦長剥片の背腹両面が剥離調整されている。平面下端が平坦に加工されている。35は片面調整で、右側縁に連続的な加工が施されている。36は背面の左側縁と腹面の左側縁に加工が施されている。37は背面全体を剥離調整している。腹面は周縁に細かな剥離が見られる。平面下端は平坦に作られている。38は背面全体と腹面のつまみ部分および下端の両端を剥離調整している。断面は厚みのある三角形である。石材はいずれも頁岩である。

スクレイパー (図IV-14-16-39~59、表IV-3、図版23・24-83・84)

39は両面が念入りに加工されており、他のスクレイパーとは性格が異なると思われる。40・41・45は両面の周縁に部分的に加工が施されている。42は剥片の両側縁に連続した加工が見られる。43・49は背面側の周縁2/3に連続した剥離調整が施され、腹面の一端にも調整が施されている。44は厚みのある縦長の剥片の背腹両面の周縁に加工が見られる。表面にはシミ状の付着物が観察される。46・

52は素材の周縁に粗い剥離調整が施されている。47は薄手の剥片の背面の周縁と腹面の一部に剥離調整がみられる。48は縦長の剥片の背面両側縁と腹面の下端に連続した加工が施される。50・51・56・59は縦長剥片の周縁に不連続な加工が施される。53は剥片が二点接合した。縦長剥片の腹面側全体に粗い加工が施される。54・55は縦長剥片の背腹両面の片側縁に連続した剥離調整が施されている。57は縦長素材の背面側の側縁に剥離調整が施される。58は縦長剥片の背面側全体に加工がみられる。石材は43・46・51がめのう、59が玄武岩、それ以外は頁岩である。

石 斧 (図IV-16・17-60~68、表IV-3、図版24-84)

60は基端部の破片である。打ち欠き調整の後磨かれている。61は両刃・円刃で全体に磨きかけられ、丁寧に仕上げている。62は石斧の破損品に剥離調整を施して再加工しているものである。63は両刃・平刃で全体に丁寧な磨きかけられている。刃部が最大幅の撓形である。64は左右非対称の素材を全体に打欠いたのち、研磨して仕上げている。両刃・円刃である。65は両刃・円刃で完成品である。全体によく磨かれ、鑄はなく刃部と体部の境は研磨によってなめらかに仕上げられている。66は両刃で刃部が先細る。刃部は約半分が破損している。体部の断面はほぼ円形で厚みがあり、石棒様である。67は2点が接合したものである。両刃・円刃である。全体に入念な研磨が施され、なめらかに仕上げられている。68は2点が接合したものである。両刃・円刃である。体部断面は厚みのある楕円形で、全体に入念な研磨が施されている。石材は61・66が片岩、68が閃緑岩、それ以外は泥岩である。

たつき石 (図IV-18-69~74、表IV-3、図版24・25-84・85)

69・74は上下両端に使用痕がある。70は棒状素材の上下両端および側縁、平坦な広い面にも敲打痕がある。71は棒状素材の一端に打ち欠きを施し、敲打して使用している。72は棒状素材の一端と側縁の一部に敲打痕がある。73は扁平な素材の表裏両面に使用痕がある凹み石である。また側縁にも数か所、敲打痕がある。石材は70が砂岩、それ以外は安山岩である。

扁平打製石器 (図IV-18-23-75~100、表IV-3、図版25・26-85・86)

78・89・92・94・97・99はそれぞれ2点の破片が接合した。

75・77~79・81・84・85・87・89~94・96・97・99・100は機能部分がすり面状に平坦になっているものである。82・88は機能部分が刃部状で機能部の短軸上の断面がV字形に近いものである。76・80・83・86・98の機能部は、平坦な面と刃部状の部分とが混在する。

75~78・85・86・91~94・96・97・99は機能部分付近と素材長軸上の両端に打ち欠きが見られる。79は長軸上の一端にのみ打ち欠きおよび敲打痕がある。80は長軸上の両端に打ち欠きがあり、機能部分に對する縁辺部に敲打痕がある。81は素材長軸上の両端に打ち欠きと敲打痕がある。82は長軸上の両端と機能部分周辺の打ち欠き調整が連続して施されている。83・88は素材長軸上の両端と、機能部分周辺に打ち欠きがあり、機能部と對する縁辺にも打ち欠きが見られる。84は図中表面の長軸上の両端に、また裏面の周縁全体に打ち欠きが見られる。87は長軸上の両端に敲打による加工が施され、機能面周辺に打ち欠きが見られる。88は部分的に変色しており、被熱したと思われる。89は長軸上の一端と機能部周辺に打ち欠きがある。90は長軸上の両端から打ち欠き痕が大きく広がっている。また機能面周辺にも若干の打ち欠き痕がある。95は長軸上の両端に打ち欠きを持ち、長軸方向の両縁辺のうち、一辺はすり面状の平坦な機能部、もう一辺は打ち欠きにより刃部状の機能部となっている。98は機能部分周辺に打ち欠きを持つ。100は素材長軸上の両端に打ち欠きがある。

掲載の扁平打製石器の石材はすべて安山岩である。

北海道式石冠 (図IV-24-101~107、表IV-3、図版26・27-86・87)

おおかたは素材の中間を鉢巻き状の敲打痕が一巡するが、102~104の鉢巻き状加工はやや下側に施されている。101はすり面が図中の裏側面に傾く。102は1/3ほどを欠損しているが、そのあとに施されたと思われる敲打加工痕が観察される。103は1/3ほどを欠失している。鉢巻き状の加工に加え、上端縁に沿って溝状に敲打痕が巡る。すり面の縦断面は比較的平坦である。104~106はすり面が図中の裏側にやや傾く。105はすり面周辺の縁に剝離痕がある。107は鉢巻き部分よりも下部分の破片である。すり面の縦断面は平坦である。

掲載の北海道式石冠の石材はすべて安山岩である。

すり石 (図IV-25-108~111、表IV-3、図版27-87)

いずれも横長扁平の素材の、長軸上の一側縁を使用している。108・111は広い面に敲打痕も見られる。石材はすべて安山岩である。

砥石 (図IV-25-112・113、表IV-3、図版27-87)

いずれも扁平な素材の片面を使用している。114は2点が接合したものである。石材はどちらも安山岩である。

石錘 (図IV-26-114~116、表IV-3、図版27-87)

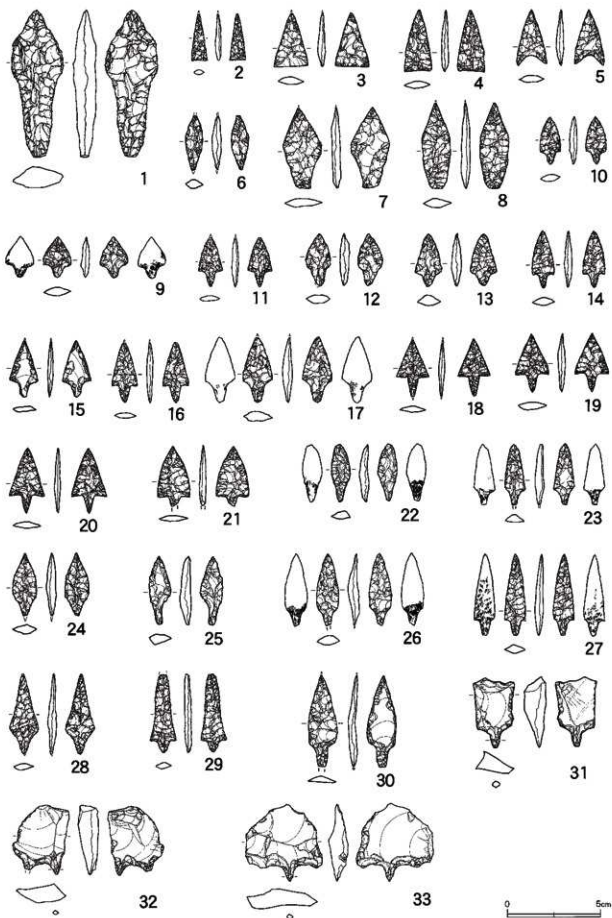
いずれも扁平な楕円の素材の長軸上の両端に打ち欠きを持つ。石材は安山岩である。

石皿 (図IV-26-117~119、表IV-3、図版27-87)

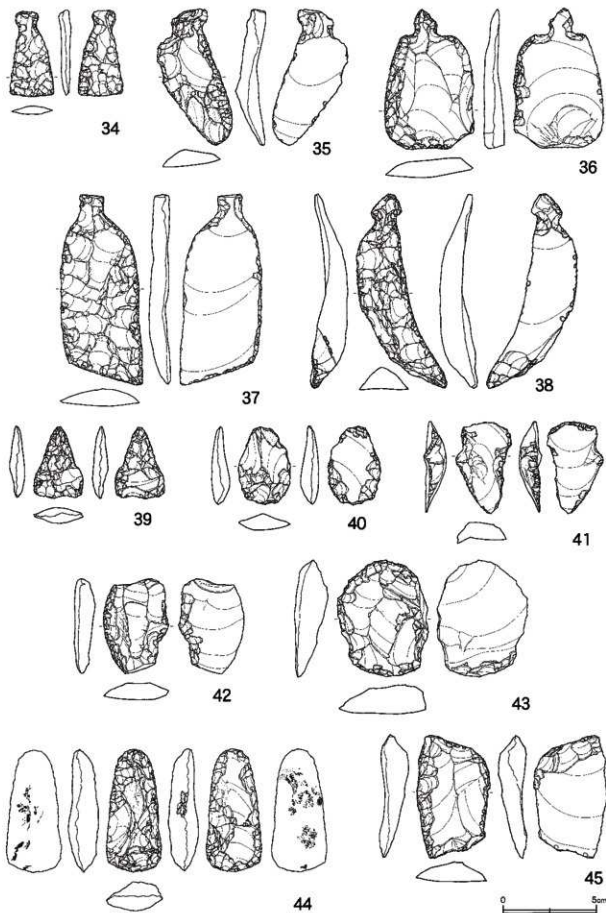
いずれも石材は安山岩、片面使用である。117は一縁辺付近に使用面がある。118はほぼ中央に円状に凹んだ使用面がある。119は広く一面を使用し、特に中央部分に凹んだ面ができています。(新家)

3 土製品・石製品 (図IV-27・28-120~134、表IV-3、図版28-88)

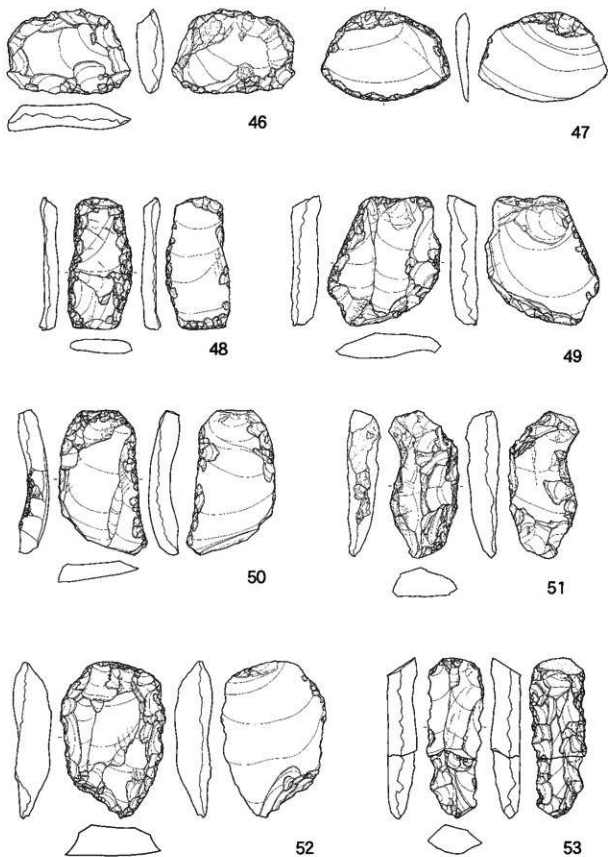
120は土製の耳栓である。中央が凹み、円形の穿孔がある。薄く作られた縁が一部欠損している。凹状の片面に赤色顔料塗彩の痕跡が残る。121はカンラン岩の垂飾である。楕円形の素材に長径8mmほどの平面楕円形の穿孔がある。表面には成形の際についたと思われる擦痕が所々残る。122・123・128は扁平な軽石に穿孔をもつ垂飾で、122は約半分を欠損している。128は研磨によって素材を長方形に成形している。124は安山岩の扁平な礫片に穿孔のみを施したもので、他に加工痕はない。自然孔の可能性もある。125~127は自然孔を持つ安山岩の礫である。125は約半分を破損している。129は軽石の扁平円礫の一端に研磨による成形痕をもつものである。130は軽石礫を、研磨によって扁平な円形に成形したものである。131~133は安山岩の北海道式石冠のミニチュアである。132・133は鉢巻き状の敲打痕が一巡している。132はすり石としての使用痕はないが、機能面がなめらかな凸面状になっている。131は鉢巻き状敲打痕は半周のみ施されている。他に使用痕はない。134は石冠椽石器と思われるものである。図中の断面は両辺に若干のふくらみをもつ三角形である。横断面の三角形の両裾部分、図上の表面下端に沿って、長軸上に段がつけられている。また、三角形の頂点に当たる部分は入念に成形され、尖っている。全体によく磨かれ、表面はほぼ全面が非常になめらかである。石材は安山岩である。(新家)



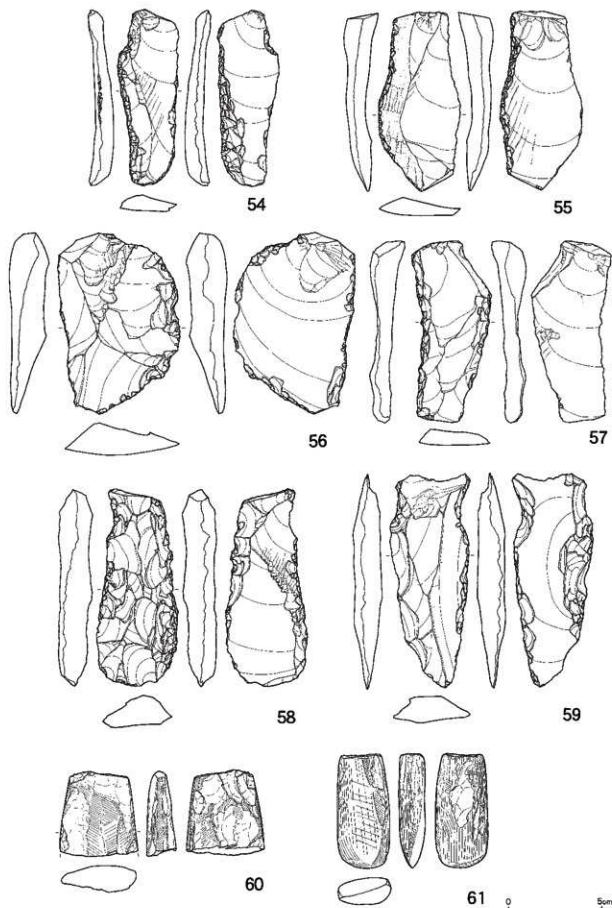
図IV-13 包含層出土の石器 (1)



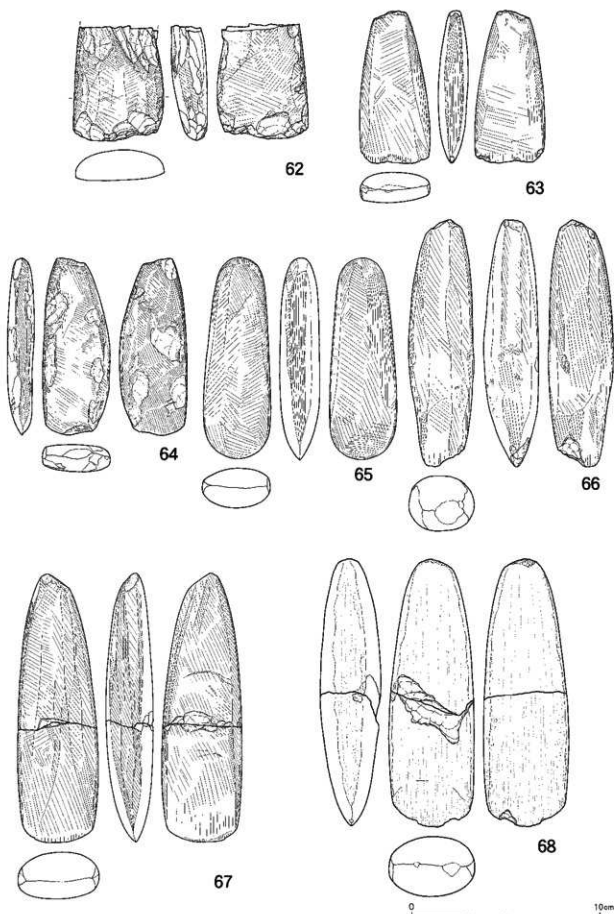
図IV-14 包含層出土の石器(2)



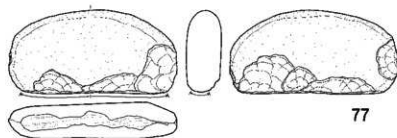
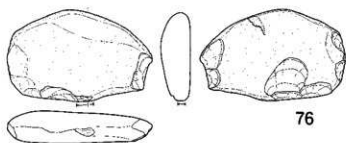
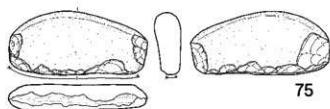
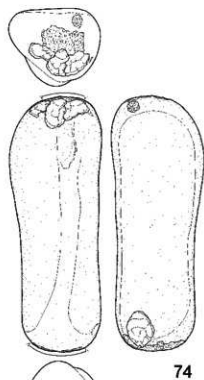
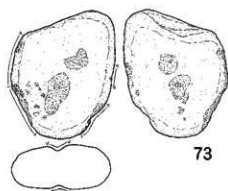
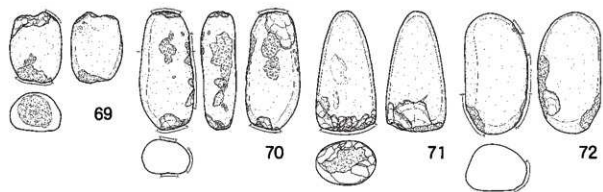
図IV-15 包含層出土の石器 (3)



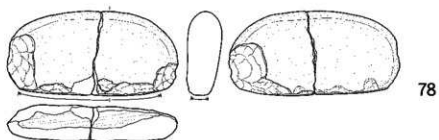
図IV-16 包含層出土の石器(4)



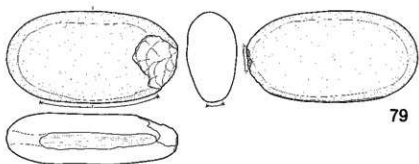
図IV-17 包含層出土の石器 (5)



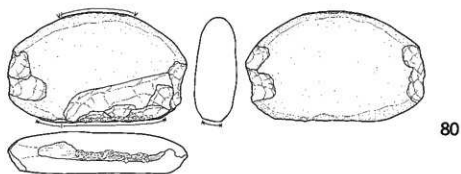
図IV-18 包含層出土の石器 (6)



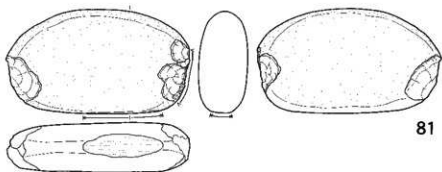
78



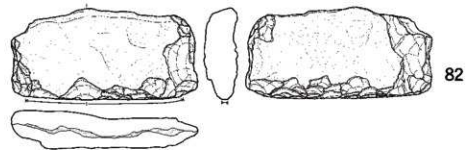
79



80



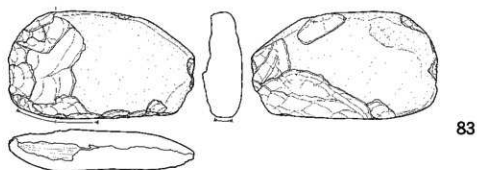
81



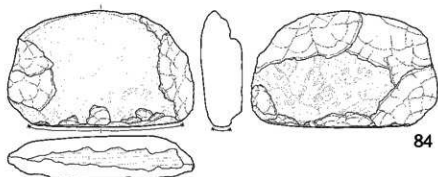
82



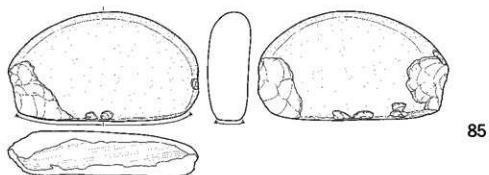
図IV-19 包含層出土の石器(7)



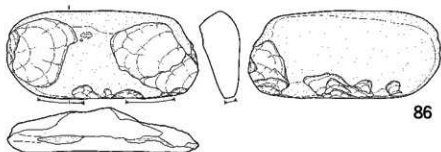
83



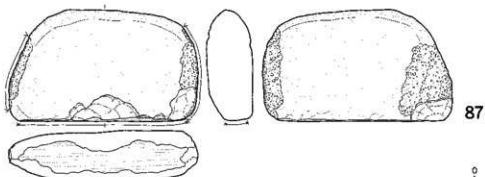
84



85



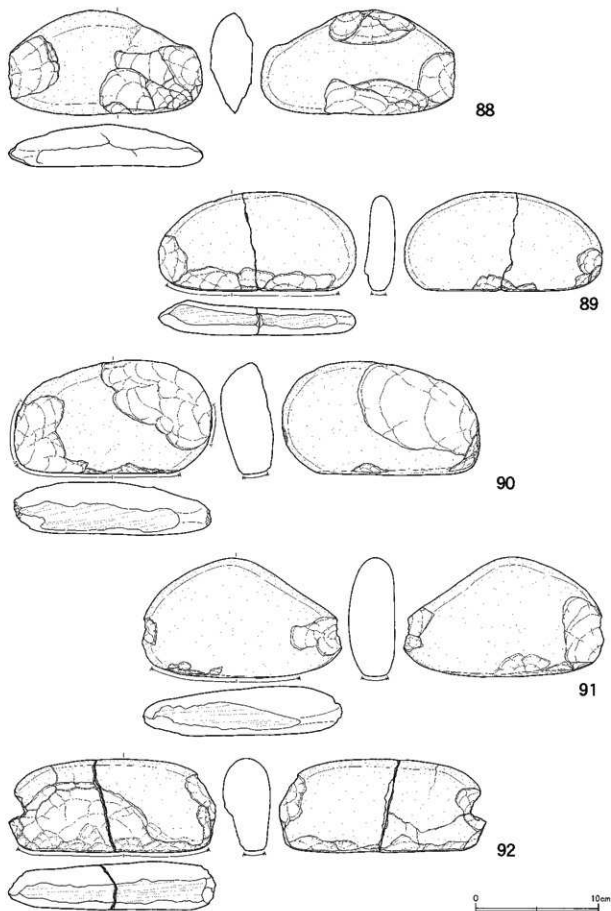
86



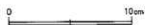
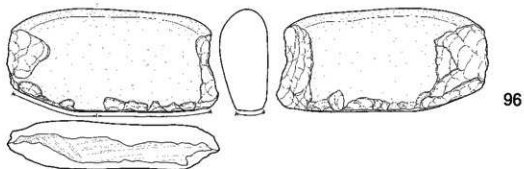
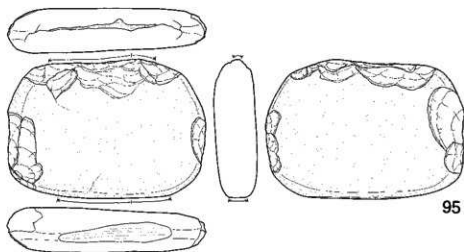
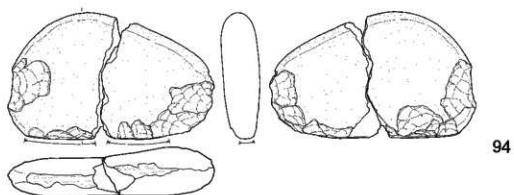
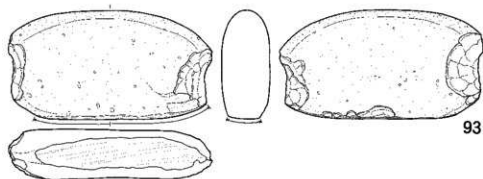
87



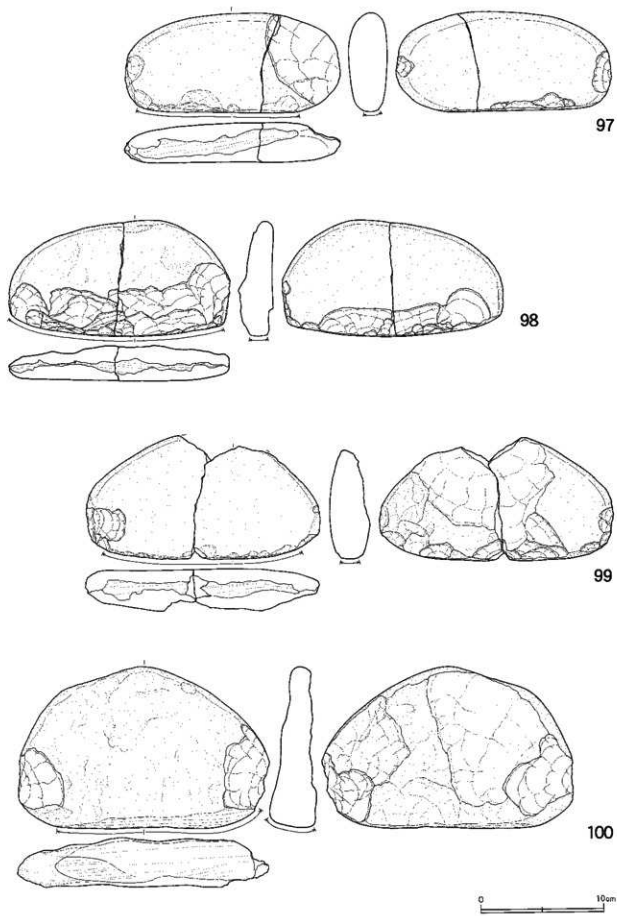
図IV-20 包含層出土の石器(8)



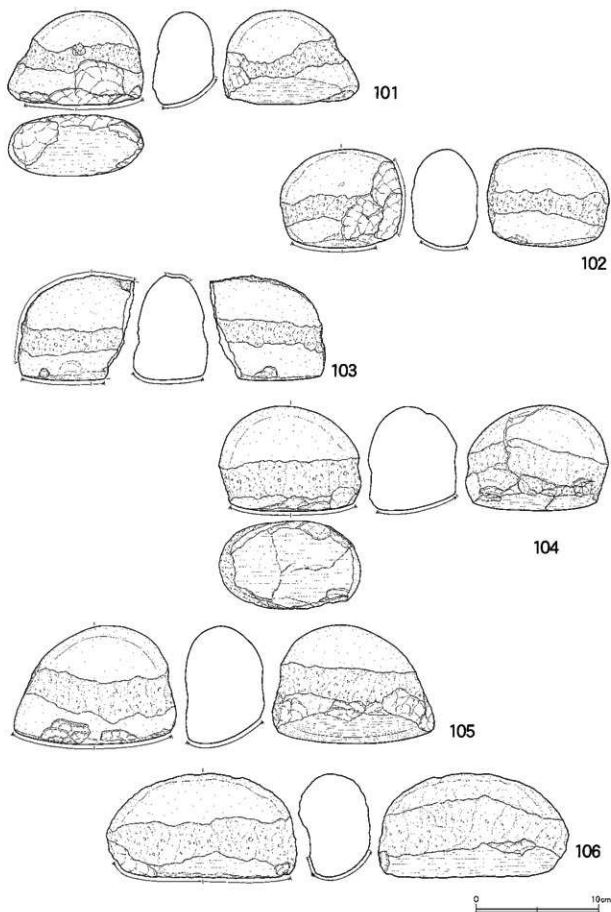
図IV-21 包含層出土の石器(9)



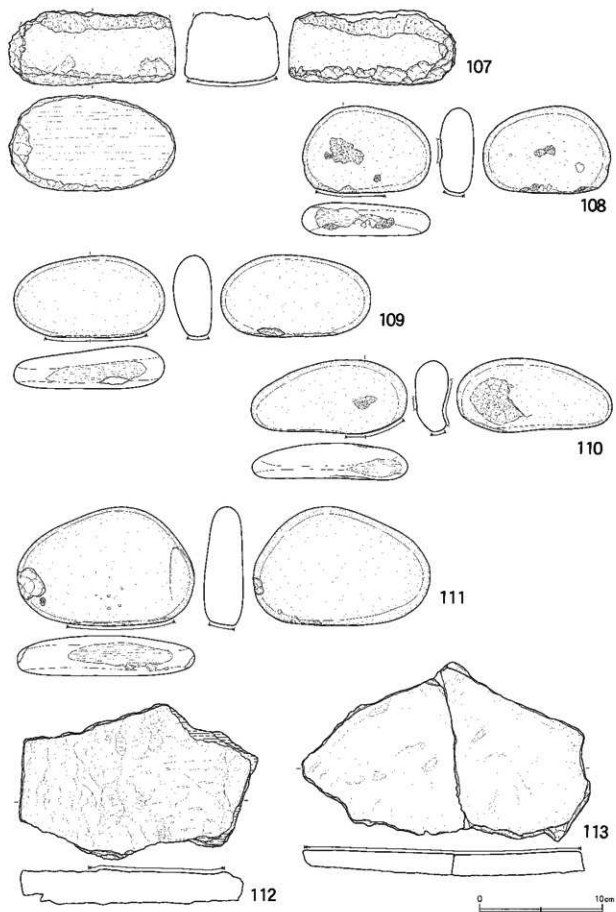
図IV-22 包含層出土の石器 (10)



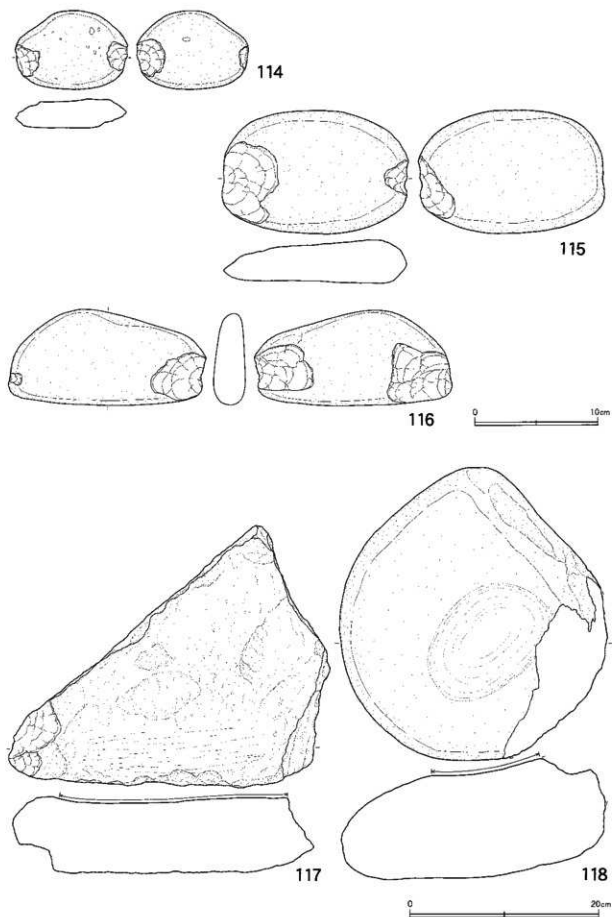
図IV-23 包含層出土の石器 (11)



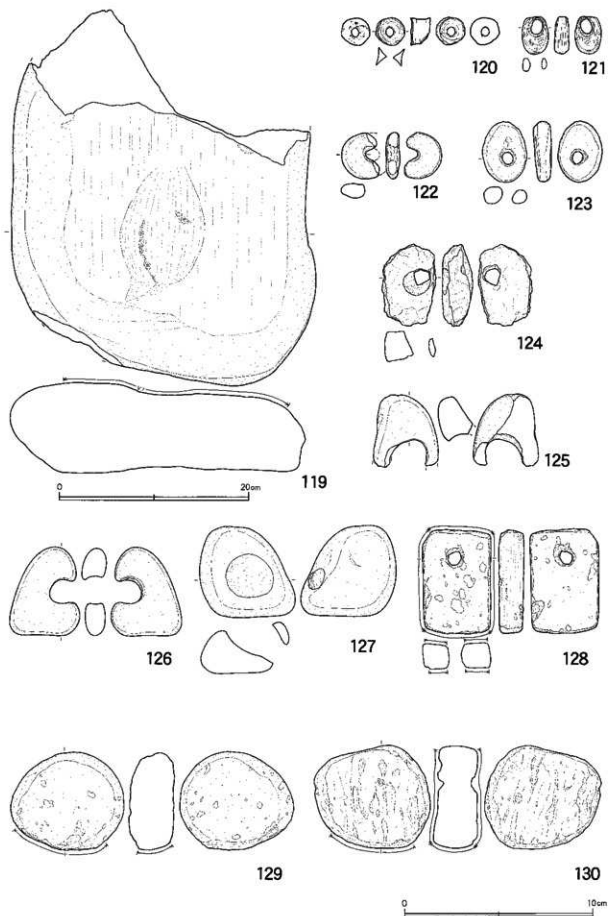
図IV-24 包含層出土の石器 (12)



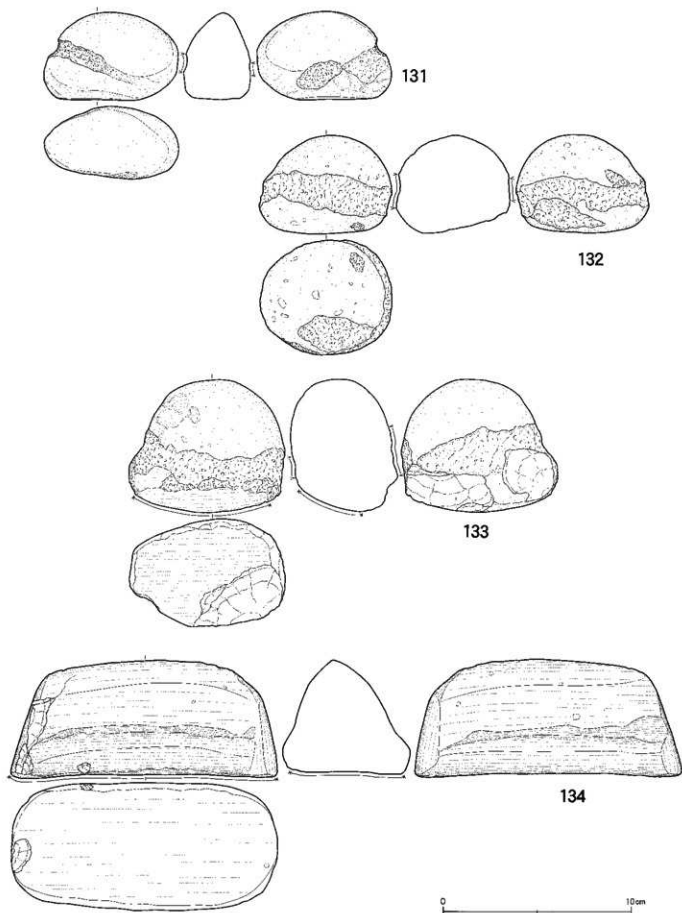
図IV-25 包含層出土の石器 (13)



図IV-26 包含層出土の石器 (14)



図IV-27 包含層出土の石器 (15)、土製品・石製品



図IV-28 包含層出土の石器 (16)、石製品

表IV-1 包含層出土層位別遺物点数一覧

調査年	層位	土器											剥片石器										礫石器										石器製品計	石	計			
		Ia IIb	IIIa	IIIb	IVa	IVb V	VIa	VIb	土器製品	土器計	石鉄維	石	つまみ	スクレイパ	Uフレイク	アフレイク	ビエス・エスキ	石核	フレイク	石斧	たたき石	野打製石器	北海道式石冠	すり石	砥石	石鉢	石皿	石台	原石	礫	石器製品計	石				計		
2002年	III				28			35	63										1										1							3	66	
2002年	IV	176			860	1		98	1136	6	1	6		1					10	70	5	20						2						93	1	222	1358	
2002年	風倒木 掘立 表探 排土 不明			21					22																												22	
2003年	計	177			909	1		133	1221	6	1	6		1					10	71	5	20					3						94	1	225	1446		
2003年	III	3			213				216					2						62	2														66	282		
2003年	IV	2	2430	25	19996	23	1	42	22519	3	30	1	7	73	114	18	6	41	2142	25	212	103	11	19	3	2	67	46	418	11	3352	25871				1		
2003年	V	1							1																													
2003年	風倒木 掘立 表探 排土 不明				170				170												7																	
2003年	計	3	2433	25	20379	23	1	42	22906	3	30	1	7	73	116	19	6	41	2211	25	214	103	11	19	3	2	1	67	46	421	11	3430	28336					
2004年	III			8	1	7003			7012	4	2	7	5							247	2	3	5	1	2								2	164	1	445	7457	
2004年	IV	1	1211	116	22526				22655	2	16	3	3	39	15	5	1	894	9	4	47	5	7	7	1	15	11	2	201	4	1291	25146						
2004年	VI			10	1	1020			1031											53													3	1	57	1088		
2004年	風倒木 掘立 表探 排土 不明			82		1266			1368			2	2																					1	9	1	63	1481
2004年	計	1	1311	118	31835				33266	2	20	3	7	48	20	6	1	1241	11	7	52	5	8	9	1	15	11	5	377	7	1856	35122						
2004年	総計	3	1	3921	143	53123	24	1	42	133	2	57963	5	156	4	15	127	136	26	6	52	3523	41	241	155	16	30	12	3	19	82	51	892	19	5511	62904		

表IV-2 包含層出土掲載土器一覽

図・掲載No	図版No	器種・部位	出土位置		点数			時期分類	計測値 (cm)			備考
			調査区	層位	小計	合計	非掲載		器高	口径	底径	
IV-1-1	10-53	深鉢	N73	IV	86	86	12	Ⅲa	28.1	24.3	10.2	貼付文
IV-1-2	10-53	深鉢	O70	IV	90	90	16	Ⅲa	28.7	(24.5)	10.9	沈線文
IV-1-3	11-55	深鉢	O71	IV	24	24	13	Ⅲa	(21.4)	(16.3)	—	貼付文
IV-1-4	11-58	深鉢	Q74・75	IV	7	8	0	IV a	(11.0)	11.1	—	縄文地に縄線文
			S73	IV	1							
IV-1-5	11-60	深鉢	N73	IV	11	11	0	IV a	16.1	10.3	6.3	縄文地に沈線文
IV-1-6	11-59	深鉢	C52	IV	12	12	0	IV a	13.0	6.8	4.4	無文地に沈線文
IV-1-7	11-57	深鉢	T77	IV	6	6	6	IV a	(9.1)	10.9	—	無文地に沈線文
IV-1-8	13-68	深鉢	C52	IV	78	78	19	IV a	(27.3)	(20.0)	(7.8)	8の字状貼付文
IV-2-9	12-63	深鉢	S76	IV	6	73	16	IV a	(33.8)	29.5	—	口縁部に無文帯
			T75・76	Ⅲ・IV	65							
IV-2-10	12-65	深鉢	U75	Ⅲ	2	10	0	IV a	—	10.1	—	口縁部に無文帯
			S74・75	Ⅲ・IV	10							
IV-2-11	11-61	深鉢	S77	IV	2	5	10	IV a	15.7	10.3	6.2	縄文地に縄線文
			T77	Ⅲ・IV	3							
IV-2-12	14-73	胴～底部	G57	IV	46	46	1	IV a	—	—	9.0	底部器面無文
IV-2-13	14-72	壺	V71	IV	159	159	28	IV a	29.3	11.0	12.2	口頸部無文
			T77	IV	12							
IV-2-14	12-64	深鉢	U75	IV・VI	7	43	49	IV a	—	28.4	—	口縁部に無文帯
			U77	Ⅲ・IV	18							
			V74・75	IV・VI	3							
			V77	Ⅲ	3							
			S75	IV	48							
IV-2-15	12-62	深鉢	S75	IV	48	48	48	IV a	—	22.9	—	無文・折り返し口縁
IV-3-16	12-66	鉢	N73	IV	9	9	2	IV a	13.9	13.6	6.7	2単位の頂部
IV-3-17	12-67	深鉢	R76	IV	7	7	0	IV a	(10.2)	—	2.3	無文
IV-3-18	11-56	深鉢	L58	IV	1	159	31	IV a	28.9	21.2	10.3	無文地に篩状工具による沈線文
			M57・58	IV	158							
IV-3-19	13-69	深鉢	A50・51	IV	67	69	12	IV a	34.5	25.2	10.2	磨消縄文・渦巻文
			B50	Ⅲ	1							
			D54	IV	1							
IV-3-20	13-71	深鉢	A50・51	IV	54	54	33	IV a	(39.6)	34.2	—	磨消縄文・渦巻文
IV-3-21	13-70	深鉢	Z051	IV	2	28	1	IV a	18.7	13.5	6.4	磨消縄文・渦巻文
			A50・51	IV	26							
図・掲載No	図版No	部位	出土位置		点数			時期分類	備考			
			調査区	層位	小計	合計	非掲載					
IV-4-22	15-75	口縁部	A54	IV	1	1	0	I a	貝殻文			
IV-4-23	15-75	口縁部	Z057	IV	1	1	0	I a	貝殻文			
IV-4-24	15-75	口縁部	F54	V	1	1	0	I a	貝殻文			
IV-4-25	15-75	口縁部	O72	IV	1	1	19	Ⅲa	魚骨回転文			
IV-4-26	15-75	口縁部	R71	IV	1	1	11	Ⅲa	貼付文			
IV-4-27	15-75	口縁部	O70	IV	2	2	0	Ⅲa	貼付文			
IV-4-28	15-75	口縁部	N73	IV	1	1	6	Ⅲa	頂部直下爪刺突文・口縁棒刺み			
IV-4-29	15-75	口縁部	N73	IV	4	4	16	Ⅲa	口縁膨隆			
IV-4-30	15-75	口縁部	O70	IV	2	2	75	Ⅲa	地文のみ			
IV-4-31	15-75	口縁部	M71	IV	1	1	5	Ⅲa	地文のみ			
IV-4-32a	15-75	口縁～胴部～底部	N73	IV	11	11	37	Ⅲa	口縁繩刺み			
IV-4-32b												
IV-4-33a	15-75	口縁～胴部～底部	N73	IV	6	6	17	Ⅲa	口縁繩刺み			
IV-4-33b												
IV-4-34	15-75	口縁部	O70	IV	3	3	0	Ⅲa	沈線文			
IV-4-35	16-76	口縁部	O70	IV	1	1	1	Ⅲa	沈線文			

図・掲載No	図版No	部 位	出土位置		点 数			時期 分類	備 考
			調査区	層位	小計	合計	非規範		
IV-4-36	16-76	口縁部	O71	IV	5	5	0	Ⅲa	沈線文
IV-4-37	16-76	口縁部	N73	IV	1	1	24	Ⅲa	貼付文
IV-4-38	16-76	口縁部	N73	IV	2	2	18	Ⅲa	貼付文・沈線文
IV-5-39	16-76	口縁部	N73	IV	1	1	26	Ⅲa	貼付文・沈線文
IV-5-40	16-76	口縁部	Q75	IV	3	3	6	Ⅲb-1	貼付文・沈線文
IV-5-41	16-76	口縁部	N73	IV	1	1	74	Ⅲa	貼付文・沈線文
IV-5-42	16-76	口縁部	O70	IV	3	3	0	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-43	16-76	口縁部	O72・73	IV	4	4	18	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-44	16-76	口縁部	N73	IV	10	10	67	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-45	16-76	口縁部	Q69	IV	1	1	1	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-46	16-76	口縁部	N73	IV	1	1	1	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-47	16-76	口縁部	N71	IV	7	7	7	Ⅲb-1	沈線文
IV-5-48	16-76	口縁部	O71	IV	1	1	0	Ⅲb-3	地文のみ
IV-5-49	16-76	口縁部	X75	IV	1	1	5	IVa	隆帯
IV-5-50	16-76	口縁部	U74	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-5-51	16-76	口縁部	S73	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-5-52	16-76	口縁部	P73	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-5-53	16-76	口縁部	X75	IV	2	2	1	IVa	隆帯
IV-6-54	17-77	口縁部	X75	IV	1	1	1	IVa	隆帯
IV-6-55	17-77	口縁部	Y73	IV	1	1	1	IVa	隆帯
IV-6-56	17-77	口縁部	X74	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-57	17-77	口縁部	Q75	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-58	17-77	口縁部	V71	IV	1	1	70	IVa	隆帯
IV-6-59	17-77	口縁部	U71	IV	1	1	0	IVa	隆帯・縄線文
IV-6-60	17-77	口縁部	O74	IV	1	1	16	IVa	隆帯
IV-6-61	17-77	口縁部	O71	IV	3	3	1	IVa	隆帯
IV-6-62	17-77	口縁部	O72	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-63	17-77	口縁部	T76	IV	1	1	1	IVa	隆帯
IV-6-64	17-77	口縁部	R76	IV・木根	6	6	7	IVa	隆帯
IV-6-65	17-77	口縁部	T74	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-66	17-77	口縁部	S72・73	IV	5	5	62	IVa	隆帯
IV-6-67	17-77	口縁部	Q73	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-68	17-77	口縁部	S72	IV	1	1	0	IVa	隆帯
IV-6-69	17-77	口縁部	Z051	IV	5	5	1	IVa	貼付文
IV-6-70	17-77	口縁部	S69	IV	2	2	2	IVa	貼付文
IV-6-71	17-77	口縁部	T77	IV	3	3	3	IVa	貼付文
IV-6-72	17-77	口縁部	P75	IV	3	3	3	IVa	貼付文
IV-6-73	17-77	口縁部	T78	IV	1	1	1	IVa	刺突文・縄線文
IV-6-74	17-77	口縁部	W71	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-6-75	17-77	口縁部	P75	IV	1	1	2	IVa	縄線文
IV-6-76	17-77	口縁部	S72	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-6-77	17-77	口縁部	R70	IV	1	1	5	IVa	縄線文
IV-6-78	17-77	口縁部	S72	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-6-79	17-77	口縁部	S76	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-6-80	17-77	口縁部	S73	IV	2	2	0	IVa	縄線文
IV-7-81	17-77	口縁部	N73	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-7-82	17-77	口縁部	P74	IV	4	4	1	IVa	縄線文
IV-7-83	17-77	口縁部	S77	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-7-84	17-77	口縁部	W72	IV	1	1	0	IVa	縄線文
IV-7-85	17-77	口縁部	U74	IV	2	2	2	IVa	縄線文
IV-7-86	18-78	口縁部	S77	IV	1	1	0	IVa	縄線文

図・掲載No	図版No	部 位	出土位置		点 数			時期 分類	備 考
			調査区	層位	小計	合計	非規範		
IV-7-87	18-78	口縁部	V73	IV	2	2	0	IVa	縄線文
IV-7-88	18-78	口縁部	B51・52	Ⅲ・IV	11	11	116	IVa	縄文地に刺突文・沈線文
IV-7-89	18-78	口縁部	N73	IV	1	1	1	IVa	縄文地に貼付文・沈線文
IV-7-90a	18-78	口縁～ 胴部～ 底部	T・S77	IV	5	8	2	IVa	縄文地に貼付文・沈線文
IV-7-90b			S77	IV	3				
IV-7-91a	18-78	口縁～ 胴部	A52	IV	7	7	33	IVa	縄文地に沈線文
IV-7-91b									
IV-7-92	18-78	口縁部	P70	IV	4	4	9	IVa	縄文地に沈線文
IV-7-93	18-78	口縁部	B52	IV	3	3	86	IVa	縄文地に沈線文
IV-7-94	18-78	口縁部	N73	IV	4	4	0	IVa	縄文地に沈線文
IV-7-95	18-78	口縁部	E56	IV	1	1	0	IVa	縄文地に沈線文
IV-7-96	18-78	口縁部	A53	IV	1	1	0	IVa	縄文地に沈線文
IV-8-97	18-78	口縁部	T77	Ⅲ・IV	6	7	19	IVa	無文地に格子状沈線文
			V77	IV	1				
IV-8-98	18-78	口縁部	W75	IV	1	1	0	IVa	無文地に格子状沈線文
IV-8-99	18-78	口縁部	O73	IV	1	1	0	IVa	無文地に格子状沈線文
IV-8-100	18-78	口縁部	Q75	IV	1	1	3	IVa	無文地に格子状沈線文
IV-8-101	18-78	口縁部	O73	Ⅲ	1	2	26	IVa	無文地に格子状沈線文
			P73	IV	1				
IV-8-102	18-78	口縁部	R76	IV	3	3	33	IVa	無文地に格子状沈線文
IV-8-103	18-78	口縁部	T77	Ⅲ・IV	7	7	24	IVa	無文地に格子状沈線文
IV-8-104	19-79	口縁部	P75	Ⅲ	1	1	0	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-105	19-79	口縁部	Q75	IV	1	1	0	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-106	18-78	口縁部	O74	IV	18	18	17	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-107	19-79	口縁部	N73	IV	1	1	8	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-108	19-79	口縁部	H54	IV	3	3	40	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-109	19-79	口縁部	T74	IV	6	6	8	IVa	折り返し口縁無文
IV-8-110	19-79	口縁部	T74	IV	4	4	1	IVa	口縁無文、小突起
IV-8-111	19-79	口縁部	S74	IV	3	3	0	IVa	口縁無文、小突起
IV-9-112	19-79	口縁部	S73	IV	3	3	2	IVa	口縁無文
IV-9-113	19-79	口縁部	T76	IV	1	1	1	IVa	方向を変えた縄文
IV-9-114	19-79	口縁部	S73	IV	4	4	29	IVa	方向を変えた縄文
IV-9-115	19-79	口縁部	R72	Ⅲ・IV	3	3	7	IVa	方向を変えた縄文
IV-9-116	19-79	口縁部	S72	IV	1	1	1	IVa	方向を変えた縄文
IV-9-117	19-79	口縁部	T75	IV	1	1	6	IVa	方向を変えた縄文
IV-9-118	19-79	口縁部	A52	IV	6	6	36	VIa	斜位、横位のRし縄文
IV-9-119	19-79	口縁部	S73	IV	3	3	0	IVa	縄文
IV-9-120	19-79	口縁部	S71	IV	2	2	2	IVa	縄文
IV-9-121	19-79	口縁部	O74	IV	5	5	30	IVa	縄文
IV-9-122	19-79	口縁部	B51	IV	1	1	19	IVa	縄文
IV-9-123	19-79	口縁部	A50	IV	4	4	26	IVa	縄文
IV-9-124	19-79	口縁部	O70	IV	1	1	0	IVa	縄文
IV-9-125	19-79	口縁部	Q71	IV	1	1	2	IVa	縄文
IV-9-126	19-79	底 部	T76	IV	2	2	0	IVa	縄文
IV-9-127	19-79	口縁部	Q73・74	Ⅲ・IV	6	6	0	IVa	縄文
IV-9-128	19-79	口縁部	T77	Ⅲ	5	5	7	IVa	縄文
IV-9-129	20-80	口縁部	Q75	IV	5	5	6	IVa	縄文
IV-9-130	20-80	口縁部	V75	IV	4	4	0	IVa	無文
IV-10-131	20-80	口縁部	C52	IV	1	1	3	IVa	無文地に沈線文
IV-10-132	20-80	口縁部	T77	IV	4	4	4	IVa	無文地に沈線文

図・掲載No	図版No	部 位	出土位置		点 数			時期 分類	備 考			
			調査区	層位	小計	合計	非掲載					
IV-10-133	20-80	口縁部	Q75	IV	4	4	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-134	20-80	口縁部	X74	IV	1	1	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-135	20-80	口縁部	R75	IV	1	1	2	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-136	20-80	口縁部	Q74	III	1	1	6	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-137	20-80	口縁部	U77	III	2	2	3	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-138	20-80	胴 部	U71	IV	2	2	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-139	20-80	口縁部	T76・77	III・IV	27	27	76	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-140	20-80	口縁部	Q73~75	IV	13	14	6	IV a	無文地に沈線文			
			R73	IV	1							
IV-10-141	20-80	口縁部	S73	IV	1	1	8	IV a	無文地に沈線文			
			C52	IV	9	12	1	IV a	無文地に沈線文			
K52	IV	3										
IV-10-143	20-80	口縁部	Q75	IV	1	1	1	IV a	無文地に沈線文			
IV-10-144	20-80	口縁部	A・B51	IV	7	7	16	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-145	20-80	口縁部	Q74	III	2	2	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-146	20-80	口縁部	A52	III	4	4	6	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-147	20-80	口縁部	Y73・75	IV	2	2	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-148	20-80	口縁部	V78	III・IV	2	2	4	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-149	21-81	口縁部	Q74	IV	1	1	9	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-150	21-81	口縁部	S73	IV	1	1	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-151	21-81	口縁部	S77	IV	2	2	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-152	21-81	口縁部	S75	IV	3	3	28	IV a	8の字状貼付文			
IV-11-153	20-80	口縁部	P73~75	III・IV	11	11	85	IV a	8の字状貼付文			
IV-11-154	21-81	口縁部	P・Q75	III・IV	11	11	27	IV a	8の字状貼付文			
			R75	IV	2	3	49	IV a	無文地に沈線文			
T71	IV	1										
IV-11-156	21-81	胴 部	S75	IV	1	1	26	IV a	無文地に沈線文			
IV-11-157	21-81	口縁部	P70	IV	1	1	0	IV a	8の字状貼付文			
IV-11-158	21-81	口縁部	A52	IV	1	1	0	IV a	8の字状貼付文			
IV-12-159	21-81	口縁部	B51・52	IV	5	5	3	IV a	太沈線の入組文			
IV-12-160	21-81	口縁部	B61	IV	1	1	0	IV a	クランク状沈線文			
IV-12-161	21-81	口縁部	A57	IV	1	1	0	IV a	クランク状沈線文			
IV-12-162a	21-81	口縁～ 胴部	A50	IV	3	4	20	IV a	磨消縄文・沈線文			
IV-12-162b			A51	IV	1							
IV-12-163	21-81	口縁部	C51	IV	1	1	0	IV a	無文地に沈線文			
IV-12-164	21-81	口縁部	A50	IV	3	3	5	IV a	縄文地に沈線文			
IV-12-165	21-81	口縁部	B51	IV	1	1	0	IV a	縄文地に沈線文			
IV-12-166	21-81	口縁部	A50	IV	1	1	15	IV a	縄文地に沈線文			
IV-12-167	21-81	底 部	R~T76	III・IV	4	4	5	IV a	無文地に太沈線文			
IV-12-168	21-81	底 部	C61	IV	4	4	0	IV a	クランク状沈線文			
IV-12-169	21-81	口縁部	O70	IV	5	5	17	IV b	縄文地に沈線文			
IV-12-170	21-81	口縁部	C52	IV	1	1	0	IV b	S字状沈線文			
IV-12-171	21-81	口縁部	D56	IV	1	1	0	IV b	縄文地に沈線文			
IV-12-172	21-81	口縁部	E58	IV	1	1	0	IV b	縄文地に沈線文			
IV-12-173	21-81	口縁部	L68	IV	1	1	0	V	無文地に沈線文			
IV-12-174	21-81	口縁部	L59	IV	1	1	132	VI b	貼付文			
図・掲載 No	図版No	名 称	出土位置		点 数			時期 分類	計測値 (cm)			備 考
			調査区	層位	小計	合計	非掲載		長径	短径	重量 (g)	
IV-12-175	21-81	円盤状 土製品	P70	IV	1	1	0	IV a	4.1	3.2	11.5	

表IV-3 包含層出土掲載石器一覧

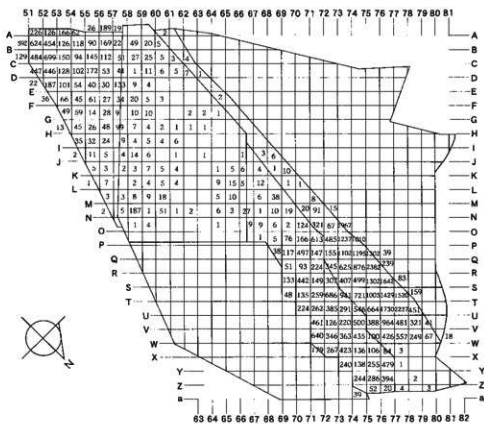
押図・掲載No	図版No	器種名	調査区名	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
IV-13-1	23-83	石槍またはナイフ	A51	IV	7.75×2.7×1.1	18.7	頁岩	
IV-13-2	23-83	石鏃	N58	IV	(2.4)×0.9×0.3	(0.33)	頁岩	
IV-13-3	23-83	石鏃	V72	IV	(2.9)×1.8×0.4	(0.99)	頁岩	
IV-13-4	23-83	石鏃	Y74	IV	3.3×1.4×0.4	1.42	黒曜石	
IV-13-5	23-83	石鏃	G54	IV	2.9×1.6×0.4	1.02	めのう	
IV-13-6	23-83	石鏃	Q75	IV	(2.8)×0.9×0.5	(1.08)	黒曜石	
IV-13-7	23-83	石鏃	A56	IV	(4.3)×2.1×0.4	(3.11)	黒曜石	
IV-13-8	23-83	石鏃	P74	IV	2.1×(1.5)×0.5	(0.95)	頁岩	アスファルト
IV-13-9	23-83	石鏃	A50	IV	(4.5)×1.5×0.5	(2.55)	黒曜石	
IV-13-10	23-83	石鏃	I58	IV	2.5×1.1×0.4	0.9	めのう	
IV-13-11	23-83	石鏃	L65	IV	2.6×1.3×0.3	0.78	頁岩	
IV-13-12	23-83	石鏃	P72	IV	(2.7)×1.3×0.5	(1.38)	黒曜石	
IV-13-13	23-83	石鏃	P75	IV	2.8×1.4×0.5	1.52	頁岩	
IV-13-14	23-83	石鏃	P75	III	3.0×1.2×0.4	1.11	頁岩	
IV-13-15	23-83	石鏃	Q75	III	(3.0)×1.5×0.3	(0.94)	頁岩	
IV-13-16	23-83	石鏃	A52	IV	(3.2)×1.3×0.3	(0.96)	頁岩	
IV-13-17	23-83	石鏃	S73	IV	(3.4)×1.6×0.5	(2.10)	頁岩	アスファルト
IV-13-18	23-83	石鏃	Z051	IV	(3.0)×1.8×0.3	(0.73)	黒曜石	
IV-13-19	23-83	石鏃	Z051	IV	3.1×1.8×0.4	1.07	黒曜石	
IV-13-20	23-83	石鏃	H56	IV	3.4×1.9×0.3	1.2	頁岩	
IV-13-21	23-83	石鏃	D56	IV	(3.2)×1.7×0.3	(1.55)	頁岩	
IV-13-22	23-83	石鏃	T77	IV	3.0×1.0×0.5	1.23	頁岩	アスファルト
IV-13-23	23-83	石鏃	S76	IV	(3.2)×1.1×0.5	(1.26)	めのう	アスファルト
IV-13-24	23-83	石鏃	C56	IV	(3.3)×1.3×0.5	(1.77)	頁岩	
IV-13-25	23-83	石鏃	S76	IV	3.6×1.2×0.6	1.19	頁岩	
IV-13-26	23-83	石鏃	R76	III	(3.8)×1.2×0.6	(1.97)	頁岩	アスファルト
IV-13-27	23-83	石鏃	Q74	III	4.3×(1.1)×0.4	(1.45)	頁岩	アスファルト
IV-13-28	23-83	石鏃	H60	IV	4.2×1.5×0.5	1.75	頁岩	
IV-13-29	23-83	石鏃	E60	IV	(4.1)×0.9×0.4	(1.42)	頁岩	
IV-13-30	23-83	石鏃	F53	IV	(4.8)×1.0×0.4	(2.43)	頁岩	
IV-13-31	23-83	石錐	S72	IV	3.7×2.15×1.15	7.05	頁岩	
IV-13-32	23-83	石錐	S73	IV	3.6×3.9×1.1	9.39	頁岩	
IV-13-33	23-83	石錐	Q75	IV	4.1×4.1×1.0	11.23	頁岩	
IV-14-34	23-83	つまみ付きナイフ	Z051	IV	4.5×2.4×0.7	3.68	頁岩	
IV-14-35	23-83	つまみ付きナイフ	I64	IV沢	7.15×3.1×1.6	20.77	頁岩	

押図・掲載No	図版No	器種名	調査区名	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
IV-14-36	23-83	つまみ付きナイフ	P69	IV砂	7.35×4.75×1.05	38.83	頁岩	
IV-14-37	23-83	つまみ付きナイフ	U79	I	10.1×4.3×0.9	41.30	頁岩	
IV-14-38	23-83	つまみ付きナイフ	E64	IV	10.25×4.75×2.0	38.79	頁岩	
IV-14-39	23-83	スクレイパー	Z056	IV	3.7×1.6×0.7	6.33	頁岩	
IV-14-40	23-83	スクレイパー	V74	IV	4.1×2.8×0.95	8.98	頁岩	
IV-14-41	23-83	スクレイパー	T76	IV	4.8×2.9×1.2	11.97	頁岩	
IV-14-42	23-83	スクレイパー	O71	IV	5.0×3.5×1.1	18.28	頁岩	
IV-14-43	23-83	スクレイパー	S73	IV	6.15×4.8×1.8	46.78	めのう	
IV-14-44	23-83	スクレイパー	P75	IV	6.4×2.9×1.6	29.5	頁岩	アスファルト
IV-14-45	23-83	スクレイパー	N73	IV	6.5×3.9×1.5	31.03	頁岩	
IV-15-46	24-84	スクレイパー	W73	IV	6.1×4.4×1.4	46.15	めのう	
IV-15-47	24-84	スクレイパー	E60	IV	6.8×4.75×0.8	23.44	頁岩	
IV-15-48	24-84	スクレイパー	O73	IV	7.0×3.3×0.8	22.78	頁岩	
IV-15-49	24-84	スクレイパー	N73	IV	6.8×6.0×1.5	48.26	頁岩	
IV-15-50	24-84	スクレイパー	R73	IV	7.6×4.7×1.3	49.94	頁岩	
IV-15-51	24-84	スクレイパー	R75	IV	7.8×3.7×1.7	47.59	めのう	
IV-15-52	24-84	スクレイパー	O74	IV	8.3×5.5×1.9	92.12	頁岩	
IV-15-53	24-84	スクレイパー	P69	IV	8.5×3.0×1.5	36.56	頁岩	2点接合
			S72	IV				
IV-16-54	24-84	スクレイパー	O71	IV	9.3×3.3×1.0	27.38	頁岩	
IV-16-55	24-84	スクレイパー	U71	IV	9.4×4.3×1.8	51.64	頁岩	
IV-16-56	24-84	スクレイパー	Q71	IV	9.5×6.45×2.1	107.32	頁岩	
IV-16-57	24-84	スクレイパー	O73	IV	9.6×4.2×1.6	48.57	頁岩	
IV-16-58	24-84	スクレイパー	N72	III	10.4×4.3×1.7	70.96	頁岩	
IV-16-59	24-84	スクレイパー	N73	IV	11.3×4.3×1.4	66.13	玄武岩	
IV-16-60	24-84	石斧	W72	IV	(4.5)×4.1×1.55	(38.0)	泥岩	
IV-16-61	24-84	石斧	C57	IV	6.0×2.7×1.4	44.0	片岩	
IV-16-62	24-84	石斧	R71	IV	(6.0)×4.75×1.9	(88.0)	泥岩	
IV-16-63	24-84	石斧	O71	IV	8.0×3.7×1.6	82.0	泥岩	
IV-16-64	24-84	石斧	X75	IV	9.3×3.5×1.4	78.0	泥岩	
IV-16-65	24-84	石斧	B59	IV	10.6×3.55×2.1	130.0	泥岩	
IV-17-66	24-84	石斧	M62	IV	13.05×3.45×2.9	204.0	片岩	
IV-17-67	24-84	石斧	S76	IV	14.1×4.2×2.5	228.0	泥岩	2点接合
			T77	IV				
IV-17-68	24-84	石斧	R73	IV	14.1×4.5×3.2	282.0	閃緑岩	2点接合
			Y73	IV				
IV-18-69	24-84	たたき石	C56	IV	5.5×4.0×3.1	98.0	安山岩	

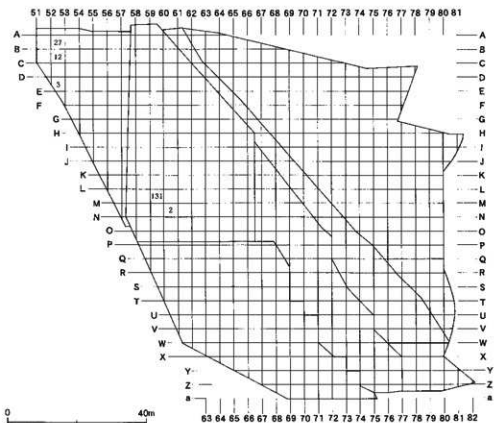
挿図・掲載No	図版No	器種名	調査区名	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
IV-18-70	24-84	たたき石	W71	IV	9.25×4.3×2.8	148.0	砂岩	
IV-18-71	25-85	たたき石	B50	IV	9.4×4.7×3.45	206.0	安山岩	
IV-18-72	25-85	たたき石	P71	IV	9.4×4.9×3.7	254.0	安山岩	
IV-18-73	25-85	たたき石	Y75	IV	10.05×8.7×3.6	366.0	安山岩	
IV-18-74	25-85	たたき石	X73	IV	20.1×7.2×6.1	1280.0	安山岩	
IV-18-75	25-85	扁平打製石器	A57	IV	10.9×5.5×2.1	170.0	安山岩	
IV-18-76	25-85	扁平打製石器	N73	IV	11.45×7.2×2.5	280.0	安山岩	
IV-18-77	25-85	扁平打製石器	N73	IV	13.2×6.6×2.9	402.0	安山岩	
IV-19-78	25-85	扁平打製石器	S70	IV	13.4×7.1×2.8	374.0	安山岩	2点接合
			O73	IV				
IV-19-79	25-85	扁平打製石器	N73	IV	13.5×7.2×4.1	530.0	安山岩	
IV-19-80	25-85	扁平打製石器	N73	IV	14.1×8.7×3.5	502.0	安山岩	
IV-19-81	25-85	扁平打製石器	N73	IV	14.5×8.2×3.85	723.0	安山岩	
IV-19-82	25-85	扁平打製石器	R70	IV	14.7×7.15×3.0	402.0	安山岩	
IV-20-83	25-85	扁平打製石器	N71	IV	14.7×8.5×3.3	566.0	安山岩	
IV-20-84	25-85	扁平打製石器	N73	IV	14.65×9.1×3.3	580.0	安山岩	
IV-20-85	25-85	扁平打製石器	R70	IV	15.0×8.6×3.65	716.0	安山岩	
IV-20-86	25-85	扁平打製石器	N73	IV	15.1×6.95×3.65	428.0	安山岩	
IV-20-87	25-85	扁平打製石器	O70	IV	15.0×8.85×3.8	726.0	安山岩	
IV-21-88	25-85	扁平打製石器	N73	IV	15.3×8.25×3.35	498.0	安山岩	
IV-21-89	25-85	扁平打製石器	P69	IV	15.6×7.8×2.75	444.0	安山岩	2点接合
			R69	IV				
IV-21-90	25-85	扁平打製石器	N73	IV	15.6×8.9×4.15	730.0	安山岩	
IV-21-91	26-86	扁平打製石器	N73	IV	15.7×9.4×3.65	696.0	安山岩	
IV-21-92	26-86	扁平打製石器	R70	IV	16.3×7.4×3.85	674.0	安山岩	2点接合
			R70	IV				
IV-22-93	26-86	扁平打製石器	N73	IV	16.05×8.55×3.95	862.0	安山岩	
IV-22-94	26-86	扁平打製石器	S73	IV	16.3×9.95×3.8	722.0	安山岩	2点接合
			Q74	IV				
IV-22-95	26-86	扁平打製石器	I55	IV	15.6×11.0×3.5	978.0	安山岩	
IV-22-96	26-86	扁平打製石器	O72	IV	16.7×8.6×3.8	784.0	安山岩	
IV-23-97	26-86	扁平打製石器	S71	IV	16.95×7.9×3.15	612.0	安山岩	2点接合
			T70	IV				
IV-23-98	26-86	扁平打製石器	R71	IV	17.4×9.15×2.8	544.0	安山岩	2点接合
			V74	IV				
IV-23-99	26-86	扁平打製石器	O73	IV	18.5×9.75×3.45	696.0	安山岩	2点接合
			S73	IV				

押図・掲載No	図版No	器種名	調査区名	順位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
IV-23-100	26-86	扁平打製石器	O73	IV	19.85×12.7×3.95	1093.0	安山岩	
IV-24-101	26-86	北海道式石冠	T71	IV	10.6×7.3×4.8	504.0	安山岩	
IV-24-102	26-86	北海道式石冠	N73	IV	9.5×7.8×5.2	556.0	安山岩	
IV-24-103	26-86	北海道式石冠	N73	IV	(9.1)×8.2×5.8	(584.0)	安山岩	
IV-24-104	26-86	北海道式石冠	P72	IV	11.2×8.2×6.9	892.0	安山岩	
IV-24-105	27-87	北海道式石冠	R69	IV	12.75×9.25×6.2	935.0	安山岩	
IV-24-106	27-87	北海道式石冠	O70	IV	15.0×8.15×5.6	800.0	安山岩	
IV-25-107	27-87	北海道式石冠	N73	IV	13.1×(5.9)×7.4	(828.0)	安山岩	
IV-25-108	27-87	すり石	P71	IV	10.0×6.8×2.6	262.0	安山岩	敲打痕あり
IV-25-109	27-87	すり石	O70	IV	11.75×6.4×3.3	360.0	安山岩	
IV-25-110	27-87	すり石	P74	IV	12.2×5.8×2.9	284.0	安山岩	敲打痕あり
IV-25-111	27-87	すり石	W73	IV	13.9×9.3×3.1	602.0	安山岩	
IV-25-112	27-87	砥石	U76	III	18.7×12.1×2.8	750.0	安山岩	
IV-25-113	27-87	砥石	P74	IV	22.6×14.1×2.1	608.0	安山岩	2点接合
			P74	IV				
IV-26-114	27-87	石錘	P70	IV	8.8×6.1×2.4	160.0	安山岩	
IV-26-115	27-87	石錘	R70	IV	14.7×9.6×3.4	654.0	安山岩	
IV-26-116	27-87	石錘	R70	IV	15.6×7.55×2.45	394.0	安山岩	
IV-26-117	27-87	石皿	S78	IV	34.0×27.6×7.9	8000.0	安山岩	
IV-26-118	27-87	石皿	E58	IV	30.85×28.3×13.9	14500.0	安山岩	
IV-27-119	28-88	石皿	C58	IV	39.5×32.2×11.2	14500.0	安山岩	
IV-27-120	28-88	土製品	B59	IV	1.5×1.45×1.0	0.96		耳栓
IV-27-121	28-88	石製品	A56	IV	2.0×1.4×0.85	3.12	カンラン岩	垂飾
IV-27-122	28-88	石製品	P75	IV	2.4×2.0×0.75	1.24	軽石	垂飾
IV-27-123	28-88	石製品	O73	IV	3.2×2.3×1.0	2.86	軽石	垂飾
IV-27-124	28-88	石製品	T77	IV	5.1×4.8×2.8	36.9	安山岩	自然孔?
IV-27-125	28-88	石製品	R73	IV	3.8×3.4×1.9	17.52	泥岩	自然孔
IV-27-126	28-88	石製品	U75	III	4.65×3.7×1.55	14.7	凝灰岩	自然孔
IV-27-127	28-88	石製品	T77	IV	4.3×2.85×1.7	14.27	安山岩	自然孔
IV-27-128	28-88	石製品	R71	IV	5.5×3.6×1.4	22.18	軽石	垂飾
IV-27-129	28-88	石製品	Y73	IV	6.0×5.15×2.5	32.84	軽石	
IV-27-130	28-88	石製品	A50	IV	6.2×5.45×2.45	22.06	軽石	
IV-28-131	28-88	石製品	A53	IV	7.1×4.65×3.85	166.0	安山岩	北海道試図:ニチュフ
IV-28-132	28-88	石製品	O71	IV	7.0×5.2×6.1	298.0	安山岩	北海道試図:ニチュフ
IV-28-133	28-88	石製品	O70	IV	8.25×7.0×5.7	422.0	安山岩	北海道試図:ニチュフ
IV-28-134	28-88	石製品	E57	IV	14.1×6.2×6.7	776.0	安山岩	石冠棟石器

IV群a類土器 計52,637点

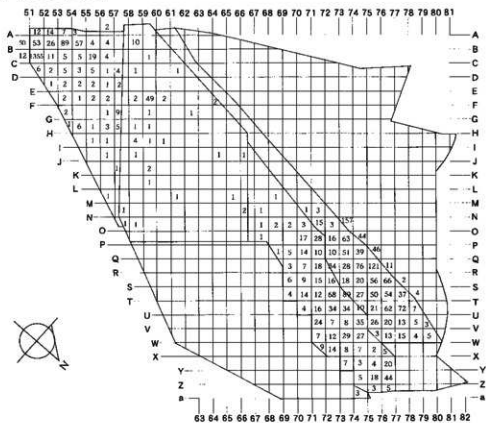


V群土器 計175点

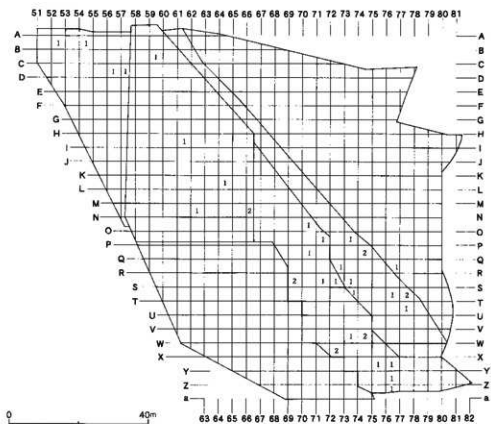


图IV-30 包含層出土土器分布(2)

断片・剥片石器 計3,937点

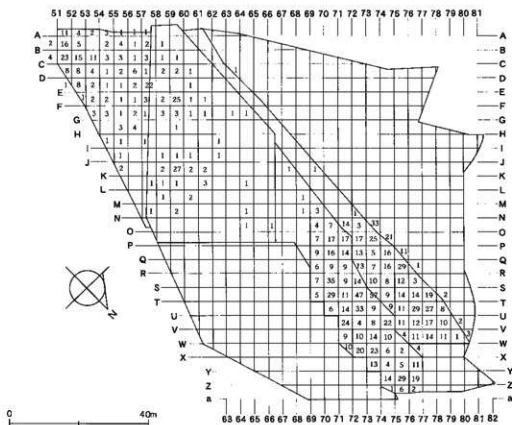


石片・石片片 計41点



図IV-31 包含層出土石器分布(1)

標・標石圖 計 1,495 点



圖IV-32 包含層出土石器分布 (2)

V まとめ

石倉1遺跡の調査は平成14(2002)年から行われており、平成16(2004)年までに合わせて4,353㎡を調査した。検出した遺構は、住居跡4軒、土坑19基、集石3か所である。19基の土坑のうち、IP-1~4は平成14・15年に調査範囲南東側の緩斜面で検出した。住居跡とIP-5~19、集石は平成16年に調査した丘陵部分で検出した。遺物は64,753点出土した。遺物もこの丘陵部分とこの崖下急斜面および沢の流域からそのほとんどが出土している。

1 縄文時代中期の遺構

土坑 IP-10~19の10基は中期の可能性のある土坑である。このうちIP-11・13・14から遺物が出土した。IP-11の覆土からはⅢ群a類土器が10点、IP-13では坑底から礫1点、覆土からⅢ群a類土器6点と北海道式石冠が1点出土した。またIP-14の覆土からは北海道式石冠が1点出土している。IP-11はフラスコ状土坑で、IH-4やIP-5に壊されている。IP-10~19は丘陵部分の崖に面した緩斜面に立地しており、黒色土の混じりの少ない覆土の様相から、丘陵状の平坦面で検出したIP-4~9よりも古い時期のものの可能性がある。

2 縄文時代後期の遺構

住居跡 IH-1~3は縄文時代後期前葉、IH-4も同時期と推定されるが中期中葉の可能性もある。IH-1とIH-3では地床炉と柱穴を検出した。IH-2とIH-4では土坑との切り合いを確認した。IH-2は上部に集石S-1を伴うIP-8により壊されている。また、IH-4の調査の際、土層観察用のベルトを残して掘り下げると、暗褐色土の広がりに黒色土の落ち込みを検出した。半截したところフラスコ状土坑であり、坑底から石斧1点と礫2点、覆土からⅣ群a類土器305点、石槍1点、フレイク6点、礫10点が出土した。この土坑をIP-5とした。土層断面の観察からIP-5がIH-4を壊して構築されていることを確認した。さらにIH-4を掘り下げると床面でⅥ層とは異なる黄褐色土が楕円形をなす部分を検出した。半截するとフラスコ状土坑であった。これをIP-11とした。覆土最下層は暗褐色土、その上にⅤ層土とⅥ層土の混じった黒褐色土がレンズ状に堆積する。これらの層からⅢ群a類土器が出土した。最上層はにぶい黄褐色をしたⅥ層土である。IH-4はこの中期の所産と推定されるIP-11を壊して構築している。すなわち、IP-11→IH-4→IP-5という構築順序となる。

土坑 IP-3とIP-6は中期から後期の可能性のある土坑である。IP-1・2・4・5・7~9は後期前葉の土坑である。IP-1とIP-4は墳口部に人頭大の大型礫をもつ。IP-5は前述のようにIH-4を壊して作られた、フラスコ状土坑を転用した土墳墓である。IP-5の墳底からは石斧1点、礫2点、覆土からはⅣ群a類土器305点が出土している。またIP-8はIH-2を壊して構築されている土墳墓である。墳底からはⅣ群a類土器2点、Uフレイク1点、礫1点、覆土からはⅣ群a類土器38点、フレイク7点、石斧1点が出土している。

集石 IS-1は前述のようにIP-8に伴うものである。表土除去後に大型の礫を数点、その東側20~30cmにも同様の礫を確認した。周辺を掘り下げて前者の西側に小石のまとまりを確認した。礫はすべて安山岩である。便宜上これらをIS-1~3と呼称したが一体のものである。(鎌田)

引用・参考文献

〈論文・書籍等〉

- 石川政治 1968 「函館市天祐寺貝塚」『石器時代』第6号 石器時代文化研究会
- 大場利夫・蛭子千代志 1965 「函館郊外練瓦台遺跡」『北方文化研究報告』第20輯 北海道大学
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
『考古学雑誌』第66巻第4号 日本考古学会
- 海峡石器編年研究会編 2003 『第1回 東北・北海道の十腰内I式再検討シンポジウム資料』
- 葛西 勲 1979 「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会
- 葛西 勲 2002 『再葬土器棺墓の研究—縄文時代の洗骨葬—』 再葬土器棺墓の研究刊行会
- 小山正忠・竹原秀雄 2004 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 鈴木克彦 1976 「東北地方北部における大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代』第8号
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年」
『北海道考古学』第35輯 北海道考古学会
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣
- 高橋正勝 1962 「涌元遺跡」『北海道の文化』16 北海道文化財保護協会
- 高橋正勝 1966 「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会誌』No.8
北海道青年人類科学研究会
- 高橋正勝 1972a 「北海道における縄文時代中期の終末(1)」
『北海道青年人類科学研究会誌』No.9 北海道青年人類科学研究会
- 高橋正勝 1972b 「北海道における縄文時代中期の終末(2)」
『北海道青年人類科学研究会誌』No.10 北海道青年人類科学研究会
- 高橋正勝 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」
『北海道の文化』31 北海道文化財保護協会
- 高橋正勝 1981 「2. 中期の土器 北海道南部の土器」
『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器II』 雄山閣
- 竹内理三編 1987 『角川日本地名大辞典 1 北海道 下巻』 角川書店
- 名取武光・峰山 巖 1957 「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯 北海道大学
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観 第4巻 後期・晩期・続縄文』 小学館
- 日本ベトロジー学会編 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社
- 北海道編 1969 「津軽一統志」『新北海道史 第七巻史料一』(新北海道史印刷出版共同企業体)
- 松浦武四郎著/高倉新一郎編 1978 『竹四郎廻浦日記 下』 北海道出版企画センター
- 松浦武四郎著/秋葉 実解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』 北海道出版企画センター
- 三橋公平・峰山 巖 1967 「入江遺跡発掘報告」『北海道の文化』12 北海道文化財保護協会
- 村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』 雄山閣考古学選書10
- 森町編 1980 『森町史』
- 森田知忠 1981 「北海道」『縄文土器大成 3—後期』 講談社
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会

〈埋蔵文化財発掘調査報告書〉

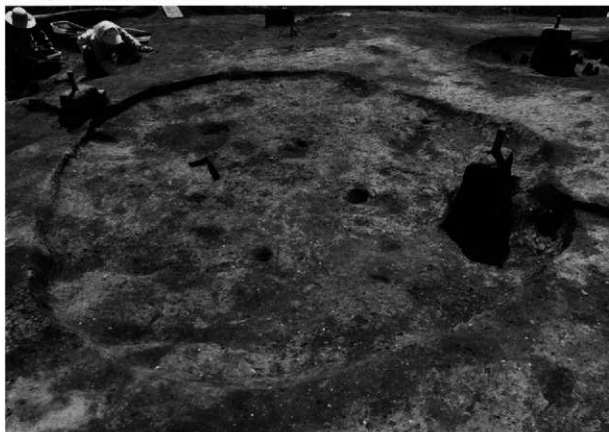
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1984 『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』
(青森県埋蔵文化財調査報告書第81集)
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1984 『牛ヶ沢(3)遺跡発掘調査報告書』
(青森県埋蔵文化財調査報告書第86集)
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1986 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
(青森県埋蔵文化財調査報告書第101集)
- 青森市教育委員会 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』(青森市埋蔵文化財調査報告書第30集)
- 青森市教育委員会 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(青森市埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 青森市教育委員会 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(青森市埋蔵文化財調査報告書第40集)
- 青森市教育委員会 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』(青森市埋蔵文化財調査報告書第85集)
- 大沼忠春編 1976 『元和』 乙部町教育委員会
- 木古内町教育委員会 2003 『泉沢2遺跡A地点』
- 斉藤 傑 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会
- 西連寺建 1976 『松前町原口遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会
- 高橋正勝ほか 1980 『アヨロ遺跡』 北海道先史学協会
- 高橋和樹ほか 1976 『瀬棚南川遺跡』 瀬棚町教育委員会
- 千歳市教育委員会 1979 『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』
(千歳市文化財調査報告書Ⅳ)
- 千代 肇ほか 1972 『知内町 涌元遺跡』 知内町教育委員会
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚Ⅲ』
- 戸井町教育委員会 1994 『戸井貝塚Ⅳ』
- 松下 亘ほか 1074 『西段』 北海道第四紀研究会
- 松前町教育委員会 1976 『松前町原口遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1983 『白坂』
- 松前町教育委員会 1988 『寺町貝塚』
- 峰山 巖ほか 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』 知内町教育委員会
- 森町教育委員会 1975 『鳥崎遺跡』
- 森町教育委員会 1977 『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』
- 森町教育委員会 1981 『尾白内』
- 森町教育委員会 1982 『森川A遺跡』
- 森町教育委員会 1985 『御幸町』
- 森町教育委員会 1993 『尾白内2』
- 森町教育委員会 1994 『御幸町2』
- 森町教育委員会 2004 a 『栗ヶ丘1遺跡』
- 森町教育委員会 2004 b 『森川2遺跡』
- 森町教育委員会 2004 c 『鷺ノ木4遺跡』
- 森町教育委員会 2006 『鷺ノ木7遺跡』
- 八雲町教育委員会 1983 『栄浜』
- 八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡』
- 八雲町教育委員会 1995 『浜松5遺跡』

〈財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書〉

跡北海道埋蔵文化財センター	1987 a	『上磯町 矢不來 2 遺跡』(北埋調報第37集)
跡北海道埋蔵文化財センター	1987 b	『木古内町 建川 2・新道 4 遺跡』(北埋調報第43集)
跡北海道埋蔵文化財センター	1988	『木古内町 新道 4 遺跡』(北埋調報第52集)
跡北海道埋蔵文化財センター	1997	『千歳市 キウス 5 遺跡 (4) B・C 地区』(北埋調報第116集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2001 a	『八雲町 山崎 4 遺跡』(北埋調報第162集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2001 b	『八雲町 山越 2 遺跡』(北埋調報第163集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2001 c	『八雲町 野田生 5 遺跡』(北埋調報第164集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2002 a	『八雲町 山崎 5 遺跡』(北埋調報第165集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2002 b	『八雲町 山越 3 遺跡・山越 4 遺跡』(北埋調報第166集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2002 c	『八雲町 野田生 2 遺跡』(北埋調報第167集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2002 d	『八雲町 野田生 4 遺跡』(北埋調報第171集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2002 e	『八雲町 栄浜 1 遺跡』(北埋調報第175集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 a	『八雲町 落部 1 遺跡』(北埋調報第181集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 b	『森町 本内川右岸遺跡』(北埋調報第182集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 c	『八雲町 野田生 1 遺跡』(北埋調報第183集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 d	『森町 濁川左岸遺跡 - B 地区 -』(北埋調報第190集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 e	『森町 本茅部 1 遺跡』(北埋調報第191集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2003 f	『森町 石倉 2 遺跡』(北埋調報第197集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2004 a	『森町 倉知川右岸遺跡』(北埋調報第196集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2004 b	『森町 本茅部 1 遺跡 (2)』(北埋調報第199集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2004 c	『森町 石倉 3 遺跡・石倉 5 遺跡』(北埋調報第205集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2004 d	『森町 濁川左岸遺跡 - A 地区 -』(北埋調報第208集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2005 e	『森町 上台 2 遺跡』(北埋調報第216集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2005 f	『森町 上台 1 遺跡』(北埋調報第217集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2005 g	『森町 森川 4 遺跡』(北埋調報第218集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2005 h	『森町 三次郎川左岸遺跡・石倉 5 遺跡 (2)・石倉 4 遺跡』 (北埋調報第219集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2005 i	『森町 森川 3 遺跡』(北埋調報第222集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2006 a	『北斗市 矢不來 7 遺跡・矢不來 8 遺跡』(北埋調報第232集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2006 b	『森町 三次郎川右岸遺跡』(北埋調報第233集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2006 c	『森町 森川 3 遺跡 (2)』(北埋調報第234集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2006 d	『北斗市 矢不來 6 遺跡・矢不來11遺跡・館野 4 遺跡』 (北埋調報第235集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2007 a	『森町 濁川左岸遺跡 (3) - C ~ E - 地区』(北埋調報第246集)
跡北海道埋蔵文化財センター	2007 b	『森町 石倉 1 遺跡』(北埋調報第247集)



1 平成15年調査状況（北東から）



2 IH-1（南西から）



3 IH-2 (北西から)



4 IH-3 (南西から)



5 IH-4 (南西から)



6 IP-1 確認状況 (西から)



7 IP-1 セクション (西から)

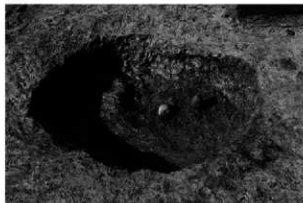


8 IP-1 (西から)



9 IP-2 セクション (北東から)

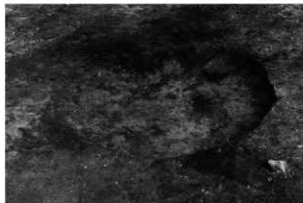
図版 4



10 IP-2 (北東から)



11 IP-3 セクション (北西から)



12 IP-3 (北西から)



13 IP-4 セクション (北東から)



14 IP-4 (南西から)



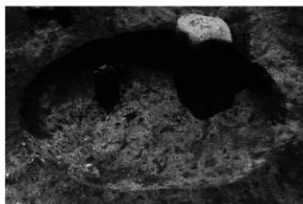
15 IP-5 (南東から)



16 IP-6 検出状況 (北西から)



17 IP-6 セクション (北東から)



18 IP-6 (北東から)



19 IP-7 セクション (北西から)



20 IP-7 (北西から)



21 IP-8 セクション (南西から)



22 IP-9 (北東から)



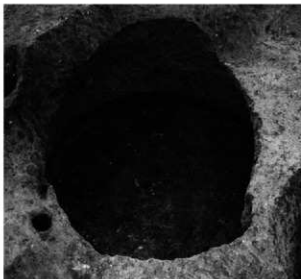
24 IP-10 (東から)



23 IP-10 セクション (東から)



25 IP-11セクション (東から)



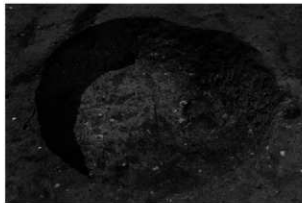
26 IP-11 (東から)



27 IP-12セクション (東から)



29 IP-13セクション (東から)



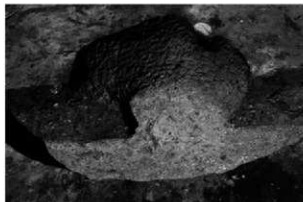
28 IP-12 (南東から)



31 IP-14セクション (東から)



30 IP-13 (北東から)



32 IP-14 (東から)



33 IP-15セクション (東南から)



34 IP-15 (北東から)



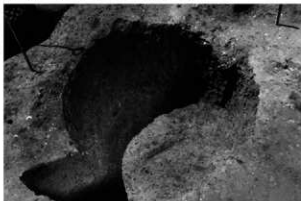
35 IP-16セクション (東から)



36 IP-16 (東から)



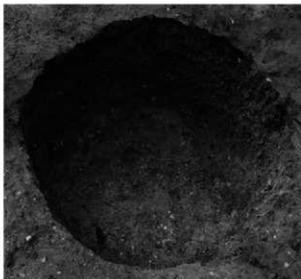
37 IP-17セクション (北から)



38 IP-17 (北東から)



39 IP-18セクション (東から)



40 IP-18 (北東から)



41 IP-19セクション (東から)



42 IP-19 (東から)



43 IS-1・3 検出状況 (北西から)



44 V11区土器出土状況 (東から)



45 O74区IV層下位遺物出土状況 (北西から)



46 平成14年調査範囲終了状況（南から）



47 平成15年調査範囲終了状況（北から）



48 平成16年調査範囲終了状況（北東から）



49 IH-2の土器(図Ⅲ-15-7)



50 IH-4の土器(図Ⅲ-18-30)



51 IP-5の土器(図Ⅲ-19-37)



52 IP-9の土器(図Ⅲ-19-45)



53 Ⅲ群a類土器(図Ⅳ-1-1)



54 Ⅲ群a類土器(図Ⅳ-1-2)



55 III群a類土器(図IV-1-3)



56 IV群a類土器(図IV-3-18)



57 IV群a類土器(図IV-1-7)



58 IV群a類土器(図IV-1-4)



59 IV群a類土器(図IV-1-6)



60 IV群a類土器(図IV-1-5)



61 IV群a類土器(図IV-2-11)



62 IV群 a類土器 (図IV-2-15)



63 IV群 a類土器 (図IV-2-9)



64 IV群 a類土器 (図IV-2-14)



65 IV群 a類土器 (図IV-2-10)



66 IV群 a類土器 (図IV-3-16)



67 IV群 a類土器 (図IV-3-17)



68 IV群 a類土器 (図IV-1-8)



69 IV群 a類土器 (図IV-3-19)



70 IV群 a類土器 (図IV-3-21)



71 IV群 a類土器 (図IV-3-20)

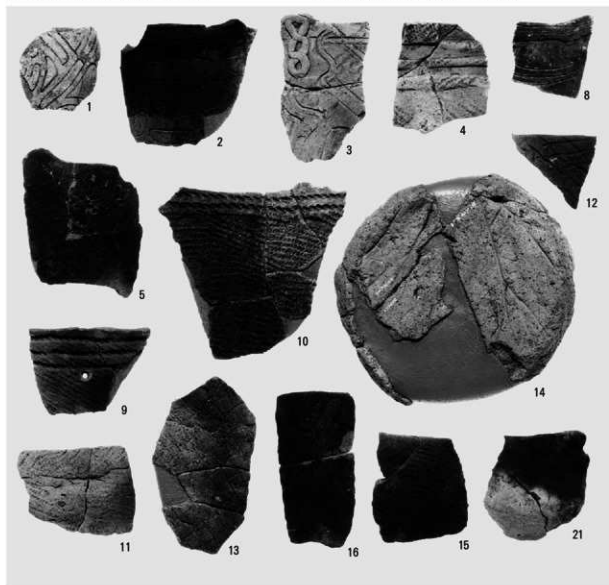
図版14



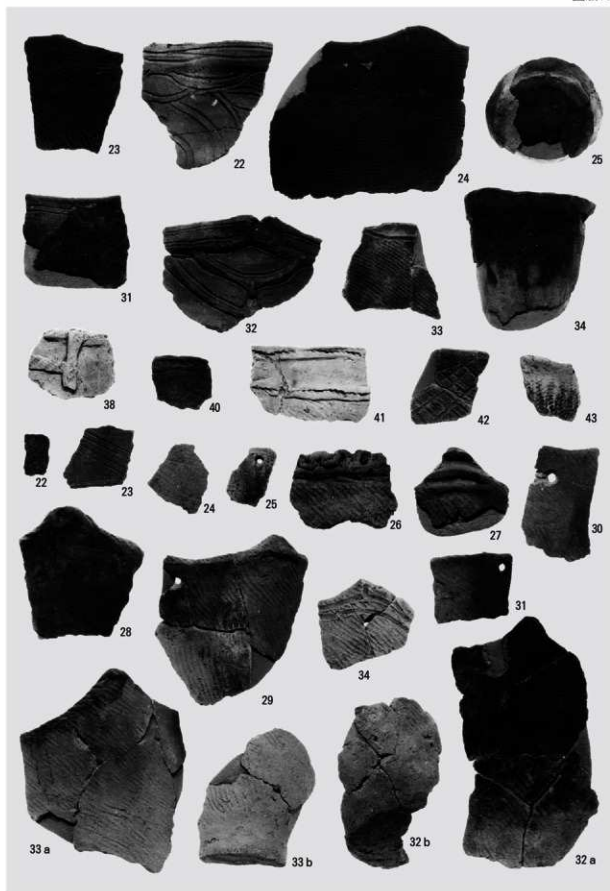
72 IV群a類土器 (図IV-2-13)



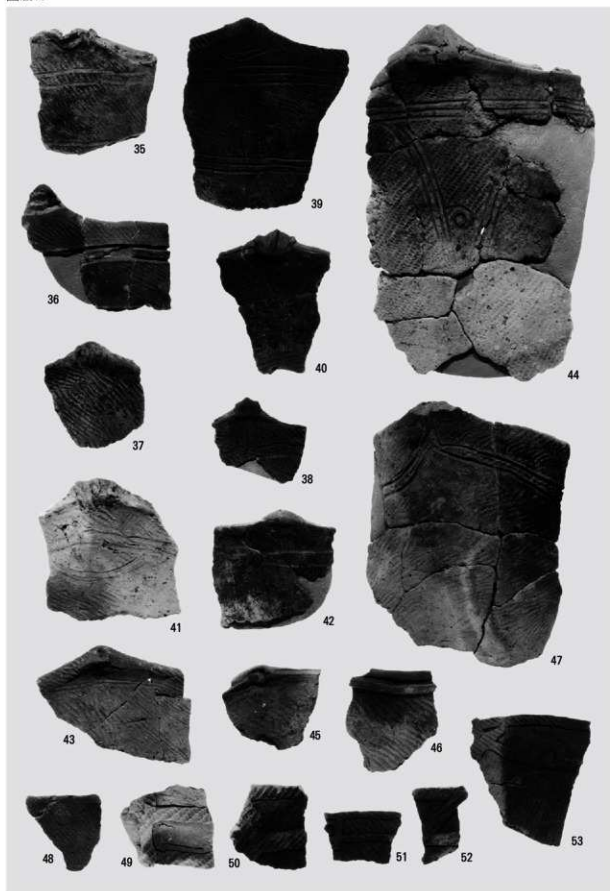
73 IV群a類土器 (図IV-2-12)



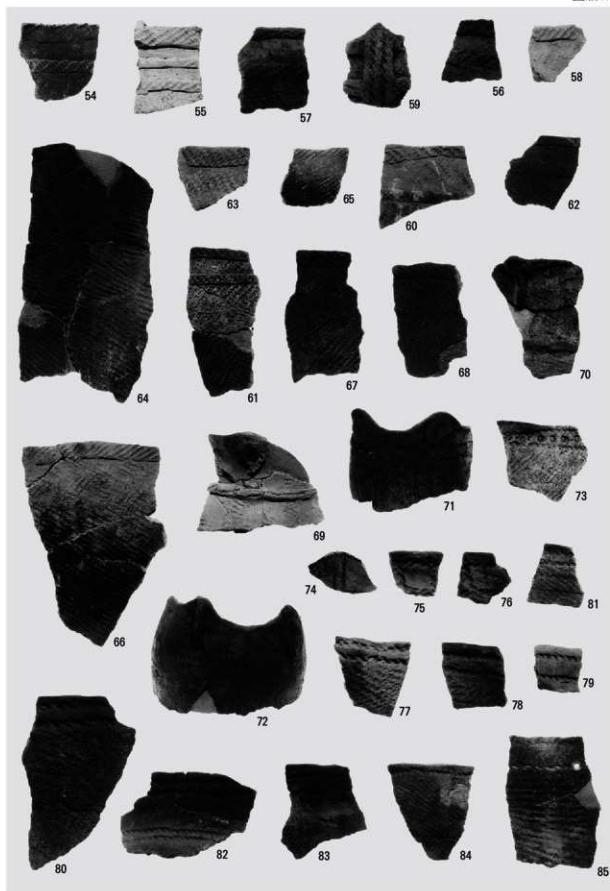
74 遺構出土の土器 (1) (図III-15~17)



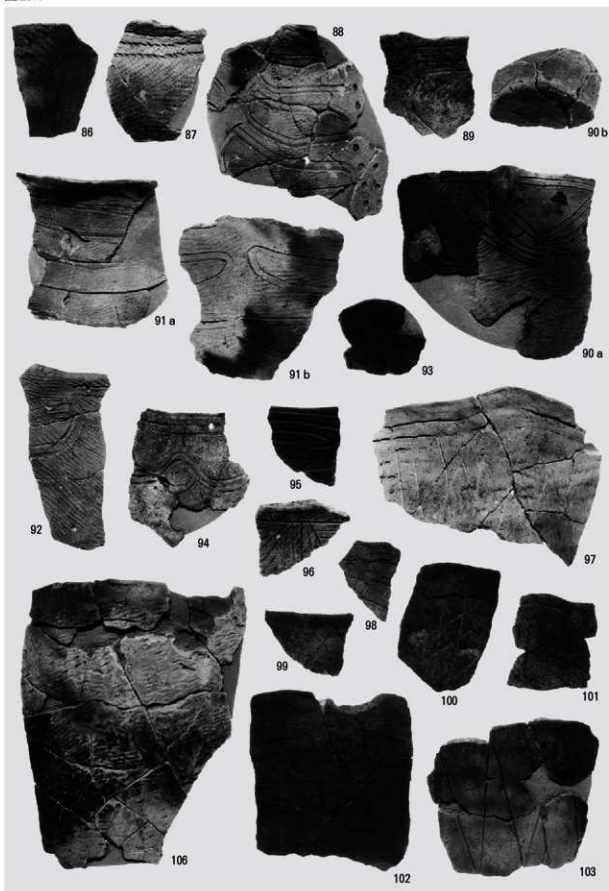
75 遺構出土の土器（2）（図Ⅲ-17~19）、包含層出土の土器（1）（図Ⅳ-4）



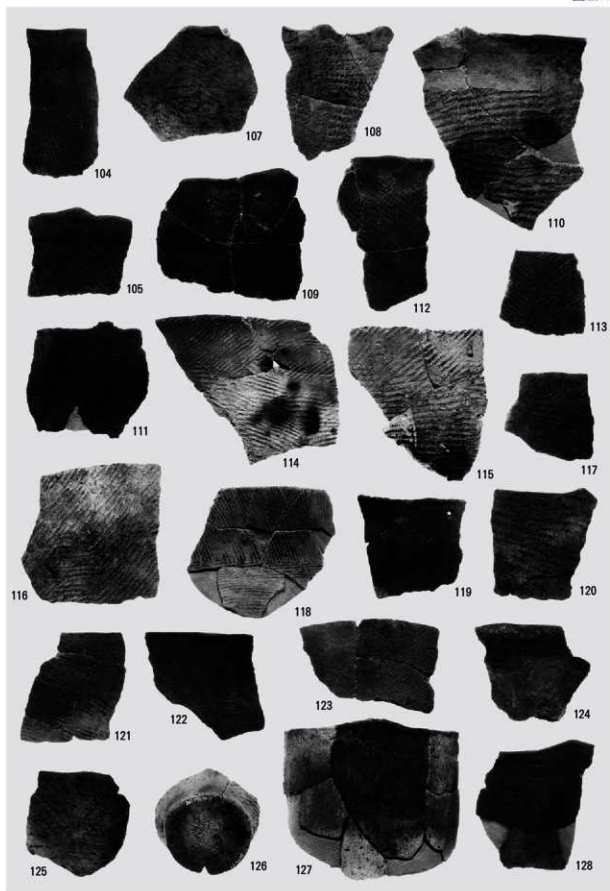
76 包含層出土の土器（2）（図IV-4・5）



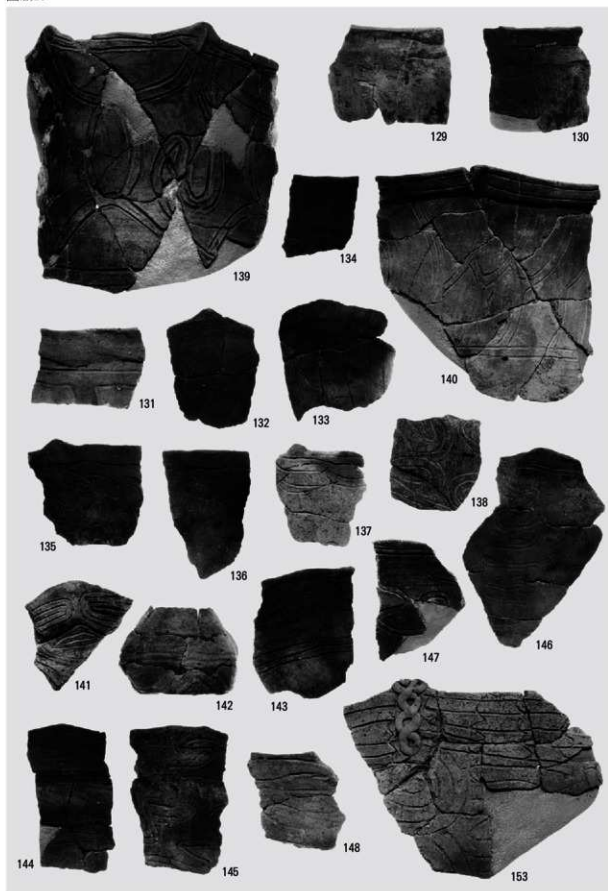
77 包含層出土の土器 (3) (図IV-6・7)

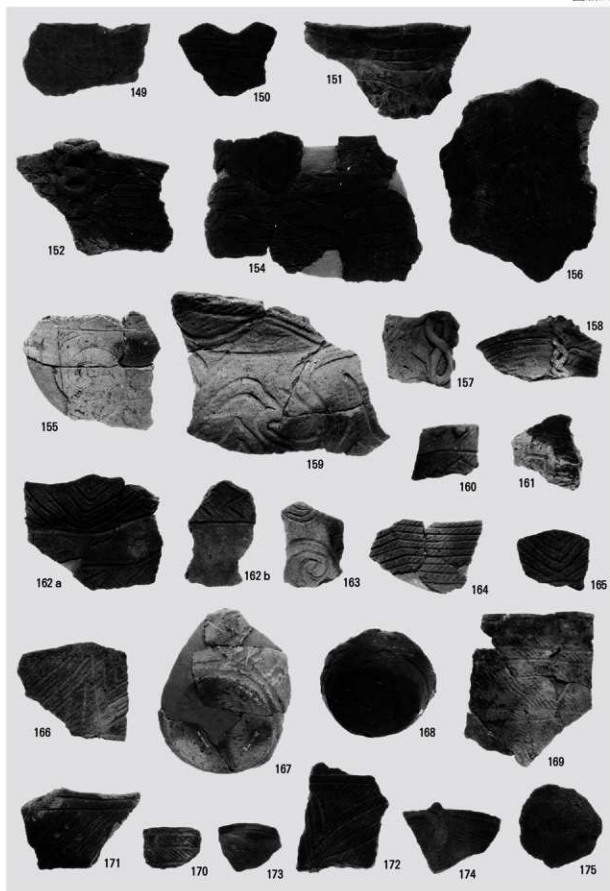


78 包含層出土の土器(4)(図IV-7・8)

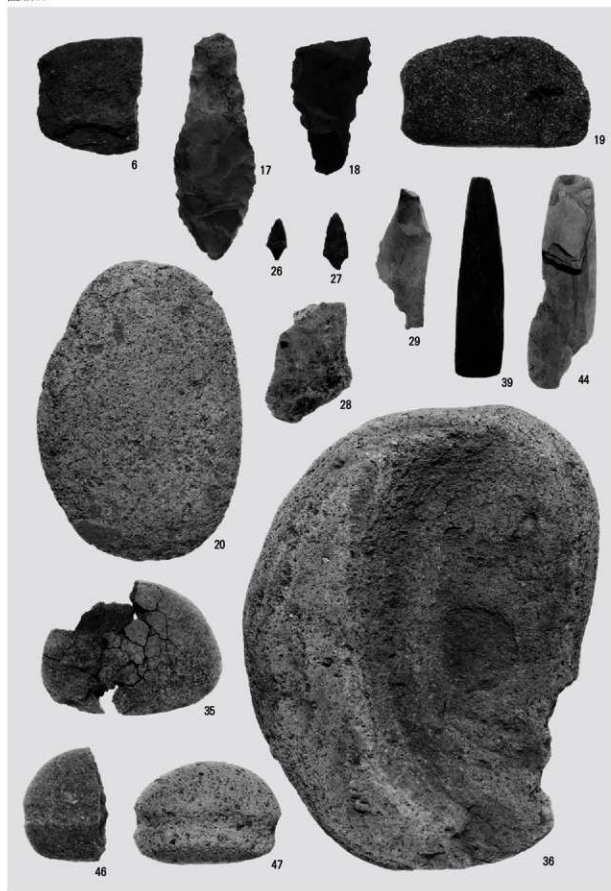


79 包含層出土の土器 (5) (図IV-8・9)

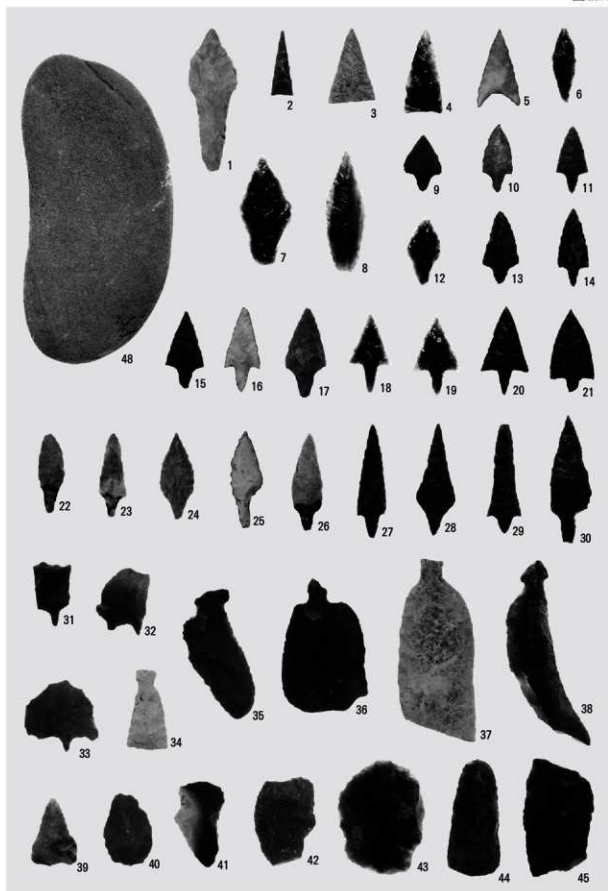




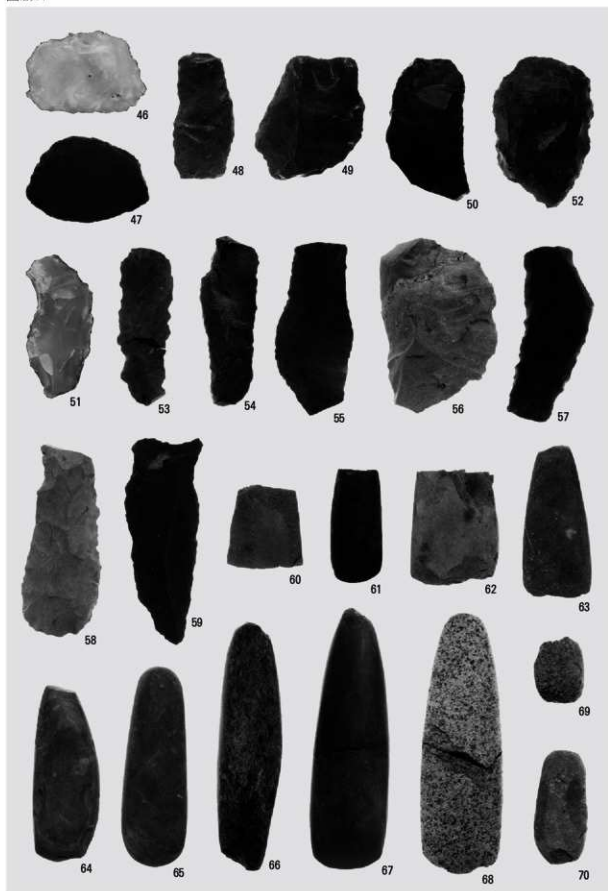
81 包含層出土の土器（7）図Ⅳ-11・12



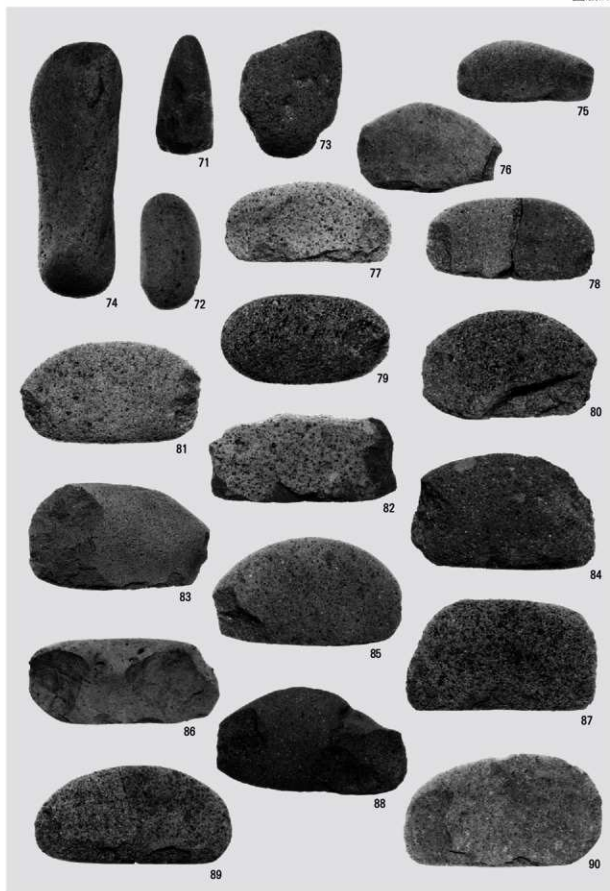
82 遺構出土の石器(1)(図Ⅲ-15~19)



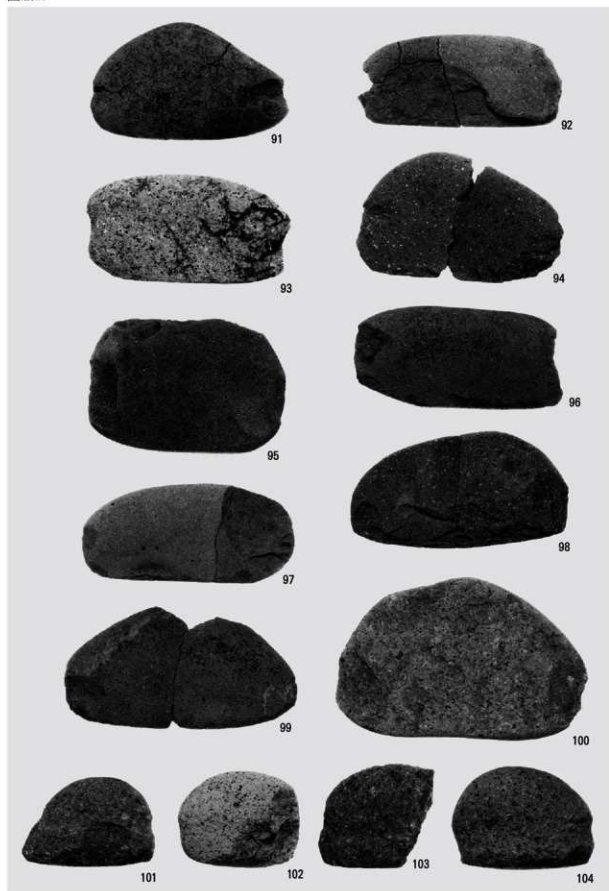
83 遺構出土の石器（2）（図Ⅲ-19）、包含層出土の石器（2）（図Ⅳ-13・14）



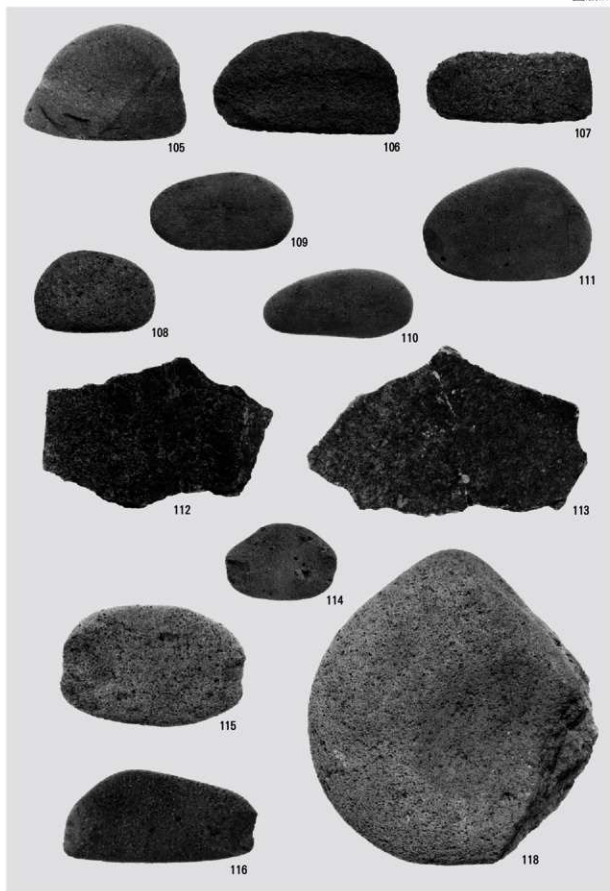
84 包含層出土の石器（3）（図IV-15~18）



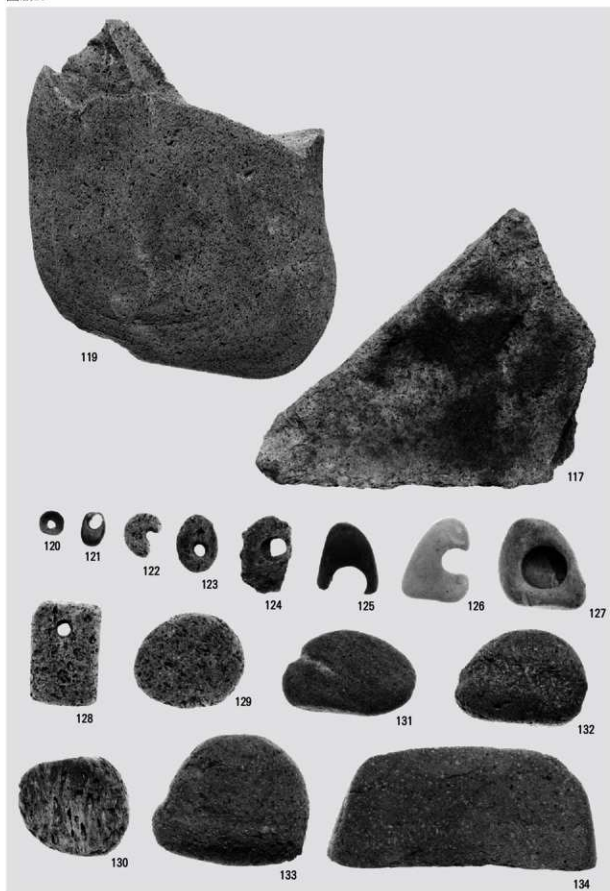
85 包含層出土の石器（4）（図IV-18~21）



86 包含層出土の石器（5）（図IV-21～24）



87 包含層出土の石器（6）（図IV-24~26）



88 包含層出土の石器（7）、土製品・石製品（図IV-26～28）

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまち いしくらいせいせき							
書名	森町 石倉1遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道(七飯~長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	②北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第247集							
編著者名	鎌田 望・新家水奈・立川トマス・大泰司統・村田 大							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL(011)-386-3231							
発行年月日	西暦2007年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
いしくらいせいせき 石倉1遺跡	北海道茅部郡 森町 字石倉町395番地ほか	01345	B-15-29	43° 0' 6"	142° 25' 3"	20020902 ~ 20021025 20030506 ~ 20030827 20040705 ~ 20041027	4,353	事前調査 (七飯~長万部)建設工事に伴う 高速道路北海道縦貫自動車道
ふりがな 所収遺跡名	種 類	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特記 事項	
いしくらいせいせき 石倉1遺跡	集落跡	縄文時代 中期中葉 後期前葉	住居跡 4軒 土坑 19基 集石 3か所	土器 貝殻文土器、円筒土器上層式、サイベ 沢Ⅷ式、見晴町式、榎林式、天祐寺式、 涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3 式、ウサクマイC式、恵山式(瀬棚南 川IV群)、後北式(C ₂ -D) 石器 石槍、石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、 スクレイパー、石斧、たたき石、扁平 打製石器、北海道式石冠、すり石、砥 石、石錘、石皿 土製品・石製品 円盤状土製品、耳栓、垂飾				
要 約	本遺跡は海岸線から約700m内陸の台地上に立地する。調査地点の標高は約32~44mである。遺跡は縄文時代中期前半の可能性のある土坑群、後期前葉の集落と土坑群である。住居跡4軒のうち、3軒は縄文時代後期前葉のもの、1軒は後期前葉と推定されるが中期前半の可能性もあるものである。土坑19基のうち10基は縄文時代中期前半の可能性のあるもの、2基は中期から後期の可能性のあるもの、7基は後期前葉のものである。集石は後期前葉の土坑に伴うものである。中期前半の可能性のある土坑群と後期前葉の土坑群は分布域が異なる。出土遺物は、土器58,914点、石器等5,817点、合計64,733点である。土器で最も多く出土しているものは縄文時代後期前葉のもの54,630点、次いで中期前半もの3,937点となっている。							

（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第247集

もり まち いし くら
森町 石倉 1 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19年5月31日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail]mail@domaibun.or.jp
[URL]http://www.domaibun.or.jp

印刷 柏楊印刷株式会社
〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号
TEL (011) 789-2377 FAX (011) 789-2376